

全集中最も整へるを「俳諧一葉集」「俳諧袖珍鈔」とす。〔百科〕

【三代の榮耀云々】「奥の細道」中の句。

【三代】 藤原清衡・基衡・秀衡の三代。この三代は平泉に住んで豪華を極めたが、秀衡の子泰衡に至つて源頼朝に滅された。

【榮耀】 エイエウ。榮華。エエウともいふ。

【一睡の中】 ひとねむりのうち。これは一炊の故事を思つて書いたのであらう。「少年盧生」といふ者が邯鄲といふ處を通り、或家に休息した。時に道士呂翁といふ者も傍に居た。盧生が貧賤を歎するのを聞いて一箇の枕を與へた。盧生之に枕して眠るに、一美人を娶り立身出世し、榮華を極め、年八十で死んだ夢を

見た。欠伸して目醒むれば、呂翁は傍に居り、家の主人が前に黍を蒸してゐたのが未だ熟してゐない。盧生憮然として歎じ、榮達貧賤畢竟一睡の夢に過ぎない事を悟り、呂翁に謝して立ち去つた。(枕中記に據る)

【大門】 總門。外構への正門。榮華物語、衣珠「この北の方の大門にその日の内についち築き」平家物語、五、「隨身を以て總門を叩かせらるれば」今、平泉の南方三里金澤村の大字に大門があるが、遠過ぎる。陸奥千鳥に「清水を離れて高館の大門あり、平泉より五里手前、城廓惣構なり。」とあるは、金澤村のを指してゐるやうである。金澤村には葛西氏の館があつたから、この大門が地名として遺つ

たものと思はれる。芭蕉の云ふ大門は高館のであらう。

【秀衡が館の址】

平泉停車場の東北にあつて、今も田圃で農家がまばらにある。從來御所屋敷の名がある。平泉館ヒライズミノヤカと稱し藤原氏三代の館の址。土俗、伽羅御所といふ。吾妻鏡にいへる嘉樂館である。

【金鶏山】

キンケイザン。平泉館の西方にあつて、高館の西南に當る。昔基衡、黄金の鶏を造り、山を築いて之を埋め、平泉の鐘護となしたといふ。封内風土記に云ふ「金鶏山、在ニ圓隆寺良隅、高館坤隅。傳曰、基衡以ニ黄金ニ造ニ雌雄鶏ニ築ニ山埋レ之、爲ニ平泉鎮護。又一説には秀衡が之を埋めたとも云ふ。この傳

への眞偽は兎に角として、金鶏山は伽羅御所から朝夕眺めた築山であつたらう。抑、金鶏とは金鶏星といふ星の中に栖む鶏で、この金鶏が先づ曉を報じて天下の鶏が之に應じて鳴くと云はれる鶏で、めでたい鳥であるので、山名としたのが、附會されて、黄金の鶏を埋めたといふ傳説を生じたものと思ふ。祖庭事苑「人間本無ニ金鶏之名、以應ニ天上金鶏星ニ故也。天上金鶏鳴、則人間亦鳴。」人間とは人間の世界をいふ。(大籤氏、奥の細道の新研究による)

【北上川】 この次に「眼下に見渡さる」などの語を補つて解されたい。

【義臣】 忠義の臣。義經の部下即ち辨慶・兼

房等を指す。泰衡は仙臺方面から平泉に退却したが、平泉に入ることが出来ず城に放火して更に北に逃れたのである。芭蕉・曾良二人が笠うち敷いて感慨に耽つた話題の中心は義經方の最後であつたらしい。曾良の句に「卯の花に兼房見ゆる白毛かな」ともある。

【すぐつて】 えらび抜いて。宇津保物語、吹上「えらびすぐりたる上手」

【この城】 高館。「まづ高館にのぼれば」からは、高館から眺めた景色を書いたものであることは明らかで、かくて「この城にこもり」とあるのは、今芭蕉が踏んでゐる高館なる事は動かない。

【功名一時の叢となる】 武士どもの功名も

恨んでは、平生ならば楽しむべき鳥の聲を聞いても心を驚かす。烽火は三箇月に亘つて戦争は止まない、他郷にゐては、故郷からの音信は萬金にも當る。旅愁のために白髪になつた頭を搔くと、髪は益、短いことが感ぜられ、簪を挿すことも出来ない位だの意。

【城春にして草青みたり】 城は廢墟となつてゐるが、春になれば草が徒に青く茂つてゐる。季は既に五月で夏であるが、こゝは詩句を吟じたまでである。

【笠うち敷きて】 この一語、芭蕉が夏草の中に笠を尻に敷いて感慨に耽る姿が目につぶ。

【利根】 トネ。源を群馬縣利根郡水上村大字藤原利根嶽に發し、茨城縣鹿島郡東下村字波

只一瞬で、今や屍は草むしてゐる意。功名は功を立て名を揚げること。

【國破れて山河あり】 國は滅びても山河は依然として舊に變らない。こゝは義經のこもつてゐた高館の滅亡を指すのであるが、義經を滅した泰衡も間もなく頼朝に滅されて平泉藤氏も亡びたので、その事をも云つてゐると見てよい。この語句は杜甫の春望の詩に基づいたもので全部の解釋は、

國は賊に破られても山河は依然として存する。城は廢墟となつて住む者も無いが、春になると草木が徒に深く茂るのみである。時世の非なるに感じては、平生ならば喜ぶべき花を見ても涙を流し、家人と別れてゐることを

先及千葉縣海上郡本銚子町字飯沼間に於て太平洋に注ぐ。全長五十八里。〔圖略〕

【潮來】 イタコ。常陸國行方郡の南端にある町。もと板來又は板久と書せり。元祿中潮來に改むと云ひ(郡郷考)、又東國の方言潮を「いた」といひ、鹿島に潮宮イタノミヤあるより、西山公かく改められたりとも云ふ(鹿島誌)。霞ヶ浦の東南に位す。この地は往時の板來郷イタノクサの地域にして、奥羽地方より常陸濱街道を経て、銚田チウテンより船に乗じ、北浦を渡りて利根川に出でて江戸に通ぜし要路に當り、四通八達の要津たりしを以て、殷賑を極め、又繁盛なる遊里として夙にその名著はれ、潮來圖誌に、潮來の里は東都五町街ゴウチョウマチに倣ひし廓なり、朝夕の出船入

船落ち込む客の全盛は云々」と見ゆ。今交通の衰滅せしより亦往時繁華の觀なし。町の南方を流るゝ潮來川を隔てゝ出島横はる。同島は一に十六島と稱へ、その南は利根川の流にして、その北は霞ヶ浦・北浦の水を帶べり。潮來節は徳川時代の中頃より潮來に行はれたるが、江戸各國にまで傳播して、今日にも存せり。その最も名高きは、

潮來出島の眞菰のなかで、あやめ咲くとはしほらしや。

なまじなまなか始がなくば、かほどこがれはせぬものを。

ぬしの歸りを河岸から見れば、船に帆かけてかけもなし。

おまへつりばりわしや池の鯉、鮒・鱒・鯰、つられながらも又かへる。〔百科〕

【眞菰】 マコモ。禾本科、菰屬の多年生草本。高さ五六尺に達す。葉は平行脈を有して細長し、花は單性、雌雄同様、大形の圓錐花序に排列す。葉は席の料に供し、種子及び新芽は食料となる。我が國、沼澤に自生す。かすみぐさ。かつみ。こも。はながつみ。ふし。しば。よどのふし。〔大國〕

【葎切】 ヨシキリ。葎切。割葎。鳥類中、燕雀類の一種。形・色共に鶯に似たれども、尾長くして腹白し。夏日、葎生の中に喧しく鳴く。よしはらすずめ。ぎやうぎやうし。からからし。けら。〔大國〕

【漫々】 マンマン。(一) 美しい色のさま。

(二) ひろくてはてのないさま。〔語源〕こゝは

(二)

【藍を溶いてゐる】 アイをトいてゐる。藍をとかしたやうな色である。

【正しく】 マサしく。たしかに。〔大國〕

【廣重】 ヒロシゲ。歌川派浮世繪の畫工。同名前後三人あり。

(イ) 初代。本姓は安藤氏、幼名は徳太郎、後十右衛門と改む。一立齋と號す。その父は定火消の同心なり。幼より師なくして善く畫く。初め岡島林齋に就きて狩野風を學び、後、歌川豊廣の門に入りて浮世繪を學ぶ。文政三年始めて草雙紙に畫き、これより風俗美人畫・

鳥羽繪・讀本・草雙紙を多く畫き、みな世に行はる。されど廣重の長所は浮世繪山水にして、遠景寫法の妙に至りては他畫工の及ばざるところなり。その最も世に行はれたるは、東海道五十三次の錦繪なり。その他木曾街道六十九次・諸國名所・江戸名所百景・富士三十六景等あり。安政五年九月六日歿す、六十二。淺草新寺町東岳寺に葬る。本課は初代をいふ。(ろ) 二代。初名は重宣。一代の門人にして、師家を繼ぎ、二代廣重と稱す。よく一代の筆意を傳へたり。後、家を出でて再び重宣と號す。同門の重政代りて家を繼ぎ、自ら二代と稱す。實は三代なり。専ら錦繪山水を畫きたれど、遠く重宣に及ばず。

歌川派は歌川豊春より出づ。豊春初め芝宇田川町に住したるより「うた川」と稱す。流行の風俗を書きて一家を成せり。最も浮世繪・錦繪を多くかき出だして名ありき。〔百科〕

歌川豊春(一龍齋)



こゝに「廣重の藍色である」とあるのは、廣重は獨得なあざやかな藍色を用ひたからである。

【筑波】 ックバ。筑波山。茨城縣常陸國筑波。眞壁・新沼の三郡に跨る山。北は加波・足尾の諸山に連なれど、南は直に關東平野に面するを以て、遠くより望見するを得べく、随つてその名高し。山頂は男體・女體の二峰に分れ、女體の頂上は海拔二八九七尺、男體はこれより二十尺低し。男體の頂上に筑波山神社奥院あり、近年の改築に係り、壯麗堅牢より風雨に堪ふべし。その傍に山階宮の建てたまひし測候所あり。女體の頂上にも小祠あり。〔百科〕

【山容】 サンヨウ。山のすがた。

【純乎】 ジュンコ。純然に同じ。まじりけのなき貌。〔天字〕

【菖蒲花咲く云々】 アヤマサク。潮來節のところ参照のこと、眞菰の中に菖蒲花の咲いてゐる趣をいつたものである。

【情調】 ジャウテウ。(一)ふし。調子。(二)趣。氣持。〔廣辭〕こゝは(一)

【赤銅色】 シヤクドウイロ。赤銅の如き紫黑色。〔廣辭〕

【伊那】 イナ。長野縣の南部に在る一邑。天龍川上流の右岸に臨み、上伊那郡衙の在る所なり。下諏訪を距ること八里。人口約一萬二千。〔百科〕

【天龍川】 信濃・遠江兩國に亘る大河。諏訪湖水西北に溢れて赤石・木曾兩山脉の間を略々南流し、行々兩山脉の諸水を集め、信・遠

・三の國境より南下して東海道に出で遠州灘に注ぐ。全長四十八里。〔百科〕

【魚梁】 ヤナ。川瀬などにて魚を捕ふる装置のもの。木を打並べて水を堰き、一部を明け、そこに流來る魚を梁簀イナズメに承けて捕ふる様にせるもの。のぼりやな。くだりやな。〔天國〕

【伊那節】 イナブシ。伊那地方の俗謡である。木曾へ木曾へとつけ出す米は、伊那や高遠の餘り米。

はるか向ふの赤石山に、雪が見えますほのぼのと。心細いぞ木曾路の旅は、笠に木の葉が舞ひかゝる。

【飯田】 イヒダ。信濃國伊那郡。

【下川路村】 シモカハヂムラ。飯田町の南二里。

【相挑む】 アイドむ。相争ふ。

【天龍峽】 テンリュウケフ。信濃國下伊那郡下川路村の東南部、飯田町の南約三里の所にある峽谷。峽の名は岡山の碩儒阪谷郎廬の命名に係るものと云ふ。〔百科〕

【遠州二俣】 エンシウフタマタ。遠江國山香郡二俣町。

【展開】 テンカイ。(一)のべひらく。(二)軍隊にて、密集隊形より戦闘隊形に移るをいふ。〔大宇こゝは(一)〕

【信濃川】 千曲川と犀川との合流なり。千曲川は源を甲信の境上金峰山の北麓に發して佐

久平を貫流し、犀川は木曾山脈中の一秀峰駒ヶ岳の北麓に發源して松本平を貫流し、兩河善光寺平の中央部いはゆる川中島の地に會し、平野を北々東に流下し、飯山町近傍に至りて右岸より夜間瀬川・馬曲川の二流を合したる後、兩岸の山嶽漸く迫り來りて河谷次第に狹窄し、毛無火山の裾に沿ひて一大彎曲をなす。これより河流東北に向ひて毛無火山群と關田山脈との間に於て峽谷をなし、屢々急瀬を作りて遂に越後に入り、一大縦谷を北々東に下り、大割野附近に於て右岸より下高井火山群中の諸水を合せ來れる中津川を合し、東北に流る。後又右岸に清津川を入れて川口附近に達すれば越後・上野の境上三國山塊地

方に發源する魚沼川の一大支流を合し、長岡市の西南に至りて左岸より澁津川を容る。長岡市よりは全く大河下流の特相を備へ、水流極めて緩なり。それより猿橋川・定河戸川・黒川を合し、地藏堂に於ては西川を分派し、道金に於ては中ノロ川を分つ。三條町に至りて右岸より五十嵐川を合したる後は平野間を北々東に流れ、新潟・沼垂の間より日本海に注ぐ。全長約八十里。〔百科〕

【詩趣】 シシユ。詩に作るべき趣。又風流なおもむき。〔大宇〕

【信越八千八河】 ハツセンヤカハ。信濃川に入る支流の多きたとへである。

【溶々】 ヨウヨウ。(一)廣大なる貌。又、間

暇ある貌。(二)水の盛んに流るゝ貌。〔大宇こゝは(二)〕

【彌彦】 ヤヒコ。新潟縣越後國に在る山。西蒲原郡の西部、日本海に枕みて峙ち、山頂彌彦神社附近に於て海拔二、一五〇尺。山甚だ高からざるも、平野の一隅海岸にあるを以て、山容秀麗、眺望開闊、この國第一の靈山と稱せらる。〔百科〕

【角田】 カクダ。彌彦山の北、石瀬山につづいて隆起してゐる、一、五九〇尺。

【醜して】 セウして。(一)神を祭る。(二)冠娶の禮。(三)祭。(四)盡く。(五)壇を設く。(六)祀禱す。(七)懺と通ず。〔大宇こゝは(一)〕彌彦・角田の二峰に水を供へて祀る意。

【萬代橋】 〔百科〕には長さ四百三十間とある。

【日和山】 ヒヨリヤマ。阿賀川と信濃川の會

する點の西岸にある。

【瞰望臺】 カンパウダイ。見晴らしの場所。

【雪もよひ】 雪を催すこと。雪もやう。〔大國〕

【潺湲】 センクワン。水のさら／＼と流るゝ

貌。又、水の音。〔天字〕

【暴虐】 バウギヤク。無理非道に人をくるし

むること。〔天字〕

【原始時代】 原人時代と同じ。人類の尙ほ蒙

昧にして、事を記す文字なく生を養ふ生業な

く、ただ木實などを食ひ魚鳥などを捕へて棲

息せし太古の時代。〔大國〕

【縮圖】 面積を小さく縮めて表した圖。

鑑賞

考へ味ふ生活。これが文章を芽ぐませる土である。我々は何よりもよく考へ、深く味ふ心を以て日々の生活を送り迎へしなればならぬ。心全體で味ふ、そこから感興が生れて来る。感興を以て裏づけるといふこと、換言すれば心の中に溶かし込むといふことである。もう一つ裏返しにして云ひ換へると、生命を吹き込むといふことである。活かすといふことである。すべての經驗に生命を吹き込んで十分にそれを活かすやうな生活、さういふ生活でなければ文章は生れない。文學は生れない。更に一步を進めると、かういふ生活でなければ眞の生活とは云はれないのである。

本課は作者の經驗したものに生命を吹き込んだ作である。臆測を逞しうするのはよくないが假に今作者の心持になつて考へるとする、――作者は何か書かうとした、そこに考へ浮んだのは十六歳の少年時代嘗て旅を試みた北上川の印象であらう。作者は當時の若い記憶を明かに復活したのである。そこに勃然たる感興が湧いた、先づ心に浮んだのは自然の力と人間の力との偉大といふことである。この感興あるヒントは筆の馳せ行くまゝに平泉てふ史蹟をも想ひ起させ、次では利根・天龍・信濃の如き我が國に於ける代表的河川にも想到して、或はその男性的象徴を讚し或は詩趣を味ひ、或は人間文化の發達てふ大問題にも想到し、遂に大河の禮讚となつたものと思はれる。作者はさうでないと思ふかも知れぬ――大河といふ既定の考案のもとに書いたものかも知れぬ。併しそれはどうでもよい。吾々は經驗に生命を吹き込んでそれを十分に活かしたといふ點を味ひたいのである。そこに眞の生活といふものが認められるからである。

次にこの文章が主觀的のものとなり、吾々人間に力強い暗示を與へてゐることである。修養上資することの大なるは今更いふまでもあるまい。

一一大河

作者

【千家元麿】 センゲモトマロ。出雲千家家の出。明治二十年六月東京麴町に生れ、東京府立第四中學校を経て慶應義塾大學に學んだ。嘗て銀箭峰と號して俳句をつくつたことがあるが、「白樺」の運動に加はつて、武者小路實篤・長與善郎等と共に、その人道主義的精神を詩壇にもたらす上で多くの功績があつた。雑誌「詩」を經營し、また佐藤惣之助と共に「嵐」を編輯したこともある。

作者の詩は現實の直接的な印象を歌つたものが多い。それらを一貫して流れてゐる清い美しい力ある生命への憧憬、その表現の單純と直截は、確に特色ある生活の詩人たるを思はせる。

その詩集には、大正七年五月「自分は見た」を玄文社より、八年九月「虹」を新潮社より、大正十年四月、「野天の光り」を新潮社より、同七月、「太陽の愛」を聖書文學會より、十一年八月、「炎天」を新潮社より出版した。その他、十五年の「夏草」同人との合著「麥」があり、又小説集もある。（詩の鑑賞——百

田宗治・現代詩の研究——白鳥省吾

大正九年三月「新潮」所載の千家元麿の印象（武者小路實篤・佐藤惣之助等執筆）のうち、長與善郎は次の如く言つてゐるのは、人及び作品の一端を窺ふに足りる。

「千家に逢つて感じた事はいろ／＼ある、先づ驚くべき眞剣さに打たれた、眞心、誠實に打たれた。千家は皮肉でなさ過ぎる、眞直だ。眞心ばかりと云つていゝ程、又眞心ばかりの中でなければならぬ程率直で、敏感で、眞摯で、優しく、熱病に憑かれてゐる如く、何かの火に驅り立てられ、燃えてゐる。しかしいくら燃えてゐる時でも千家は極端に遠慮深く、人を怖れ、他からの壓迫に少し病的な程神経質であるやうに又人を壓迫する事が出来ない、それ程千家は優しい。善良な天才に見られる一種の「弱さ」を千家は多量に持つてゐる。むしろ千家位壓迫や、脅迫を感じ易い人間を自分は見つた事がない、一種の脅迫感、千家の一特色である。千家は憑かれた者のやうに運命や人間や物質やその他のものから直ぐ脅迫をうけ、お堪らなくなつてそれから逃げ出す。毎も随分貧乏であるが偶々多少の金が入る時にはその金からさへも時々は脅迫をうけて逃げ出す。そしてその壓迫や脅迫をうける事が強いだけ、又自由を慕ひ、愛する感が強い。恐ろしく淋しがりのやのくせに、人懐かしがりのくせに、一方又恐ろしく孤獨を愛し、慕つてゐるのはその故だ。人間や、いろ／＼

の物から脅迫される時、自分の中の或る感じからすら脅迫される時、千家は自分の見馴れてゐる郊外の自然の中へ散歩に——むしろ救はれにゆく。自然と言つて千家にファミリヤな東京の郊外が一番いゝらしい。その中で千家は本當に解放された者のやうに自由の息を吐き、林檎を嚙りながら、大空を眺め、木や畑を眺め、その中の人物を眺め、傍の道を通る荷車や、その他の物の音に耳を傾けながら幸福に酔ひ、又地に降りて鷹のやうに鋭い、力に充ちた充血した眼を睜り、氣違ひのやうに歩き廻り、その恍惚の中にむら／＼と湧いて來る限りない詩に苦しい程酔つてゐる。併しその時、千家は孤獨な不幸な境涯の中に暮してゐるお母さんの處に歸つて息子のやうに安心して、心から自由な息を吐いてゐる。——千家の藝術について云へば最も深い心の印象派と云へると思ふ。千家は徹頭徹尾「感じ」だ、深い客觀のうち自づと主觀の深さがうかがはれる行き方だ、千家のやうに純粹に深く、本質的に素直に客觀の出來る詩人は多くの傑れた詩人の中でも餘り類がない。ホイットマンもブレークもその他の詩人も千家よりはすつと主觀的だ。千家はもつと直接法だ、露骨な「感じ」派だ。その點晩年のホツホに一番近いかも知れない。この「感じ」は深い心から來てゐる、深い意識といふよりは深い「心」だ。千家は意識的に順を追うて考へ、構造し、組立てた考や、アイデアを根氣よく出してゆく質ではない。もつと先へ行つて見たら又いくらか違つてくるかも知れないが、

出 所

もつと衝動的で、突發的だ。千家位概念的でない人間は珍らしい。直ぐ感じ、直ぐそのまゝ現はす所に、千家の特色がある。説明はない、理窟はない。」

「炎天」全一冊。大正十一年八月廿九日新潮社發行。定價六拾錢。

その序に曰く、

俺の詩は幼稚だ。だが幼稚の中にも何か閃めきがあるだらう。その光りが今に俺の詩をものにしてくれるだらうと思ふ。俺の心を通して來る感じが讀者の心に閃めき、戦かしたり、よろこばしたりしてくれれば幸だ。俺は勝手に歌つてゐる。俺の歌によるこびが感じられる人があつたら幸福だ。俺の歌がつまらない人には縁が無いばかりだ。こゝに集めた詩は最近作つた新らしいものばかりで、未發表のものばかりだから、讀者は買つても損はしなないと思ふ。

本課はその五十八頁にある。

要 旨

前にも述べた通り作者は現實的傾向を顯著に示すものである。散文に近いほどの自由な大膽な表現は内容形式共に最も個性的である。誰しもの日常生活の中に詩を見出して之を詩に表現するといふ事

は、これまでのやうに詩を限られたものとし、詩の門に入り難しと考へられた人々への、寛やかな詩の解放である。

本課に於ては生活の感受性を豊富にし批判することを教へ、又生活を素直に受け入れて、個性的な或る断面を示すことも詩であるといふこと、及び言葉の上からも内容の上からも詩は誰にでも解るといふことを知らせたい。

通釋と鑑賞

第一聯は、作者が散歩などに出て河上に横へられた橋の上から汪洋たる大河の力強い姿に見入つた時の感じである。そこには町から吹いて来る生き／＼とした風と河から吹き上げて来る涼しい風とが恰も自分の呼吸もとまるほど力強く吹きつけて來るといふ、さういふ空氣の中に自分は包まれるといふのだ。かういふことは誰しも體驗することであるが、さて表現しようとするれば、かなりむづかしいことと思ふ。「生々した風と波の呼吸は以下三句」は誠にこゝの現實の印象を巧に歌つたものといへよう。第二聯は、河上にかゝる多數の橋とか、河を挟んで樹立する煙突や人家を眺めることを愛し、又黒い鐵のやうな流に、男性的な力強さを感じて眺め入るといふのである。「黒い鐵のやうな流を、力を感じて眺め入る」といふ句に都會を貫流する大河の特色がうかがはれると思ふ。

作者は世にも稀な純眞の詩人である、又詩を完成させる事を知らない、生れたまゝの詩人である。彼にとつては近代のあらゆる詩術も、また特殊の詩的教養も少しも必要でない。ただその唯一の詩感を以て、又彼にのみ與へられたその率直で、直覺的な言葉を以て彼は彼自身を語り、またその觀照を披瀝する彼の詩はどれも素描スケッチであり、習作エッセイであり、そして額縁なしの繪である。

作者の言葉は、どれも平凡な、ありふれた言葉ばかりであるが、それが一度この詩人によつて使はれると底知れぬ光彩と生き生きした力を持つて來る。ゆがんだものはゆがんだまゝ、生硬なものは生硬なまゝにその用語の強い實在性を持つてゐるのはこの作者の驚くべき特質の一つであらう。

併し白鳥省吾氏などは、「私は日常生活そのものが詩であることを主張するが、餘りに何もかにも詩であるとは言へない、詩にはいかなる場合にも歌はんとする焦點の明確な、自由のうちに或る均齊が欲しい。日常生活の印象の斷片の羅列は直ちに詩ではない、また、一つの事象に對して粗雑な線畫で、歌ひ残された部分があるとしたら遺憾な筈である。千家元麿氏の詩には渾融した生氣ある詩と、ほんの短い斷片詩との二種類があるやうだ、そして同じ短い詩にも、一は詩であり得るが、一は獨り合點の域を脱してゐない。」とも云つて居る。この點は教授者が然るべく導かれない。

参 考

夕 空

澄みわたる夕空

何といふ澄み方だ

凄いほどの清さ

太陽は沈んだが

不思議な光が空を明るくしてゐる

勿體ないほどだ

天の有難さをつくづくと感じる

楽しい聲

どこからか

正しい人間の聲は

聞えて来る

何といふ楽しげな聲音だ

何といふ愛に満ち

優しさにをのゝく聲音ぞ
待ちくたびれた人々よ
楽しい聲は聞えて来る
誰が歌ふのか
その聲は誰が聞いても楽しくて
心が清まり元氣づく歌だ

夏の朝

夏の朝のたのしさ

日はまだのぼらない

人氣ない道は靜かに眠つてゐるやう

露を踏んで山に登つて

百合を折つてかへる道

空はうらゝかに晴れてゆく

何といふ楽しい世界の眼ざめ

露は輝き家には煙り

彼方此方に大地はその美しい顔を

靜かに輝かして見せる

作家の態度

予が短歌を作るのは、作りたくなるからである。何かを吐出したといふ變な心になるからである。この内部急迫 Frank から予の歌が出る。如是内部急迫の状態を古人は「歌ごころ」と稱へた。この「せずに居られぬ」とは大きな力である。同時に悲しき事實である。方便でなく職業でない。かの大劫運のなかに、有情生來し死去するが如き不可抗力である。予が「作歌の際は出鱈目に詠む」と云つたのはこの理にほかならぬ。予は嘗て「短歌は直ちに生のあらはれでなければならぬ。まことの短歌は、自己さながらのもでなければならぬ。一首を詠ずれば即ち自己が一首の短歌として生れたのである。まことの歌人は一首を詠ずるのに身の細るをもいとほぬであらう」と云つたことがある……

透徹した自己客觀は鈍根の堪ふところでない。それゆゑ予はおのれの分身をつくづくとながめて、かの淨玻璃にむかふが如く涙を落さねばならぬ。予の歌は予の分身なれば時たま自らの歌を讀返して、なるほど此は自分かとなつかしむことがある。いとしけれども醜さの暴露である。予は萬人に示さむがために歌は作りたくない。作歌の際は願はくは他人を眼中におきたくない。無常の世の短き生涯に、願はくはまことの己の一部を残したい」おのれに親まんがためである。

—齋藤 茂吉—

一二宿かり

作者

【志賀直哉】

シガナホヤ。白樺派同人。明治十六年二月二十日宮城縣石卷町に生れ、學習院卒業後東京帝國大學文科大學に入学、半途退學した。氏は最も眞摯なる作家である。決して多作したり、濫作したりしない。そして權謀術數を以て文壇に臨むが如きことは、氏の最も忌むところである。氏は人生に對して肯定的で正義と愛とを尊重するが、それを主觀的に表現的に出さうとしない、あく迄も純客觀的で、善惡・美醜・邪正などはつきり區別するやうなことをしない。その表現には渾然としたところがある。氏は正しいものを尊敬するが、正しからざるものにも理解と同情とを以て向ふ。氏は公平である、偏しない、過激に流れない。それは「正義派」「網走り迄」などを見てもわかる。が、氏には世紀末的苦悶と憂愁の影が明かに附纏うてゐる。その神経はかなりに尖つてゐる。感覺も非常に鋭敏である。又感情の激しい點もある。それが時に彼の作品に病的な暗いところを見せる。が、氏はその

澄み切つたやうな清い心を以て、努めてそれを抑へ付けてゆかうとする。そこに氏の心的葛藤が明かにある。「和解」は、父に對する氏の心的葛藤の表現で、それは氏の近作「暗夜行路」と共に氏の代表作と目すべきものであらう。氏は多く短篇に筆を染めて、右の外「留女」「夜の光」「荒絹」「あはれな男」「断片」「大津順吉」「壽々」「或る朝」等を出してをる。

志賀氏の藝術の特色

同じ「白樺」の同人でありながら、武者小路實篤・故有島武郎氏などと多少行き方を異にした理想的な作家に志賀直哉氏がある。武者小路・有島氏などは、萬人を優しく包み暖めようとする廣い人道の愛である。所謂ヒューマニタリアンの愛である。ところが志賀氏は同じ人道主義派の作家と認められながら、その抱く愛に大きな相違がある。志賀氏の愛は、寧ろ一人を強く深く愛さうとする愛である。それは無選擇、無判斷の上に成立つのではなく、十分な選擇と判斷作用とに依つて醇化され訓練された愛であり、同情者である。所謂ヒューマニストの愛である。人格としての統一は、この種の人に多く見受けられる。破綻がない、すぎがない、眞直の道を行く。苦悶をただあるがまゝの苦悶として置かない。理智に依つてその苦悶を整理する苦悶の犠牲たるべく餘りに理智的である。

志賀氏の作品は丁度秋の深く澄んだ夜空にくつきりと輝く星のやうに、すつきりとした他から區別

し得られる鮮明さと獨自性を持つてゐる。どの頁にでも志賀氏の特色ある實印が押されてゐる。而かもその實印は形があるやうでゐて、實は形のない實印である。氏が努力して書いたものである限り、その無形の實印がはつきりと志賀氏を物語つてゐる。どんなに同じやうな作品の並んでゐる所に於ても、志賀氏の作品だけは、その一つ々々がそれぞれ別個の姿をはつきりと保存してゐる。「大津順吉」や「和解」の如きはある點までは題材が同じであるが、獨立した立派な作品となつてゐる。「大津順吉」として書かなければならなかつた作品であるし、「和解」は、「和解」として書かなければならなかつた作品である。「正義派」と「出來事」とでは矢張り同じやうな事件を扱つてゐながら作者が與へようとしたものは全く別のもの、獨立したものである。「正義派」は、「正義派」として讀み、「出來事」は、「出來事」として讀んで、始めて志賀氏が心の底から分つて來る。同じ一つの心から生れた作品であるが、どの作品をも同じやうな注意を以て讀まなければ、本當の志賀氏を理解することは出來ない。それほど志賀氏の作品には、獨自性と鮮明さがある。

志賀氏の作品は氏の鏡である。實に微妙に、感光板が外界の光の陰影を寫し出すやうに鮮かにその作品は氏の心を寫してゐる。今日の文壇にもサイコロジストと言はれる作家はその數が決して尠くない、けれども氏程に、自分の心の微妙な陰影を刻明に出す作家は稀ではないかと思ふ。吾々は氏が

アリストだといふ定評のあるに比して、そのサイコロジストである一面を見られてゐないのは不思議に思ふ。氏は最も簡単な心持の説明や、ある些細な事件の描寫の中に深い心理の微動を巧みに描いてゐる。何もサイコロジストといふのは、例へばフランスのブルジエーの如く、或る一人物の心理を長々と心理的な言葉で説明する者の謂ではない。一つの動作、一つの會話、一つの出來事の中から、特色のある心の動きをめぐり出してこれを描くのが作家としてサイコロジストの上乗のものであると思ふ。我が文壇にもサイコロジストといふ看板の下に堂々とその聲價を高くしてゐるものもあるが、さういふ人の作品にはどこかに心理をもてあそんでゐる風がある。従つて生きた心理を往々にして取逃し、心理のなきがらだけを大切に表現するやうな場合が決して尠くない。志賀氏にはそれが無い、氏は適確に明瞭に他人の見逃してゐる心理を捉へて來る。

さういふ微妙な心理を捉へるには、更に鋭い觀察力と直覺力とがなければならぬ。幸にして志賀氏はその觀察力と直覺力とを恵まれてゐる。この觀察力と直覺力とはよく人間心理の急所急所を捉へるべく敏活に作用する。そして氏にはそれによつて捉へたものを保存すべく、頭腦の冷靜さがある。氏は決して物に酔ふことを知らない。假令酔つても、感激しても、すぐ醒めることを忘れない。……要するに氏の藝術は色彩の藝術ではない。この意味で氏は華美な裝飾澤山なものを好む人々には好

かれない。氏の藝術は又臭ひの藝術でもない。味の藝術である。かみしめればしめる程味の出て來る藝術である。(日本小説大系、大正篇、新技巧主義の文學)

出 所

「白樺の森」一冊。新潮社發行。白樺同人が美術館創立目的のもとに編して發行したもので、その前後に出た「白樺の國」「白樺の林」などと同様なものである。

要 旨

宿かりの死に至るまでの顛末を記して虚榮的な外面優秀にのみ憧るゝものゝ遂に破滅失望に終るべきを暗示したものである。

今少し詳しく云へば、若い時分から偉くならう出世しようといふ慾望に燃えてゐた者が、田舎に一つの地位を得て、周圍の者を見廻して自分の偉さ、自分の地位の高さを自負してゐると、ふと自分よりも偉い高い地位の人を見て急に今の自分が恥しくなり、都に出て勉強し苦勞した末、漸く以前よりはずつと高い地位を得た。初はとても自分では務まりさうにもなかつたが、何時の間にかよくその地位を辱しめないやうになつて、こゝに自分でも得意になると共に、偉くならう、出世しようといらゝした心持は少くなつた。

然るに彼はこゝに彼の舊友で今の自分よりもつと立派な地位に立つてゐる者に出會つた。彼はこゝに於て又今の自分に失望してしまつて、現在の地位をも捨て、しまつた。そして何か偉いものを求めるやうに社會を漂浪した。さうしてゐる間に心身疲勞してひどく憂鬱な人となつた。彼はなぜ田舎の一小吏でゐなかつたかをつくづく考へた。そして田舎を出た時の夢想は疾くに實現してゐながら、何の幸福も與へられなかつたことをしみじみ淋しく感じて、たうとう死んでしまつた。

前半の意義を人事に移して見たら、かうであらう。慾望の満たされること、幸福とは自ら別物であることを示し、この二つの調和することの出来ない心の淋しさを表すことがこの文前半の主眼である。

後半はかゝる悲劇、さうした最後に對して、世間はただ冷然と一つの事實として取扱ふだけで、涙ある同情ある見方をしないものだといふことを表したものである。

本課は所謂形式教授の方面には何の骨折をも要しない。通讀して、この大意を掴ましめ、その隠れた寓意を發明させる方に最も力を向けたいと思ふ。

段落

一、大きな榮螺の……海の底をのそくと歩いた。(六二頁の七行目まで)

彼は己惚れた。

二、彼は傍に何かごりごりと……それを曳きすつて歩いた。(六三頁の二行目まで)

彼は恥かしさを感じた。そして自分の殻を脱いで法螺貝に潜り込んでやつと安心した。

三、彼はまた大きくならう……慾望も燃立たなくなつた。(六四頁の四行目まで)

彼はまた慾望に燃立つた、そして法螺貝一杯になるまで成長し、前ほどの慾望は無くなつた。

四、その時彼は……そして死んだ。(六六頁の四行目まで)

更に大きな法螺貝に出くはした彼は絶望の極、憂鬱になつた。そして一生をふり返つて見た。遂に彼は死んだ。

五、そこに、ちやうど……(終りまで)

漁夫等は彼をアルコール漬にした。

漁夫等は彼が苦悶の表情は固より、彼の心理については何も知り得なかつた。

解釋

【宿かり】 寄生蝦・寄居蟲。海産の甲殻類の

一。體は蝦と蟹との中間の形を呈し、大小一

對の蚌並に長短四對の脚と、蝦と同様の眼並に觸角を有す。而して腹部は全く柔軟にして、

これを被護する皮殻を彼らず。故に螺類の空殻を拾ひてこれに棲む奇性あり。もし強敵の襲ふあるときは、體は全くこれを殻中に收めて害を免る。又身體成長するときは、更に大形の殻を求めてこれに移る。我が國沿海産のもの十數種あり。〔百科〕

【榮螺】 サザエ。榮螺子・拳螺。腹足類に屬する貝。介殻は拳狀をなして厚く、螺級には強壯なる管狀突起あり。殻口は大にして圓く、内面は平滑にして稍々眞珠色を呈し、外面は暗蒼色なり。へたを有し、石灰質にして堅く、その内面には螺紋、外面には螺梁あり。我が國にては東海より西南に多し。潮流の通過佳良なる近海にて深さ四五尋以下の岩礁に

棲息し、海藻等を食とす。〔百科〕

【きしやご】 細螺(きさご)の異名。軟體動物、腹足類の一種。海産なり。殻はかたつむりに似て小、表面は淡青色にて麗しき模様あり。しただみ。〔天國〕

【うぢうぢ】 ためらひて進退しかぬる狀にいふ語。ぐづぐづ。もづもづ。うじうじ。躊躇。逡巡。〔天國〕

【己惚】 ウヌボレ。うぬぼれること。自慢。自負。〔天國〕

【中返り】 チユウガヘリ。宙返りに同じ。空中にて身を轉回すること、とんぼがへり。〔天國〕

【大きな者のみが感じられる寛大な心持】 他に對して寛大な心持を感じるのは、自分が

他の者よりも優れて大きいから、自然心に餘裕が出来るので、この心持はすぐれて大きい者でなければ生じない感じである。こゝで「寛大な心持」といふのは、おほ目に見るといふ程の心持と解してよからう。

【拔足】 ヌキアシ。足音を立たせじと、足を抜き上ぐるやうにして歩むこと。驚歩。差足の對。〔天國〕

【差足】 サシアシ。歩む時、音のせぬやうに足をつかふこと。その踏むには挿すが如く、上ぐるには抜くが如くなれば、さし足ともぬき足ともいふ。〔天國〕

【法螺貝】 ホラガヒ。軟體動物中、腹足類の一種。殻は紡錘形にして、重厚、長さ一尺四

五寸に達し、表面、紅・褐・白など種々の波紋を有す。我が國にては専ら琉球に産す。昔時、殻頂に孔を穿ちて吹奏に供せり。ほらのかひ。吹螺。梭尾螺。〔天國〕

【いらく】 苛々。刺々。氣のせくさまにいふ語。もどかしく。じれつたく。〔天國〕

【素敵に】 最もすぐれたること。仰山なること。澤山なること。〔天國〕

【伊勢蝦】 イセエビ。甲殻類中、胸甲類、いせえび科の一屬。體の長さ八寸乃至一尺に達し、頭胸部及び腹部の二部に別かたる。頭部に硬き甲を被り、一對の有柄複眼、二對の觸角、五對の脚を有す。口の周圍には、尙六對の附屬物を具ふ。第一觸角は二本に分れ、そ

の一本の先端に嗅器あり、その本に聴器を有す。全身濃赤褐色にして、雌は第五對の脚の中央に生殖孔を具へ、雄は第五對の脚基に之を有す。鎌倉蝦。縞蝦。相良蝦。海蝦。天國

【龍の落し子】 魚類中、硬骨類の一種。長さ一二寸乃至三四寸。體は硬き甲にて被はれ、甲は環節狀をなす。尾は細長くして鰭なく、他物に卷絡するを得べし。頭はやゝ馬に似たる外觀を具ふ。雄は腹部に袋あり、卵をこの中にて孵化す。我が國、各地の近海に産す。うみうま。かいば。たつのこま。たつのすてご。みづちのこ。りゆうぐうのこま。天國

【けげんな顔】 怪訝な顔。不思議さうな顔。合點のゆかぬ顔。いぶかしげな顔。天國

【萎える】 ナえる。力がうせおとろへる。
【只の宿かり】 普通の宿かり。
【夢想】 ムサウ。(一)夢に思ひ見ること。夢の中にも忘れず想ふこと。(二)夢中に神佛の示現あること。神佛が夢の枕に立たせ給ふこと。(三)轉じて、物の製作の不思議に巧妙なるにいふ語。「夢想枕」「夢想窓」(四)夢のやうにあてもなき想像を描くこと。空想。天國
こは(一)
「夢想は遠の昔彼に来てしまつた」は、彼が夢想してゐた慾望は、とつくの昔に實現されてゐたのの意。
【參つて來た】 負けかけて來た。降參しかけた。こゝは死に近づいて來たの意。

【眼を眠つた】 メをツムつた。

【表情】 ヘウジヤウ。心情を外貌にあらはし出すこと。天國

【固より】 もちろん。

【心理】 精神の現象を支配する理法。心の道理。天國

鑑賞

宿かりが他の貝殻に身を入れて容易に成長して行く所に着眼して作つた面白い寓話である。虚榮に誇るものゝ愚かさは自己自身に本來の價値なきに氣づかぬものである。きしやごの笑ひ囃す意味を解する能はず却つて彼等を「馬鹿どもが」と眼下に見下す。見下す自身が馬鹿である事に氣もつかないで寛大な心持を味はつて得意がつてゐる。虚榮、愚かな矛盾、お目出たさ、實にそんなものであらう。さういふ風に自分より以下の者に對しては得意がつて居る代りに、自分より上の者を見るとたまらない。恥しいやら、悔しいやら、如何なる無理をしてもその眞似がしたくなる。これが遂に自らを失望させ破滅させざるを得ない原因なのである。

さてこの文を見るに、毫も冗漫な所がなく、寸分の無駄もなく、ぐんぐん話を進めて、しかも筋書式の無味乾燥に陥つてゐない。

最初の四節では宿かりの苦悶の心理經過が如何にもよく描寫されてゐる。彼が常に満たされずに來

た、そのやるせなさ、その心理の推移とが成程とうなづかされる。最後の二節では無智な者の虚榮の最後、微力な者の身の程を知らぬ悲劇、さうした最後に對して、世間は唯冷然と一つの事實として取扱ふだけで、涙ある同情ある見方をしないものだといふことを暗示して居る。

そして文は平易淡泊で、寓話として陥り易い教訓的な道學臭い厭味が少しも無い。しかも十二分に教訓し得てゐる。又平易淡泊な中に極めて輕妙滑稽な所があつて文の趣致を助けてゐる。これ等は生徒をして一々探索させたならば面白いことと思ふ。例へば六二頁の四行目「一度中返をして」とか、六四頁の六行目「殆ど氣絶しかけた」とか、「龍の落し子がげげんな顔をして」とかの如きで、表現が如何にも巧なことに氣がつくと思ふ。

内容に立入つては、六六頁の初の行「彼がきしやこの殻にゐた頃の夢想は……彼は常に満たされずに来たのだ。」の一節を十分に味つて各自の省察を加へさせたいと思ふ。彼が苦悶の生涯と悲惨な最後とは結局、知足安分の四字を忘れてゐたからである。「金持貧乏」とか、「上を見な身の程を知れ」とか、「心に笠着て暮せ」とか、老子の「足ることを知つて足る者は常に足る」とかいふ諺や先哲の言をしみじみと味はせたいものである。考へ來れば吾等人間も一種の宿かりであるから。

参 考

六六頁五行目以下原文には次の如くある。

「そこに、ちやうど近所の臨海試験所の船がやつて來た。宿かりの死骸は偶然にもその網にかゝつて引き上げられた。學者等はそれを見て驚いた。どうしてこんな大きな宿かりが出來たのだらうと驚き、且その手に入つた事を喜んだ。彼等はすぐ船を引返して、早速それをアルコール漬にすると、世界中に恐らくこんな大きな宿かりはあるまいと話し合つた。

彼等は獨逸の動物學會宛にその報告書を書くことにした。

壘の外から、宿かりの柔い尻の擦りむけて、腸の出た所を頻りに眺めてゐたその内の博士が、「あんまり大きくなり過ぎてもう這入る貝殻がなくなつて死んだに相違ない。」と云つた。

宿かりの身體は、アルコールでそろそろ色が變つて來た。そして彼は未だ死んだ時の絶望と苦悶とを顔にあらはして眼を眠つたまゝで居る。動物學者等もその表情は固より、宿かりの心理に就いては何も知る事は出來なかつた。」

とあるが、教授の都合上、編者の考で一部變更したのである。

知足安分に關する俚諺・格言

起きて半疊寢て一疊。千石萬石も米五合。

知_レ足者富。(老子)

禍莫_レ大_ニ於_レ不_レ知足、咎莫_レ大_ニ於_レ欲_レ得、故知_レ足之足常足。(老子)

知足第一富。(莊嚴論偈)

不_レ知_レ足者雖_レ富而貧。(遺教經)

知_レ足不_レ辱。(老子)

良田萬頃、日食二升。大厦千間、夜臥八尺。(趙靖猷公座右銘)

良寛和尚尺牘

地しんはまことに大變に候 野僧草庵は何事なく親るゝ中死人もなくめて度存候

うちつけにしなばしなずてながらへてかゝるうきめを見るがわびしさ

しかし災難に逢ふ時節には逢 がよく候死ぬ時節には死ぬがよく候

是はこれ災難をのがるゝ妙法にて候 かしこ

臘 八

山田杜皐老

良 寛

——良寛和尚尺牘——

一三 長江湖航

作 者

【徳富猪一郎】 號は蘇峯。文久三年正月肥後國葦水郡水俣村に生れた。父淇水は横井小楠の高弟であつた。初め熊本の英學校に學び、後京都の同志社に入つたが半途退學し、「將來の日本」を著して文名をあげ、明治二十年二月民友社を起し、「國民の友」を創刊し、次で「國民新聞」を創めて、民友社を中心として操觚界に活動した。明治三十四年内務省參事官に任ぜられたが、後辭して歐洲に遊んだ。明治四十三年寺内伯の朝鮮總督となるに及び、朝鮮の新聞經營を託せられて、これが爲に力を致した。後貴族院議員に勅任せられた。近年筆を呵して積年の宿志たる「近世日本國民史」の著作に従事し、老來力いよく旺盛の概があり、大正十二年該著によつて帝國學士院恩賜賞を受けた。著述としては「將來の日本」「新日本の青年」「吉田松陰」「國民叢書」(日曜講壇・生活と處生・文學漫筆・靜思餘録・寸鐵錄・文藝斷片等二十餘篇)「世界の變局」「時務一家言」「元田先生進講録」「政治家としての桂公」「山

水隨縁記」七十八日遊記」兩京去留誌」杜市と彌耳敦」大正の青年と帝國の前途」國民小訓」等、その他尙多し。

高須芳次郎氏曰く

時代の新風潮に乗じて、徳富蘇峰が民友社を設けて、「國民之友」を創刊したのは明治二十年二月のことである。「國民之友」は小説、詩歌の發達にも力をつくしたが、本來の目的は、平民政治の實現、文壇の開展などにあつた。明治文壇に於て、蘇峰ほど早く文名を成したものは、極めて少かつた。彼は熊本の出身で、郷里の英學校と同志社に學んで、英文學、支那文學及びキリスト教などの影響を受けた。彼がその才氣と素養とを傾けて書いた「將來之日本」を携へて上京すると、田口卯吉・島田三郎等の推薦によつて刊行され、一躍して文名を馳せ、評論界の新人として認められた。その勢に乗つて、逸早く彼は雑誌「國民之友」を出したのである。

その時分は、正に雑誌讀出の時代であつた。「國民之友」に先立つて、今日の「中央公論」の前身だつた「反省雜誌」が生れたが、それから間もなく「哲學雜誌」「以良都女」「文」「我樂多文庫」「日本人」「出版月評」「女學雜誌」「都の花」「新著百種」「少年園」「大和錦」「小説萃錦」「史海」「新小説」などが出た。稍々後になつて森鷗外の「柵草紙」、坪内逍遙の「早稲田文學」などが出たのである。「國民之友」はその先

驅たる觀があつた。

「國民之友」は、政治文學、宗教、社會の各方面に向つて、新しい評論を加へた。また文學欄を設け、春夏二季に文學附録を添へて、文壇で名を成さうとする新人たちの檜舞臺を作つた。それへ出た作品で、明治初期の文壇に新しい光りを投射したものが少くなかつた。なかにも、鷗外の「舞姫」、二葉亭の「あひびき」、逍遙の「細君」、露伴の「一口創」、一葉の「わかれ道」、透谷の「宿魂鏡」などはその著しいものである。

さて「國民之友」の本領とした *Critician* 又は *Essay* の脈は、福澤諭吉・福地櫻痴・中江兆民・藤田鳴鶴・矢野龍溪・田口鼎軒などの人々によつて進歩の道程を辿つたのであるが、蘇峰によつて、それが一番新しい方面へ展開することになつたのである。……蘇峰の告白によると、彼は櫻痴の論文から感化を受けたことが少くないのである。

彼は主として英文學の素養によつて、エマアスン・マコリイなどに私叔し、且つ支那文學の長所を吸収して、其處に独自のスタイルを創造した。今日から見ると、稍街氣と厭味とがあるが、當時にあつては、最もフレッシュな才 走つた文章として、評壇に新光彩を放つた。彼は、エマアスンに私叔しながら、エマアスン流の深く考へ、靜かに思ふといふ風に乏しかつた。何れかと云へば、現實的、常

識的で、平明な進歩的民衆的思想の所有者で、歐化的色彩が濃厚であつた。そして一面に於て、頼山陽のやうに當意即妙に好題目を捕へ、そのウイットと新しい見方とを以て、議論を構成してゆくところに獨得の長所を示した。そして彼の多角的な趣味によつて、常に政治・經濟を論ずるのみならず、文學を論じ、教育を論じ、當代の人物を評し、美術や歴史を談じたので、當時の青年は喜んで、その説くところに耳を傾けた。この點に於て、蘇峰は、評論壇に一期を劃したと云つてよい。

蘇峰は、また一面に於て、新聞記者として政治記事の趣味化、紀行文の新聞展などにも力を入れた。彼が書いた議會記事は、在來の無味乾燥なものではなくて、彼一流の趣味ある叙述を試みた。それは主として英米の新聞から暗示を得たものと思はれる。紀行文なども、簡潔な書翰體に托して、新味を發揮した。「天然と人」「文學斷片」などを讀むと、かうした方面に於ける彼の長所が見える。その短所は幾分の洋臭と生硬な手觸のあることであつた。また彼の評論は「靜思餘錄」「青年と教育」「人物管見」「進歩乎退歩乎」などを見ると、その大體がわかる。唯その文學評論は「著者文學者にあらず、又文學者たるを願はず」とか、「非文學者の文學談、固より粗枝大葉なり。」と云つて居る通り、それは單なる謙遜の辭のみとは思へない。公平に見ると粗枝大葉で、鑑賞力に乏しい缺點があつた。

蘇峰を中心として集つた民友社同人は、歐化主義・平民主義・キリスト教主義の傾向を多く具へて居

た。そのうちには、概して文學的に優れた人物が少くなかつた。竹越三又・山路愛山・人見一太郎・徳富蘆花・國木田獨步・宮崎湖處子・矢崎嵯峨の屋・塚越停春樓・角田浩々歌客などは、いづれも著しい特色を持つてゐた。そのうちで、蘇峰に酷似しゐたのは、愛山と三又とであつた。……（日本現代文學十二講）

出 所

「七十八日遊記」全一冊。明治三十九年十一月三日、東京民友社發行。定價壹圓六拾錢。

著者序文の一節に曰く、

著者が韓國・滿洲・北清及び長江一帶の地を漫遊し、隨處に寸閑を偷み觸目感興の一斑を記載したるものにして、その大半は、鉛筆にて郵便はがきに、細書したるものなり。まゝ長文あれども、それさへも多くは、はがきを十數枚連書したるに過ぎず。或は汽車の窓に向ひて、或は船室食卓の上に於て、或は停車場の腰掛に倚つて、或は支那客棧の片隅に坐して、その印象極めて新鮮なるの機を失せず隨記隨送したるものに過ぎず、その修辭の粗雑にしてその内容の淺露なる、寧ろ當然のみ。」と

内容目次

過眼記程—新橋より馬關・釜山より京城・京城雜觀・平壤より義州・安東縣より奉天・奉天及北陵・滿洲の裏街道・昌圖雜觀・三百三十哩の直行・大連所見・近時の旅順口・營口雜觀・山海關より天津・北京一覽・湯山の溫泉・明の十三陵・長城行・萬壽山と玉泉山・芝罘より上海片信・長江・湖江・洞庭湖と湘江・長沙・楚山青・漢口瞥見・龍蟠虎踞帝王州・長江を下る・上海より杭州・西湖及其附近・杭州より蘇州・蘇州より上海・春日丸船上より・旅程總説。

觸目偶感—支那及支那人・結論一則。

本課は、明治三十九年の七月九日の夜から同十五日にいたる長江溯航の様子の箇所を採擇した。

要 旨

七月の候、長江を溯つて、その風景、その感想を叙した純文學的な書翰文である富麗な詞藻、細緻な技巧、しかも縦横奔放な筆致をもつて、或は情趣を加へ、或は地方色を含ませ、單に報知の文でありながら、興趣湧き、讀者をして溯江の感あらしめるところを味はせたい。

段 落

一、七月九日の夜……決して不思議にあらず候。(六九頁の三行目まで)

九日の夜から十日のことで、これには長江の風光と、その川の雄偉壯大なことゝが書かれてある。

二、十一日……青檠に中りたるを感歎致し候。(六九頁の終りから二行目まで)

十一日のことで、長江雨景のこと。

三、十二日は……人をして毛髮を豎てしめ候。(七〇頁の七行目まで)

十二日は安慶府のこと、小孤山のこと、馬當山のこと。

四、十三日は……渡りに舟の心地にて直に乗移り申候。(七一頁の二行目まで)

十三日は漢口・武昌・漢陽鼎立のこと、及び湘南丸に乗移つて長沙に向けて發航したこと。

五、十四日……根こぎの柳樹など到る處に倒れをり候。(七一頁の終りの行まで)

十四日は長江は漢口の上流にあつてもなほ江の幅一哩以上もあること、及び江岸繪の如き眺め、

六、十五日……(終りまで)

十五日は洞庭湖に入りて水の清きに接して心地よく感じたこと、及び洞庭湖の見物、大筏の事。

解 釋

【長江】 チャウカウ。揚子江 Yangtze-Kiang. 支

那にある大河。世界の長流中その第四位に居り、航運の便ある點に於て匹儔稀なる重要な

河流に屬し、支那にては黄河・西江・黒龍江と

共に四大流の一たり。揚子江は一に洋子江又は揚子江とも書す。この名稱は、もと江蘇省

以下の部分を指す稱呼なりしかど、今は地學上その全長に適用せられつゝあり。その本名は長江又は大江にして、古昔は黄河を單に河と稱せしに對し、この江を呼ぶに江の稱を以てし、これによりて江南・江北・江西等種々の地理的名稱を發生せり。又西人は、往々にして青河 (Blue River) の稱を用ひ、元代の旅行家オドリク (Friar Odoric) の書にはタライ (Talay) (蒙古語「海」の義) 河ともいへり。もしそれ、部分的名稱に至りては、稱呼頗る多く、上流の金沙江、馬湖江、九江附近の潯陽江、江蘇附近の宣化江、鎮江附近の京江等、殆ど擧げて數ふべからず。本江の流程は、約三、二〇〇哩に及び、その源を崑崙山系の中

央より發せり。潮汐を感じる範圍は、江口より三七五哩なる蕪湖に及び、多少九江 (江に於てもこれを感ずといふ。要するに本江は、西藏を除くとするも、なほ四川・雲南・湖北・湖南・江西・安徽・江蘇の七省をその灌域とするを以て、面積七十萬方哩、人口約二億はこの河の利便に浴し、外國貿易の如きも、全國外國貿易の十分の六はこの河によりつゝあり。 [百科]

【湖江】 ソコウ。船で河をさかのぼること。

【七月九日】 明治三十九年七月九日。

【極目】 キョクモク。目のとどく限り。見渡す限り。 [大宇]

【際】 サイ。際限。

【茫々】 バウバウ。廣大なる貌。とほき貌。

[大宇]

【月影の水心に涌くあるのみ】 江底に月影のうつてゐること。

【快眠】 クワイミン。よく眠ること。 [大宇]

【一覺後】 イツカクゴ。目がさめて後。

【甲板】 カンパン。甲板の字の唐音。大なる船の梁上に、一面に張り詰めたる木板又は鐵板などの總稱。 [大國]

【風色】 フウシヨク。けしき。

【精銳】 セイエイ。(一)才氣のするときこ
と。(二)熟練してするとき兵。 [廣辭]こゝは、よく見える意を強めて云うたのだ。

【仔細に】 細かに。くはしく。精密に。 [廣辭]

【辨ぜられ候】 見分けがつく。

【蘆葦】 ロキ。ヨシアシ。「蘆」(ヨシ・アシ)は未だ秀でざる葦にいふ。「葦」(アシ)は大葎なり。 [大宇]こゝは單に「あし」の意でよからう。

【北清】 ホクシン。こゝは漠然と北方支那位の意。

【高粱】 カウリヤウ。支那に産する一種の黍。 [大宇]たうもろこし(蜀黍)の異名。 [大國]カオリヤン、たうもろこしの支那名。北清地方の重要な作物なり。人畜の食料にして、又釀酒の料にも供せらる。 [百科]

【水牛】 スキギウ。牛の一種。體長七尺餘、形狀牛に類し、額は牛より狭く短し。毛は粗剛にして黒く、長大にして半透明なる彎曲の

角を生ず。印度地方に野生し性質頗る兇烈なれど、強健にして筋力の牛より優るを以て、廣く熱帯地方に飼養して使役せらる。好んで水邊に居り、よく水中に入る。〔廣辭〕

【あさる】 求食。漁。(一)餌を捜し索む。

(二)漁介・海藻を捜し採る。すなどる。いさる。

(三)物を捜し索む。たづねさがす。〔天國〕こゝ

は(一)

【河童】 カツバ(一)水陸兩棲なりといふ想像

の動物。形は童の如く、面は虎に似て、身に鱗甲あり。頭に皿と稱する、凹處ありて水を容る。その水の存する間は陸上にても力強く、他の生物を水中に引き入れてその血を吸ふ。かはたらう。かはのとの。かはつば(幾

内九州)。ゑんこう(周防・石見・四國)。ぐわたらう・かだらう(土佐)。かつば(東國)。てがはら(越中)。かはらこぞう(伊勢白子)。かはたる(京都)。かはら(越前・播磨・讃岐)。かはこ(出雲)。かはこぼし(伊勢山田)。めどち(南部)。かうご・ごんご(備前)。みづし(加賀・能登)(二)芝居などの木戸口などに居て、客を勧め引き入るゝ男。〔天國〕こゝは(一)

【小帆大帆】 セウハンタイハン。大船小船。

【指願の間】 ショのアヒダ。手に取るやうに近く見える意。

【低頭平身】 テイトウヘイシン。平伏して頭を下げること。恐れ入るさまにいふ。

【この邊は四十清里の云々】 日本百科大辭

典所載の文を参考の爲に引用すると、「長江のいはゆる下流とは、宜昌の西二五清里の西陵峽より江口に至る約九六〇哩の間にして、

湖北・江西・安徽・江蘇等の水を收め、鎮江・揚州の附近に於て大運河と聯絡し、遂に末端を海中に没す。河幅は部分によりて一ならず。武漢附近に於て約一哩、江口に於ては海門と浦東との中間六〇哩に達し、汪洋として際涯を見ざるの觀あり。水深は、冬季減水の際と夏季増水の際とによりて多大の異同あれど、漢口附近に於て増減の差約五〇呎、最下流に於て三六呎に達す……江口附近の潮汐は、通常高低の差一四呎半云々」

【膨脹】 バウチャウ。(一)ふとりひろがるこ

と。ふくるること。(二)發展して増大すること。のびますこと。〔廣辭〕こゝは水量のふえること。

【渺渺奔波與岸平】 その如何に河水が増してゐるかがうかがはれる。

「渺渺」ひろびろとしてかぎりなきさま。はるかなるさま。〔廣辭〕

【半江雷雨半江晴】 江の半分には雷雨がしつゝ、半分は晴れ渡つてゐるといふので、その如何に河幅の廣いかが想像される。

【掠水】 水面をかすめて飛ぶ。水面にすれすれに近く飛ぶこと。

【沙禽】 サキン。こゝは、かはばたに住む鳥の意、水禽をさす。「沙」には、すな、すな原、

濱、渚などの意がある。〔大宇〕

【虚構】 キョコウ。つくりごと。いつはり。うそ。〔廣辭〕

【夕立の空より廣き武藏の原】 關東古戦録に、「太田道灌上洛の時、武藏野はいかばかり廣き野ぞと勅問ありけるによめる、

露おかぬ方もありけり夕立の空より廣き武藏野の原。」

と出てゐる。武藏野の原は夕立の空より廣いので、夕立の雨のふらない處もあるといふ意で、武藏野の廣大なことを詠んだもの。

【太田道灌】 オホタダウクワン。室町幕府時代の武將且歌人。小字鶴千代、初名は資長、後上杉持朝の一字を賜ひて持資と改め、源六

七月なり、年五十五。

道灌夙に文學を嗜む。その江戸城に移るや、館を城内に營み、名けて靜勝といふ。西を含雪、東を泊船といひ、僧萬里をして銘及序を作らしめ、又書を館中に藏して兵馬の閑書を読み歌を詠じ、或は山東の縑素を招きて詩を賦せしむ。菅廟を城陰に建て、梅を栽ゑ、亭を香月と名く。廟は今の平河天神なり。嘗てその城池の風光を詠じていはく、「我宿は松原つづき海近く、富士の高根を軒端にぞ見る」と。又後土御門天皇に謁せし時、武藏野の勅問に答へて、「露おかぬかたもありけり夕立の、空より廣き武藏野の原」と詠す。又隅田川の都鳥の勅問に答へて、「年ふれど我まだ知

郎といふ。資清(道眞)の長子なり。幼にして雄偉、よく文を屬す。康正元年家を繼ぎ、備中守に任ず。扇ヶ谷上杉定正を扶翼して功績あり。同二年江戸城を築き、長祿元年功を竣へてこれに住す。同二年剃髮して道灌と號し、又備中入道といふ。寛政五年京都に赴き、後土御門天皇に謁し、又足利義政に見えて還る。山内家の執事長尾昌賢の子景春の山内家に叛くや、道灌切にこれを諫止す。道灌の威名益々著はれ、山東の將士争うて扇ヶ谷家に屬す。これよりして山ノ内・扇谷の兩家不和を生ず。こゝに至り山ノ内顯正、道灌を定正に離間す。定正乃ち道灌を召し、刺客をしてこれを浴室に殺さしむ。時に文明十八年

らぬ都鳥、隅田河原に宿はあれども」と詠す。寂感斜ならず。「むさし野はかる萱のみと思ひしに、かゝる言ばの花にさくとは」の御製を賜ふ。(關東古戦録) 又道灌の辭世とて、「昨日まで惑迷想を容れ置きし、へんなし袋今破りけん」といふを傳ふ。又弱年郊野に狩くらし、雨に逢うて一弊廬を訪ひ、養を乞ひしに、小女歎冬一枝を示し、笑うて答へず。道灌その意を解せず。後に「七重八重」の歌を知り、大に慚愧して始めて歌道に志せりと云へど、こは後人の假作に出でしものなるべし。なほ其の著として傳ふる慕景集及平安紀行も後人の偽作ならんとの説あり。〔百科〕

【南京】 ナンキン。Nanking; Nanching; Chian-

Ching. 支那、江蘇省江寧縣の別稱。本省の省城にして、前清時代には江南の省城、兩江總督の駐地に係り、江寧布政使ここに駐し、兼て外國貿易の商阜たりき。別名を金陵・秣陵・建業・建康・昇州・集慶等といふ。均しく史上の稱呼に係る。南京といふも、明代の舊稱を用ふるなり。北京を東南に距る二、四四五清里。人口は精細に知り難し。或は云はく、二十三萬五千と。その他十五萬・二十七萬・三十萬・四十萬等と稱す。〔百科〕附近に鍾山・半山亭（王安石の故宅）・雨花臺・南朝四百八十寺の残址がある。

【霏々】 ヒヒ。 (一) 雪の甚だしく降る貌。

(二) 雲の飛ぶ貌。(三) 談話の永く細かに續く

貌。(四) 霜の繁くおく貌。(五) 草の盛んに茂る貌。(六) 電光のひらめく貌。〔字源〕こゝは雨の盛んに降る貌に轉用したのである。

【王荊公】 ワウケイコウ。支那宋代の政治家且學者。字は介甫、半山と號す。撫州臨川(江西省)の人なり。安石少年より文才あり。友人曾鞏これを歐陽修に薦め、漸く名を知らる。仁宗の時、二十二歳にして進士となり、尋で地方長官となり功あり。……神宗の時、帝を輔けていはゆる新法を行ひ、政治上に大改革を試む。……哲宗の元祐元年南京にて六十六を以て歿す。〔百科〕

【夢寐】 ムビ。睡りて夢みること。ねむること。〔天國〕

【鍾山】 ショウザン。南京の名山で、王安石

が嘗てこの山で書を讀んだ。

【江雲】 カウウン。河上の雲。

【模糊】 モコ。ぼんやりとして明かならず、

俗に模を糝に作るは非。〔字源〕

【蕪湖】 ブコ。Wuhu. 支那安徽省蕪湖道に屬

する縣且開港場。揚子江の南岸に位す。縣城蕪湖は安徽省唯一の外國貿易場に屬し、城外には廣大なる市街ありて商業繁盛、街頭殷賑、百貨常に幅濶せり。人口十三萬七千を有すと稱せらる。〔百科〕

【所在】 (一) そのある所。ありか。すみか。

(二) こゝかしこ。所々。(三) すること。しわざ。しごと。行爲。所行。〔天國〕こゝは(三)

【水滸傳】 スキョデン。支那小説四大奇書の

一なり。全篇一百回より成る。宋の徽宗皇帝の時宋江等三十六人河朔に横行したるを、張叔夜の計にて歸服せしめ方臘を討ぜしむといふ事正史に見え、宣和遺事に三十六人の名を載せたるに基き、三十六人を天罡星と名け、別に地煞星七十二人を加へて一部の小説に作り成したるなり。

開卷第一は洪大尉伏魔殿を抜きて魔君を走らすに始まり、一百八人の魔王即ち豪傑は世間に出て千變萬化の末、梁山泊に聚まり、後に招安を受けて官軍に歸し、劇賊王慶・田虎方臘を討つに終る。その間奇構百出、獨り支那小説の巨擘たるのみならず、世界文學中

稀有の奇作たり。作者は詳かならず。古來羅貫字は本中(世に羅貫中といふ)の作と唱へ、羅はこの罪業によりて子孫三世啞子生れたりと云ふ説あり。然るに清人金聖嘆水滸傳批評を作りて「第七十回忠義堂石碣受天文、梁山泊英雄驚惡夢」までを水滸傳の原文とし、その作者を元人施耐菴となし、七十回以下は續篇にして羅貫中これを續ぐとなして排棄せり。然れどもこは全く金聖嘆の捏造説にして、水滸傳の眞面目にあらず。七十一回以下を削除したるは、曩々たる餘韻を存して隨分手際よき削除なれど、七十一回以下にも多趣味の回頗る多く、且勞頭豫めその終までを暗示したる人物の傳記全く不完全に終り、沒要

領も亦甚しと云ふべし。蓋し水滸の作者は羅か施か或は羅、施以外の人ももとより詳かならず云々。[百科]

【肯綮に中る】 コウケイにアタる。肯は骨に著く肉なり、綮は筋と肉と結ばるゝ處なり。故に緊要の處をいふ。議論など急所を衝くを肯綮に中るといふ。莊子の養生主の庖丁解牛の條に「庖丁爲文惠君解牛……技經肯綮之未嘗、而況大軫乎。」とあり、軫は骨なり。

[成語]

【唐宋詩人】 唐—王勃・楊炯・盧照鄰・駱賓王・宋之問・沈佺期・陳子昂・張九齡・王緒・王昌齡・岑參・高適・崔顥・王灣・李白・杜甫・韓翃・盧綸・錢起・李端・韓愈・白居易・李賀・張籍・賈島・元

[天字]

【砥柱】 テイチュウ。根底の柱。根本の柱。

土臺ばしら。「砥」は、根、ねもと、本づくの意。[天字]

【屹立】 キツリツ。そびえ立つこと。[辭源]

【陸龜蒙】 リクキモウ。字は魯望、長興の人。歌詩及び賦に工なり。松江の甫里に隱る。性奇を嗜む、或は時に舟に上り、圖書茶竈筆床釣具を齎して往來す。初め天隨子と稱し、後に自ら江湖散人と號す。また甫里先生と號す。高士を以て召さるれども至らず。顔薏・

皮日休・羅隱・吳融と益友たり。吳興實錄四十卷・松陵集十卷・笠澤叢書三卷を著す。(唐書)

【馬當山】 バタウザン。安徽省東流縣の西南

嶺・劉禹錫・杜牧・李商隱・溫庭筠・韓偓・許渾等。

宋—楊億・錢惟演・劉筠・蘇舜欽・梅堯臣・歐陽修・曾鞏・王安石・蘇軾・黃庭堅・陳師道・陸游・陸九齡・陸九淵・朱熹・文天祥・謝枋得等。(支那文學史綱)

【小孤山】 セウコザン。支那安徽省宿松縣の東百二十里、江西彰澤縣の北、大江中にある。江心に兀峙し風景絶勝、南岸の彰郎磯と相對する。江中扼要の處とする。

【腰骨】 エウコツ。小孤山を擬人したのである。

【洪濤】 コウタウ。大波。[天字]

【滾々】 コンコン。水の湧き流るゝ貌。混々。

七十里、江西彰澤縣の東北四十里にある。山形馬に似、大江に横枕し、舟航艱阻である。山際に馬當廟がある。今山に砲臺がある。長江險要の處である。

【球磨川】 クマガハ。熊本縣の南部に在る河。九州の西斜面に屬する一大河にして、源を球磨郡の北東境に發し、南西に流れ、八代郡の東部葉木村に發して僻村として名高き五家莊を流れる川邊川を合せて人吉盆地を開き、右岸より萬江川を合せたる後、大彎曲をなして北流し、八代郡の南西部に至り北面に向ひ八代灣に注ぐ。全長約二五里。その中心人吉以下殆ど急湍なれど、舟を通ずること凡そ一六里、三十三瀬あり。舟の行くこと矢の如く、

舟夫巧に舟を操りてその間を下り、約半日にして河口の八代に達すべく、溯るときは挽舟にて三晝夜を要すといふ。富士川・最上川と共に日本三急流を以て稱せらる。百科

【槍倒】 ヤリタフシ。形容より來れる急流の一名。

【廻環】 クワイクワン。めぐりまはること。廻旋。

【千轉萬合】 いろ／＼に動き變ること。

【毛髮を豎てしむ】 マウハツをタてしむ。非常に驚きおそれさせること。

【大冶の鐵山】 タイヤのテツザン。支那湖北省。揚子江の右岸近くにある。盛んに鑛石を我が國に輸入する。我が八幡製鐵所は多くこ

ゝの鑛石を用ひる。

【武昌府】 湖北省にあつて、揚子江の右岸にある。省城である。

【漢水】 一に漢江・沮水・沔水といふ。陝西省漢中府寧羌州の北、嶓冢山に發源し、諸水を合せ漢陽府城の北に至つて長江に注ぐ。長さ約三六〇里。

【漢陽】 湖北省、揚子江の左岸(西)、漢水の西岸(南)に位し、漢水を隔て、漢口を望む。江・漢二水合流の地點を占め、古今用兵の時必争の地である。製鐵廠がある。

【鼎立】 テイリツ。三者相向かひて、鼎のあしの如く對立すること。廣辭

【南支】 南方支那。支那南部。

【洵に】 マコトに。信に通じマコトの義。本來は川の名。大宇

【雄鎮】 ユウチン。雄大にして險惡なるかため。雄藩。字源

【長沙】 湖南省の首府。洞庭湖の南にある。

【渡りに舟】 その場合に當りて最も都合のよきこと。大國

【依然】 イゼン。もとのまゝ。昔ながら。廣辭

【淼茫】 ベウバウ。水のひろびろとしたる貌。大宇

【驅使】 クシ。おひつかふこと。かりのくること。大宇

【狗兒】 クジ。犬ころ。狗。音ク・コウ。字源

【悠然】 イウゼン。ゆつたりとしたる貌。字源

【宛然】 エンゼン。あだかも。さながら。〔字源〕

【痕】 アト。音コン。きずあと。物の跡。〔天字〕

【岳陽樓】 唐書に、「岳州巴陵郡は、江南西道に屬す。岳州は、天岳山の陽に在り、故に岳

陽と名づく。〔風土記に、「岳陽樓は西の門樓なり、下洞庭を瞰し、景物寬闊なり。〕〔成語〕

【君山】 クンザン。洞庭湖中の小島。

鑑賞

文中隨所に矢つぎ早に疊みかけられた對句、變化に富んだ斬新な形容、豊富な聯想、味はひの深い語句を縱横に驅使した雄健な文である。生彩あり息をもつかせぬ妙筆とは正にかゝる文の事であらう。比較的束縛され易い候文をかくまでに活用した作者の文才に注意しなければなるまい。

登岳陽樓

杜甫

昔聞洞庭水、今上岳陽樓、吳楚東南坼、乾坤日夜浮、親朋無一字、老病有孤舟、戎馬關山北、憑軒涕泗流。

大曆三年杜甫蜀の亂るゝによつて、去りて岳陽に遊び、樓に登りて此の詩を作る、時に年五十七。昔は單に洞庭の風光を耳にして居たが、今親しく岳陽樓に上つて見ると、喩に違はず、吳の國楚の國が東南に分れて開け、天地が日夜水面に浮ぶ如き大觀である。唯我は遠く故郷を離れ親戚知己よりは一字の音信もなく、老衰病身の我身を、託するに一つの舟があるばかりである。今や蒼人入寇して關山の北には軍馬の騒が頻りである。余は彼を思ひ此を思ひ軒端によつて涙の落つるを止め得ず。

一四 槍ヶ嶽紀行

作者

【芥川龍之介】 明治二十五年三月東京橋に生れ、第一高等學校を経て東京帝國大學英文科を卒業した。新思潮同人であつて、處女作「鼻」を初として「手巾」「芋粥」等の短篇いづれも世の好評を博し一躍新進作家中異彩を放つた。材を多く歴史にとり一種の哲學を背景として興味深い事件を叙するいふやうな作風であり、且つ非常に技巧に優れ機智に長けてゐた。或るものは彼を「新理智派」と呼び、或るものは鷗外・漱石のおもかげある作家だと評した。「羅生門」「煙草と惡魔」の外數多の作を發表した。彼は非常に多讀家で記憶がよく支那の小説にも精通し支那趣味の豊かであつたことも周知の事實である。昭和二年七月二十四日睡眠劑を服藥して自殺した。年三十六。その原因は不明である。

芥川龍之介の藝術

芥川氏が第四次「新思潮」の創刊號に「鼻」を發表して如何なる點が文壇の注目を惹いたかと云ふに、

第一は故夏目漱石も推稱の手紙のうちに書いて居るやうに「材料が非常に新しい」といふことであつた。禪智内供が氣にしてゐた長い鼻を短くした話で、題材の點から云へば確かに在來の自然派の作物などにはなかつたもの、又耽美派作家の思ひつかなかつたもの、鷗外の歴史物にもこれほどのものはないと思はれた程珍しい題材であつた。

古い歴史的材料を全く取扱ひ方、觀察の下に展開し、而もそこに一つのイデーを表現して、現代人の思索をいやが上にもそゝつた。このイデーを表現して、現代人の思索をそゝつたところに、注目を惹いた第二の原因があつたであらう。

上品な滑稽と皮肉とは、夏目漱石の顯著な特質の一つであつた。芥川氏にも亦この皮肉と諷刺とがあつて、彼の特徴の一面をなして居る。それが「鼻」にも既に現はれてゐた。加ふるに機智さへあつた。それが注目を惹いた第三の理由かも知れない。表現の理智的透明は今更云ふまでもない。結構の巧緻精妙も敢て説明を要しない。

「鼻」が有名になるにつれて「芋粥」「手巾」「運」などが續々と一般の雑誌に發表されて、氏は一躍新進の花形となつた。就中、世間の視聽を集めたのは「芋粥」であつた。これは「鼻」と同じく歴史物である。

芥川氏は好んで人間の内的心理を描く。自然派が動作のみに重きを置くのとは、全く正反對である。けれどもその心理が、自然に、尤もらしく、生き／＼と描き出された例は甚だ尠いやうに思はれる。「籤の中」「秋」などは、或る時、或る場合の女性の心理を深く描いてはゐるが、多くの場合に於て、心理の説明であり、心理の型を見せてゐるに過ぎない。芥川氏の藝術は理智の藝術であり、秩序の藝術であり、メカニズムの藝術である。従つてその感觸は金屬的で、峻冷的で、固定的である。人間の心理を描いても、メカニクであつて、心理的でない。油のある間は動くが、それがきれると、運轉を中止する機械といつたやうな人物が多い。名作と云はれた「或る日の大石内藏之助」でも、大石の心理が有機的に、心理的に、巧みに描けてゐるとは云へない。何處かに機械的な感じを誘ふ所がある。畢竟、芥川氏は心理學者ではなく、物語作者である。とは云ふものゝ「籤の中」は、或る程度までは、オルガニズムの竹品、情緒の作品、複雑性の作品と云へようかと思ふ。従つてその感觸にも、體溫的な、流動的な、或るものが存する。サイコロジストとして認められて好いものを、見せかけて來たといふ氣がする。「枯野」「三衛門の罪」「一塊の土」などをとつても同じやうなことが云へる。

作者が一人の人間を描くといふことは、硯つた心理なり感情なりを明瞭に讀者に知らせると同時に、人間として持つてゐる凡ての心理や感情は、全圓中の一箇所であることを、暗示させない限り、

機械的になり、傀儡的にならざるを得ない。人間としての全圓的心理なり、感情なりを暗示してこそ、覘つた心理や感情が生きて來るのである。その反對に、覘つた心理や感情のみを描いて、他の心理や感情を無視すれば、人間のカラクリが出来る。芥川氏は往々にしてこのカラクリ人形を造ることがある。而もこの傾向は益々強くなつて行くのではないかと思はれる。その行きどまりは何であらうか？ よく行つて、作品に枯淡の味が加つて、澁味を發揮するに止まらうし、悪く行けば骨つぽく、血の氣を失くしたものにならう。觸るれば心地よく温味を感じしめる一脈の情熱が漂つてこそ、枯淡の味に、生彩が添ふのではないか。この一脈の情熱を缺くとき、枯淡の味は、はや枯淡でなくなる。乾燥した、骨董的な味、理智のみの與へる冷感を、その感觸とする。

……うまい、面白い、よく書けてゐるな、とは感ぜしめるが、深く人間生活の根本問題を考へさせるとか、讀む者の心の底に強い刺戟を集へるといふことが殆どない。所詮は藝術至上主義の文學であり、享樂藝術であつて、暗示の藝術でもない。要するに今日の藝術であつても、明日の藝術ではない。(日本小説大系、現代篇、新理智主義の文學)

出 所

「沙羅の花」全一冊。大正十一年八月十四日、改造社發行。定價貳圓八拾錢。

作者の自序に曰く、

これは大正五年から大正十一年に至る間の、わたしの作品の選集である。選の標準は必ずしも、作品の佳否にのみ據つたのではない。一卷の中に出來る限り種々の企圖のもとに書かれた作品を集めたいと思つたのである。

沙羅の花は和漢三才圖繪に據れば、「白軍瓣狀似山茶花而易凋」と云ふ事である。是等の作品も沙羅の花のやうに、凋落し易いものかも知れぬ。かたがたふと思ひついた通り、この選集の名前にする事とした。

目 録

- 短篇小説——羅生門・鼻・運・藪の中・奉教人の死・きりしとほろ上人傳・るしへる・枯野抄・或日の大石
- 内藏之助・南京の基督・秋山圓・開化の殺人・舞踏會・秋・將軍・葱・蜜柑
- 童 話——魔術・杜子春・蜘蛛の糸
- 紀行文——槍ヶ嶽紀行(大正九年六月)・南國の美人
- 小品文——尾生の信・東洋の秋・沼
- 隨 筆——澄江堂雜記

要旨

前課の書翰體紀行文に對して本課は普通の紀行文を味はせたい。彼は洋々たる長江の溯航である、是は峨々たる槍ヶ嶽の登山である。そこに作者獨得の相違が見られよう、その觀察の仕方、表現、筆づかひ等に注意させたい。

段落

- 一、島々と云ふ町……又階下から聞えて來た。(七七頁の四行目まで)
 作者は普通の登路によつてゐる。(解釋——槍ヶ嶽參照島々から槍ヶ嶽の頂上までは九里といふことである。こゝではその島々と云ふ町の宿屋へ落着いていよく出發しようとする前晩までの記事である。)
- 二、山の岨を……無理やり足を早め出した。(八〇頁の四行目まで)
 徳本時まで來る前後のこと。
- 三、その日の午後……日本民族の生活などを想像せずにはゐられなかつた。(八三頁の四行目まで)
 梓川の上流を経て、赤岩小舎で一泊。
- 四、雜木の重り合つたのを……(終りまで)

赤澤から頂上まで。

解釋

- 【島々】 頭註參照、及槍ヶ嶽の條參考のこと。
- 【上り框】 アガリカマチ。家などのあがりくちにあるかまち。「框」(一)床などの端を隠すための化粧横木。(二)戸・障子など、すべて建具の周りのわく。(三)石工の道具の一。玄翁に似て、一方尖れるもの。〔天國〕こゝは上り口位の意。
- 【婢】 ヲンナ。下婢。女中。
- 【日除】 ヒヨケ。(一)日の光をさへぎりよくするためのもの。(二)乗車の際などに用ふる小形の女持の蝙蝠傘。〔天國〕こゝは(一)
- 【せむ】 そむ(所爲)の字音の轉。或るしわざ

より起る物事。ゆゑ。せえ。〔天國〕

- 【襖】 フスマ。障子の一種。多く唐紙にて張るより唐紙障子ともいふ。ふすましやうじ。からかみ。〔天國〕
- 【むさるくし】 汚穢。むさくきたなげなり。きたならし。むさくろし。「むさし」汚穢。不潔にして不快なり。きたなし。〔天國〕
- 【括り枕】 ク、リマクラ。蕎麥がらなどを布帛に包みて、その兩端を括りつけたる枕。(箱枕・木枕などの對)〔天國〕
- 【講談本】 原本には「講談玉菊燈籠」とある。玉菊は江戸吉原の名妓。角町中萬字屋勘兵衛

の抱遊女なり。才色兼ね備はりて、茶花・俳諧・琴・三絃の道にも暗からず。殊に愛敬ありて慈善の心に厚く、全盛他に比儔すべきものなかりき。玉菊の仲の町へ出づるや、金百疋・二百疋づつ包みたる目錄を禿に持たせ、かなたこなたの床几に腰うち掛くる毎にこの目錄を遣りたりと云ふ。生來酒を嗜むこと甚しく、遂に享保十一年三月二十九日二十五歳を一期として狂風落花の恨を残せり。淺草光感寺に葬る。世に玉菊が寶永の初自盡せし事を傳へ、又正徳年中歿せしよしを傳ふれど、いづれも謬れり。玉菊が墓はその後明和九年の大火に所在を失したるを、その寺にて光岸明秀信女、寶永元年五月十九日と刻したる他の

墓石を以て玉菊のなりと云ひ傳へたるにより、寶永年中歿せしよしの誤傳を生ずるに至り、好事者が淺草新堀端の永見寺に玉菊の墓を偽作し中萬字屋がこの墓に追善しけるにより、世には光感寺に葬るといふを虚説として疑ふ者あるに至れり。享保十一年の七月孟蘭盆會に仲の町の俵屋虎文、揚屋町の松尾八兵衛等發起して玉菊が精靈を祭らんとため燈籠を掲ぐ。これいはゆる玉菊燈籠の權輿なり。同十三年七月の第三回忌に玉菊が生前河東節を好みて河東節の三絃を善くしたる故を以て、河東節の名手一寸見蘭洲（江戸町二丁目つる蔦屋庄二郎）同志を計り、竹婦人に請ひて淨瑠璃水調子を作らせ、揚屋町の三味線弾き河榮が

家にて玉菊追善の供養を催す。竹婦人又追善の俳句などを集めこれに水調子と序跋とを添へ袖草子と題して上木せり。傳へて云ふ、竹婦人水調子を作りて追弔せしに、玉菊の靈屢あらはれぬ、これより中萬字屋の樓上に於てこの淨瑠璃を語れば必ず怪異ありと。その後元文二年七月軒毎に箱提燈を掲げたるが廓内の光景を盛にせしかば、その翌年よりは新に一樣の切子燈籠を點じ、これより年毎の例となりて或は廻燈籠・總燈籠など次第に意匠を加へて華美となり、毎年七月仲の町兩側の茶屋に燈籠の趣向を盡して點するを例とし、彩燈の下遊女が徐に八文字を踏みて蓮歩を移すを見んとて貴賤齋集し、雜沓最も繁盛を極む

これを吉原燈籠といひ、花街三大盛事の一とす。【百科】

【錢湯】 センタウ。錢を取りて衆人に入浴せしむる湯屋。【天國】

【馬陸】 ヤスデ。節足動物中、多足類の一。形げぢげぢに似たるも、毎環節に二對の脚ありて、第一對のものは牙狀をなさず。常に濕地にありて植物質を食す。これに觸るれば巻曲す。あまびこ。かやむし。くさむし。ぜにむし。やすぢ。ゑんざむし。【天國】

【槍ヶ嶽】 ヤリガダケ。飛彈山脈（日本北アルプス）中の最高峯。飛彈・信濃の國境に跨り、穂高山脈に連互してその北方に峙立し、海拔二〇、四八九尺。山頭二百餘尺は尖峯攢

立して天を衝き槍を立てたるが如く、中腹以下には大雪溪あり。頂上に立てば脚下は千仞の溪谷にして、雲霧のその下を往來するを見るべく、頭を廻らせば黒野・梓の溪谷より大天井・燕・鷲羽・穂高・乗鞍等の峻峯悉く雙眸に集まり、眺屬頗る壯なり。本山のかくの如く高峻・奇峭を極むるは、これを構成する角閃小紋岩の風化作用に抵抗する力の偉大なるにより、殊に冰雪削磨の特相あるによりてなり。登路數條あれど、最も普通なるは、松本市より梓川の溪谷に入りて島々村に至り、これより北方島々谷に沿ひて徳本峠を越え、右に林道を辿りて再び梓川の上流に出で、これを溯りてその本流鎗澤に就き、赤岩小舎に至

り、更に上るときは十數町にして大雪溪に出づべく、これを踏みて登れば坊主小屋・殺生小屋等あり。これより半里餘にて絶頂に達すべし。島々村より約九里、赤岩よりは行路嶮惡、樹により岩壁を傳ふ。歸路もし別路を擇ばば嶮坂を下りて水俣に至り、湯の又に出で、これより葛の湯温泉を経て高瀬川に沿ひて下り、大町に至るべく、この間約一五里と稱す。この他穂高嶺より至るものは北穂高三角點より東方空澤に降り、再び東穂高に登り、以て嶺傳ひに鎗に攀づべし。空澤より約十時間を要すべく、その險峻筆舌の及ぶところにあらず。【百科】

【縁の下のごみまで云々】 微細な點まで通

じてゐるといふことだ。

【あらされた】 食ひあらされたの意。

【蒲田温泉】 カマダランセン。

【主な】 オモな。

【苦笑】 クセウ。にがわらひすること。【天國】

【上州】 ジャウシウ。上野、一に上州といひ、下野と共に兩毛地方といふ。東山道中部の内地に位し、東は下野、南は武藏、西は信濃、

北は越後及岩代に接し、東西三〇里二八町、南北二七里〇三町、面積二三方里。【百科】

【浅間山】 アサマヤマ。長野・群馬二縣の境上に在る山。古くは浅間ヶ嶽ともいへり。長野縣北佐久郡と群馬縣吾妻郡とに跨り、那須火山脈の極西をなす著名の複式火山なり。三次

の噴出より成り、その最後に噴出したる火口丘は即ち浅間山にして、海拔八、三一六尺、頂上に御釜と稱する圓形の火口あり。直徑約一、一五五尺、火口壁及火口底の裂罅より絶えず蒸氣を噴出するのみならず、屢、灰砂を降らすことあり。又往々火口底に認むる深紅色の物體は地下深き所より上昇し來りたる灼熱の熔岩なりと云ふ。云々。【百科】

【御嶽】 オンタケ。飛彈・信濃二國の境上に屹立する休火山。本州の中部南北に横斷して、最も高峻なる飛彈山脉中に噴起する一大火山にして、いはゆる乗鞍火山脈の主峯たるものなり。海拔一〇、五一〇尺、山頂に火口數多あり。木曾街道福島町より頂上まで約六

里。〔百科〕

【駒ヶ嶽】 コマガタケ。信濃國西筑摩郡と上伊那郡との境上に聳ゆる高峯。海拔七、八〇八尺、木曾山脈の主峰たり。〔百科〕

【見つけもの】 (一) さがして見出だしたる物。(二) 僥倖にて得たるもの。思はぬまうけごと。〔天國〕こゝは(二)

【旅愁】 リヨシウ。たびのうれへ。旅中のうさ。客愁。〔天國〕

【星月夜】 ホシヅキヨ。(一) 星の光の月の如く見ゆる夜。(二) ゆうがぎくの異名。〔天國〕こゝは(一)

【眼界】 ガンカイ。目にて見わたすかぎり。視界。〔天國〕

一尺、幅三四寸あり、表面は綠色、裏面は淡綠色にして、褐色の毛茸を密生す。花は少しく不整齊をなし、五月頃、枝梢なる葉間に數多相集まりて六寸乃至一尺ばかりの穂を成す。花瓣は五枚ありて、白色に淡紅色を帯ぶ、大さ三四分ばかり云々。〔百科〕

【礫】 ツブテ。小石。

【澁々】 シブシブ。心のすゝまぬながら、やむなく事をなすさまにいふ語。しぶりしぶり。いやいやながら。〔天國〕

【蛇の目蝶】 ジャのメテフ。Chalytus Japans. 中形の蝶にして、好みて樹影に棲む。翅は暗褐色にしてこれに蛇目形の藍色環紋を印す。後翅の内縁廣くして腹部に沿うて折れ曲る。兩

二

【岨】 ソバ。正しくはソハと訓む。山のけはしき所。がけ。きりぎし。〔天國〕

【椽の木】 ト〔天國〕チのキ。七葉樹・枅・杼・楸。

七葉樹科の落葉喬木。我が國の中部と北部との低き濕地に多し。支那の北部にも産す。幹はその高さ往々九十尺に達し、周圍十八尺に及ぶものあり。枝は四出す。樹皮は始め灰褐色にして平なれど、後は變じて帶綠淡赭黑色となり、且その面に柄質の裂目を生ず。葉は大なる掌狀の複葉をなし、五小葉乃至七小葉相合して一葉をなし、長き葉柄ありて對生す。葉柄の長さ四五寸、小葉は倒卵形にして邊緣に鋸齒あり。小葉の中、最大のもの長さ

翅とも裏面に暗色樹皮様を呈す。前肢は退化して鈎爪を有せず。此の蝶は翅の美しきため採集家の好んで捕ふるところなり。〔百科〕

【徳本】 トクガウ。

【あへぐ】 せはしく呼吸す。いきづかひあらし。いきぎれす。〔天國〕

【薄目】 ウスビ。光の薄い日光。弱い日光。

【無氣味な静寂を孕む】 ブキミなセイジャクをハラむ。氣味の悪い程ひつそりしてゐた位の意。

【蘆】 ゴザ。蘭草などに編みたる敷物。蘭

席。うはむしろ。うすべり。〔天國〕

【煽る】 アふる。風のために動く。ひるがへる。〔天國〕こゝは、蘆をひるがへしながら進ん

で行く意である。

【翅音】 ハオト。羽の音。

【馬蠅】 ウマバへ。昆蟲類中、雙翅類の一種。體は頭部大にして、觸角短く、眼は小にして三箇の單眼あり。全體淡褐色、翅及び腹部には淡黒色の紋を有す。幼蟲は俗に筍蟲と稱し、馬の胃中に寄生す。うまあぶ。〔大國〕
【動顛】 ドウテン。動轉とも書く。(一)移動、轉變すること。(二)非常に驚くこと。驚きあわつること。〔大國〕こゝは(二)

三

【梓川】 アヅサガハ。鎗ヶ嶽の條参照のこと。

【徒涉】 トセフ。徒歩して川を渡る。かちわ

木。高さ百尺餘に達す。葉は線形、先端二裂し互生す。さかもみ。たうもみ。もみのき。

〔大國〕

【森々】 シンシン。樹木の並びしげれるさま。樹木の高くのびたる貌。〔廣辭〕

【雁皮】 ガンビ。瑞香科、莖花屬キガシヒの落葉灌木。幹の高さ五六尺。葉は卵形にして、葉柄なく、毛茸多し。夏日、黄色の花を枝頂に頭狀に叢生して開く。黄なるは乃ち萼の上端淺裂せるものなり。我が國、暖地に自生す。日本紙の原料に供す。〔大國〕

【一軒の板葺の小屋】 赤岩小舎を指す。

【小島烏水】 コジマウスキ。實業家兼探勝家。名は久太。讃岐高松の人。明治七年生る。横

たり。〔評漢〕

【噴尻】 サンゲワシ。山の鋭く高き貌。〔大宇〕

【割烹店】 カツパウテン。料理店。飲食店。お茶屋。〔廣辭〕

【熊笹】 クマザサ。禾本科、熊笹屬の竹類。稈の高さ三四尺、時に五六尺、細くして強韌なり。葉は潤大、長楕圓形、長さ七八寸に達す。老葉は葉縁白色にして美なり。〔大國〕

【山毛櫨】 ブナ。ぶなのき。山毛櫨科、山毛櫨屬の落葉喬木。高さ八十尺餘に達す。葉は卵形、互生し、小數の毛を有す。花は小形、果實は殻斗を有する。そばき。しろぶな。そばぐるみ。〔大國〕

【樅】 モミ。鳳尾松。松杉科、樅屬の常綠喬

濱商業學校を卒業し、その後横濱正金銀行員たり。紀行文家又山嶽研究家として知らる。

著す所「不二山」「山水無盡藏」「雲表」「扇頭小景」「日本山水論」「山水美論」等あり。(日本作者辭典)

【山女】 ヤマメ。うぐひ。石斑魚。赤腹。鯉科に屬する魚。くき。あかうを。あくち。あさる。あゐさ。あかはら。あかつ。いだ。さごうを。まるた。はい。はや。くき。あいさ等の別名あり。體は圓長にして頭小さく、吻端尖り、上顎は下顎を蔽ひ、鱗小さく、脊鱗條十個、臀鱗條十個、側線鱗の數七十三個あり。淡水に棲息する魚にして、五六月の頃、河中砂礫の處に來りて産卵す。この季節に於

て雌魚腹側に赤條を縷はすがゆゑに、「あかはら」の名あり。大き一尺内外に達す。本邦各地の清き河又は湖には大抵これを産す。淡き鹹水の所にも至ることあり。その稚魚を「せぐろ」又「やなぎ」といふ。〔百科〕

【沾んだ】 ウルんだ。

【嫌悪】 ケンヲ。きらひて憎むこと。〔天國〕

【白樺】 シラカバ。かばのき。殼斗科（若くは樺木科）の木本植物、「かばのき」屬の總名。古事記には「波波迦」と見え、和名抄には、「加波」又「迦迦波」と訓ず。樺木屬は喬木又は灌木にして、葉は互生し、葉柄ありて單葉なし、鋸齒あり。世界に産するもの三十三種あり。我が國に産する「かばのき」は一名「しらかん

恰好をした大きな石。

【峡谷】 ケフコク。谷。〔天字〕

【駒の爪】 コマのツメ。つぼすみれ。すみれ科の雜草、山野に自生す。莖は纖弱にして地上に匍匐す。葉は圓き心臟形にして縁邊に鈍鋸齒を有し、長き葉柄を具す。基部に一對の托葉あり。夏日、白色又は淡紫色を帯びたる白色の小花を開く、蒴果を結ぶ。〔蘭辭〕こゝのは特殊な黄色な花と見える。

【青猪】 アヲジシ。青鹿。かもしか。〔蘭辭〕

【日本アルプス】 英語アルプス (Alps) は高山を意味するラテン語アルペス (Alpes) から來たのであつて、一般に「白き高山」の意味に用ひられて居る。アルピンフラワー (Alpine

ば」といひ、又「しらかば」「しろかんば」「しらはりのき」「くさざくら」「ほんがうざくら」「むねば」「やてらし」等異名多し云々。〔百科〕

【櫓】 ホタ。櫓柁。木の切れ端。焚き物とするもの。ほたぐひ。〔天國〕

【消長】 盛衰。こゝでは櫓の火は既に一步白樺の皮を巻いて作つた燈火におくれてゐるといふのだ。

【原始時代】 ゲンシジタイ。人類蒙昧にして、産業いまだ發達せず、自然物の採食を以て生活したる太古の時代。原人時代。〔天國〕

【天日】 テンビ。太陽。

【立體の數を盡した大石】 立體的に色々な

(Flower) と云へば高山植物の意味である。日本アルプスもそれであるから、日本の高峻なる雪を戴いて居る大連嶺といふ意義である。しかし最初の命名者は英人であるから、歐洲の名山アルプスに似て居るといふ意味で、日本アルプスと命名したのであることは疑を容れない。最初の命名者は、ウォルター・ウエストン (Walter Weston) で、「日本アルプス」と云ふ著書がある。

日本アルプス命名當時は、單に飛彈山脉の北半を含むに過ぎなかつたが、今はその範圍が廣くなつて駿河・甲斐・遠江・信濃・美濃・飛彈・越中・越後の境上に亘り、本州の中部を横斷し、蜿蜒南北三十五里、東西二十里の大

山脉で、日本國中眞成な深山幽谷深祕の境域である。これを北・中央・南の三部に大別し、飛彈山脉を北アルプス、木曾山脉を中央アルプス、赤石山系を南アルプスと稱する。

北アルプスは飛彈山脉で御嶽を主峯とし槍ヶ嶽・大喰嶽・中ノ嶽・穂高等の一萬尺以上の高山を有し、又殆どその高度に近い白馬・杓子・鹿島鎗・烏帽子・鷲羽・薬師・燕・大天井・常念・焼嶽・乗鞍等を列ね、西北には有名な立山を擡げて高山峻嶺百座に垂んとしその高さ二五〇〇米突を超えるもの四十餘座に上つてゐる。

中央アルプスは木曾峡谷を挟み、信州駒ヶ嶽を盟主とする木曾山脉(最高九七〇〇尺)を

いふのである。南アルプスの最北と共に將基頭以南は主として純美な花崗岩の大塊で、日本の花崗岩の精粹はこゝに盡きてゐるといつてもよい。

南アルプスは赤石山を盟主とする赤石山脉、白峰(北嶽・間の嶽・農鳥嶽を總稱する)を盟主とする白峰山脉、之に連りて地藏・鳳凰・駒ヶ嶽を有する甲斐駒山脈等或は一萬尺を超過し、或は之に迫つてゐる。特色は純粹太古の水成岩の皴山であるから北及び中央アルプスの概して塊状をなしてゐるのに比して之は層状を作つてゐる。ヒマラヤ山の斷片的模型は、恐らくこゝで見られようと思ふ。

如上日本アルプス中最も長大で最も崇高な

山脉は北アルプスで、南アルプスは或一二の山の高さは之を凌ぐが、平均高度に於て之に亞ぎ、中央アルプスは比較的最も劣つてゐる。猶少しく北アルプスの特徴を述べると、氷雪に被はれて眞の白山を作れること、約三千米突を上下する均一度數の高山が、南北に均齊に連亘してゐること、大火山線がこゝに簇り噴起してゐること、火山の爲歐洲アルプス以上の變化ある事、山中に高原が甚だ多いこと、日本最高の標高を有する湖水に富むこと、高山植物の豊富と變化とに富むこと、殊に白馬嶽は日本アルプス中第一の所産地であること、山麓に温泉の湧出多く登山出發點として最も好適である等である。(鐵道省、日本

アルプス登山案内に據る。猶詳細は「同書」や、一戸・河東・長谷川共著「日本アルプス縦斷記」や、小島烏水著「日本アルプス」等を參看されたい。

【羚羊】 カモンカ。麩鹿。麩を織る毛の鹿の義。牡牝共に角あれど、通常の鹿と異なりて無枝且中空にして前額より生ずる骨軸を圍繞す。毛長く茶褐色にして柔かし。昔時これを採りて麩などを製したり。我が國幽峻の深山に産す。かもしし。〔廣〕

【偃松】 ハヒマツ。這松。高山に自生す。風雪の荒きがため、その枝幹地に伏しはふ、葉は五箇づつ叢生し、小形の穂果を結ぶ。〔廣〕

【石鏃】 セキゾク。石を材としたる矢の根。

廣辭

【山の自然の始にして又終なり】「終りなり」といふのは、山の先端を指したのである。

【ラスキン】(John Ruskin) イギリスの文學者、美術批評家且社會改善論者、牛津大學で繪畫の研究をなし卒業論文として「近代畫家論」第一卷を出し、續いで第五卷を書くに及び完結した。彼はこれにより繪畫上に於て單に英國のみならず歐洲畫壇に大きな影響を及ぼし新氣運を鼓吹した。彼は繪畫の研究の別に建築論數篇を出版した。彼は一面詩人であり批評家でありながら更に一面眞面目な社會改良家として多くの力を傾注した。著作に

は前記「近代畫家論」を初め「エニスの石」「藝術經濟學」「最後のものに」「建築と繪畫」「塵の倫理」等ある。〔文辭〕

ラスキンは詩人の天分に兼ねるに批評家の素質を以てし、深く自然と藝術との精神に觸れて、宇宙の美と大とを世人に傳へたれば、その美術に關する述作は、一代の人心をして新たなる美の意識に覺めしむる力ありき云々。〔百料〕

【高寒】 タカサム。高い處の寒さ。

【岩室】 イハムロ。いはや。

【雷鳥】 ライテウ。鶉鷄類の鳥、形狀「えぞやまどり」に類す。兩眼の上に赤色なる小形の肉冠あり、尾は長からず、脚は爪根まで羽

に接せし地に棲息す らいのとり。〔廣辭〕

毛を被る、夏と冬とによりてその羽毛を變じ、夏は黒み多く冬は純白なり、高山の雪線

鑑 賞

前課は支那の國であり河である。本課は我が國であり、山である。取材はかくの如く相反して居る。のみならず前者は書翰文體であり、後者は普通の口語體である。形式に於ても大なる相違があるのである。

さりながら紀行文たるに於ては何等相違はない筈である。一體紀行文の取扱は、容易に似て困難な點がある。それは嘗て見聞せぬ土地の旅を録したものであるから、讀むに隨つて出てくる地名に親しい知識もないことである。事實の説明を多くした文はその狀況を知るには容易であらうが、その景情を描くことは遠い知的の文となるし、主觀をまじへた紀行はそれが多くなれば多くなるほど讀む者はその實際からはなれてしまつて、ただ作者の獨合點を見るといふ結果になるものである。そこに讀者をしてその境地にあらしめる感を懐かしめる旅情の溢れたものにするのがむづかしいのである。今前課と本課とを比べて見るならば、何れもこの點に於て成功したものだと言ふべからざるであらう。

文の表現から云ふならば全く相違してゐる。前者は長江奔流の概がある、雄健である。後者は山深

くして太古に似たりとでもいふべきか、如何にも靜かな筆致である。修飾もなければ誇張もなくありのまゝである。

さて本課のみに就て尙ほ一言するならば、この作者の表現は面白い、微妙であるといふことだ。例へば

宿屋の上り框には、三十恰好の浴衣の男が、青竹の笛を鳴らしてゐた。(初から二行目)とあつて、

それは先刻上り口で、青竹の笛を吹いてゐた男であつた。(七五頁の六行目)と云ひ、終りに

すると、あの青竹の笛の音が、微かに又階下から聞えて來た。(七七頁の四行目)

とある、山間の悠長さ、淋しさが、ひしと胸に染み込んで來るではないか。而もこの青竹の笛を吹いてゐた男がこの文に織り込まれて終始し、そこに面白い情趣が描き出されてゐるのである。かくてこの文が始終會話で進んで行つてをる所に生き生きとした點があるのだ。第二節を見ると、

が、猿は案内者にとつては、猿であるよりも先に獲物であつた。(七八頁の三行目)

とある。これは如何にも案内者の心理をよく穿つた書き方である。何だかこの節の書きぶりには上品

な滑稽味が含まれてゐる。第三節の矛盾の感じを懐きながら、無愛想な(特に無愛想なと書いたのも面白い)案内者の尻について進んだあたりも、事實よくありがちなもので、自分ながら意外な感に打たれる場合があるものだ。これ等は自分の心理状態をそのまま描いたのである。その他例をあげると際限がないから省くが、第三節赤岩小屋一泊の有様などは實に面白い。第四節のラスキンなどを引張り出したところは漱石に相似たところがある。序であるが、作者のこの文と漱石のこの文とを比較して見たならば、必ずや相似たところがあると思ふ。尤も内容とか藝術の根本義に立入つては非常な相違もあらうが、併し生徒に質問して見るのも面白いことと思ふ。

要するに本課は實地の有様を離れず、情趣たつぷりとした面白い紀行文である。

山 色 新 (昭和三年二月二十八日、御代始の御歌會始)

御 製

山やまの色はあらたにみゆれとも我まつりこといかにかあるらむ

皇后宮御歌

雲の上にそひゆる富士のあらたなる姿や御代のすがたなるらむ

皇太后宮御歌

大君の御代の始のよろこびをあらたに見する山の色かな

一五 夏

作 者

【大谷繞石】 オホタニゼウセキ。名は正信。英文學者、俳人、廣島高等師範學校教授。明治八年三月島根縣松江市に生る。中學時代より小泉八雲に師事し、明治三十二年東京帝國大學英文科卒業後、久保天隨・中内蝶二等と雜誌「新文藝」を刊行したが、同三十四年兵庫縣立洲本中學校教諭となり、同三十五年眞宗大谷大學教授に轉じ、同四十一年第四高等學校教授となつた。同四十二年英國に留學を命ぜられ、同四十五年歸朝した。大正十三年現職についたのである。氏は元來俳句を好み最初は正岡子規の門に入つたこともある。

「案山子日記」「智慧と運命」「開いた處」「囚徒その他二十二篇」「落葉」「蟲の文學」「海の文學」「北の國より」などの著がある。

出 所

「北の國より」全一冊。大正十一年、東京市敬文館發行。定價二圓二十錢。作者の文集である。

要 旨

口語體で書かれた小品文の體裁を示し、その清新な自然描寫の筆致を味はせると同時に、新緑・小雨・夕立晴など、夏の景象の詩趣を酌ませたい。

解 釋

一新 綠

【新緑】 晩春又は初夏の頃の新葉のみどり。

わかばのみどり。廣辭

【崎嶇】 キク。(一)道路のさがしきこと。

(二)境遇の危難多きこと。廣辭こゝは(一)

【岐路】 キロ。わかれみち。ふたまたみち。

廣辭

【熊笹】 クマザサ。前課参照。

【鞆鞆】 タウタフ。(一)鐘、太鼓の聲の形

容。廣辭(二)波や瀑布の音にいふ語。こゝは

(二)

【岩に激する】 岩に烈しくつきあたる、衝

突する。

【白沫】 ハクマツ。白い水のとばしり。

【奔流】 はやせ。廣辭勢はやく流れること。

【盆栽】 觀賞用に供するため陶磁器の盆又は

鉢に栽培したる植物、その箇體の風韻を發揮

し自然の雅趣を形成せしむるを目的とす。は

ちうろろ。〔廣辭〕

【山躑躅】 ヤマツ、ジ。石南科シキキクの落葉灌木、諸國山地に自生多く、觀賞用として栽培せらる。莖の高さ二尺乃至丈餘、多く枝を分かつ。枝・葉に毛茸あり。葉は倒長卵形又は倒披針形にして尖端全縁、薄くして深綠色を呈す。四五月頃枝端に開化す。花冠は漏斗状をなし、濃紅又は淡紅にして美麗なり。さつき・きりしま等の變種あり。〔廣辭〕

【榼】 ハジ。ハゼはハジの轉。黃榼とも書く。漆樹科ウルシの落葉喬木、暖地に自生し、又、採蠟のために栽培せらる。幹は高さ二三丈、葉は奇數羽狀複葉にして、小葉は長卵形、全縁無柄、平滑にして光澤あり、秋に至れば紅

葉す。五月頃、黄綠色の小花を圓錐花序に綴る。果實は豆大楕圓形にしてこれより蠟を採る。木材もまた種々の用に供せらる。はぜ。はじのき。はぜのき。〔廣辭〕

【岩鼻】 イハハナ。岩のはし。去來の句に、「岩はなやこゝにも一人月の客」

【素絹】 ソケン。鹿絹。粗末なる絹。白の生絹ナメなどなるべし。海人藻芥、「凡絹有四種、謂ゆる長絹・平絹・紬絹・鹿絹、是也。」運歩色葉、「素絹」〔天國〕

【戦ぐ】 ソヨぐ。そよぐと動く。そよぐと音立つ。〔廣辭〕

【どす黒い】 光澤がなく黒い、どくどくしく黒い。

【對照】

(一) 照らし合はすこと。みくらぶること。(11) Contrast. 價值・狀態・性質・分量等の相隔たり若しくは相反するもの、相對して

存在して、彼此の比較上、一方或は雙方の特性の分明なること。〔廣辭〕

鑑賞

色彩の鮮明な、印象のはつきりした文である。全く繪の感じがする。

「急に日暮になつたやうな氣がする」に對して「やがて岩に激して白沫を飛ばして居る奔流が眼下に見える」と書いた對照。「枝振の好い松が、その岩の破れ目裂け目にしがみついて生えて居る」の「しがみついて」といふ表現の仕方。「とある岩鼻を廻ると」とあるのは、急に展開される瀧を書くには力ある文字である。「瀧の風に、その若葉の小枝が戦いで居る。こちらの山の杉や檜のどす黒い縁と對照して、その楓の若葉の縁が殊に鮮かに觀られる。」は、この文の主眼である。若葉のなよなよした戦ぎや、どす黒い杉や檜の縁と對照した楓の若葉の鮮かさがはつきりとした印象を與へるではないか。終りの一行「空を仰ぐと、晝の月が淡白く懸つて居る。」は、全文を引きしめた貴重な言葉で、かくていよ／＼一幅の繪となつた感がある。

二 小 雨

一 五 夏

解 釋

【細雨】 サイウ。こまかきあめ。きりあめ。

【廣辭】

【繰る】 クる。(一)順次に引き出す。「雨戸を

繰る。」(二)順次に送りやる。(三)順次に數へ

行く。(四)細長きものを、物にまきつけて引

き出す。「絲を繰る。」(五)わたくりにかけて綿

花の種子を去る。「綿を繰る。」【廣辭】こゝは(一)

【しめやか】 蕭然。蕭條。(二)いと物しづか

なるさま。(三)うちしめりて悲しげなるさ

ま。(四)うちとけて睦まじく語らふさま【廣辭】

こゝは(一)

【簷】 ノキ。檐に同じ。音エン。タン。ひさ

し。のき。【廣辭】

【点滴】 テンテキ。したゝり。しづく。あま

だり。【廣辭】

【番傘】 バンガサ。常用の粗末なる雨傘。

【廣辭】

【竹下駄】 タケゲタ。竹を割り、緒をつけて

作りたる下駄。うたたね、「己が氣を割つて見

せたる竹の下駄。」【大國】

【臍氣】 オボロゲ。十分たしかならぬこと。

ぼんやり。不分明。【廣辭】

【陳腐】 チンプ。ふるくさきこと。又ふるび

くさること。【廣辭】

【言草】 イヒグサ。言種。言ふべきたね。い

ひごと。【廣辭】

【畑物は息がつけまい】 畑の作物は枯れて

しまうだらうの意。

【裏げて】 カ、げて。音ケン。【大宇】

【湯ほてり】 湯で熱氣を發してあつくなるこ

鑑 賞

作者自身が「陳腐な言草だが全く繪のやうだ」と云つてをる。この文も亦全く繪のやうだと評する外はあるまい。これが夜明け方に題材を取つたから尙よいのだ。細雨の感じやら、浴場やら、周圍の風景やら、實に眞を穿つた表現である。觀察の鋭いところ、小品文の上乗なものであらう。

三夕 立

解 釋

【樋】 トヒ。また、ヒ。竹・ブリキ・銅・鐵など

で作り、軒の雨だれをうけて導き下すために

設けたもの。

【葉蘭】 バラン。蜘蛛抱蛋・紫蘭。百合科の

と、湯でのぼせて顔が赤らむこと。

【歌む】 ヤむ。音ケツ。【大宇】

【徂徠】 ソライ。ゆきき。往來。【廣辭】

多年生草本、暖地に自生し又、庭園に栽培せらる。地下莖を有し、葉柄を高く地上に挺出して末端に葉を開展す。葉は大形にして卵狀披針形をなし常緑なり。四月頃、根莖に接し

て花莖を抜き一花を開く、花は深紫色にして壺状をなす。花後、緑色球形の果實を結ぶ。

【廣辭】

【秋海棠】 シウカイダウ。秋海棠科の多年生草本。昔時支那より傳來せるものといふ。庭園陰濕の地に栽培せらる。多汁なる莖は高さ二尺許、葉は互生し、歪状楕圓形をなし鋭頭にして鋸齒あり。九月頃枝梢上に淡紅色の花を開く。單性にして雌雄同株、雄花は單體雄蕊を有し、雌花は三角形の子房を有す。種類多し。近來温室内に培養せらるゝ西洋の「ベコニア」はこの種類に屬す。斷腸花。【廣辭】

【ひた濡れる】 全體のぬれそぼつこと。すぶぬれ。【廣辭】「ひた」は、接頭語で、一向き、ひ

たすら、ひたぶる。他を雜へぬ、純一、一面などの意。

【裏座敷】 おもてだたぬ處にある座敷。(表座敷の對) 甲陽軍鑑五「公界は法度なりとて、裏座敷にて亂舞あり。」【大國】

【煌めく】 キラめく。音クワウ・ワウ。かがやく、かがやいて明るきさま。【辭源】こゝはきら／＼光る意。

【小半時】 コハントキ。昔の一時の四分の一、即ち今の三十分。

【十五夜の月】 陰曆八月十五夜の月。この夜を特に觀月の佳節として古來酒宴などを催してこれを賞した。中秋の月。

鑑賞

夕立らしい書き方だ。あつさりしてゐる。「南は墨を流したやうに黒くなる。我等が眞上の空は、雲の絶間にまだ青空が見える。」一雨来れば宜いが。」の邊は、夕立の空模様やら、久しく降らぬ旱天の頃などが思ひやられる。「電燈の光を受けて葉を煌かす。」は、涼しい表現である。最後の「十五夜の月が洗はれたやうに、清く隣家の瓦屋根から二尺も高く上つて居るのであつた。」は、この文の主眼である。

参考

小品とは、すべて小さい作品といふ意味で、文章のみならず、彫刻・繪畫にも用ひる。小品文といへば、小さな文章即ち短い文章の意である。尤も場合によつては普通の文章と小説との中間に位するやうな文章を小品文と呼ぶこともある。

さてこの小品文は短きは二十字詰の五六行、長きも二三十行を出でない位の長さで、とにかく一篇としてまとまつてゐる文章を指すのである。かくの如く分量に制限のある文章であるが、内容には制限はないのである。叙事文・抒情文・議論文などと、その書かれた内容によつて、文章には種類は多いが、小品文は、その内容としては、これ等の種類のすべてのものを包含する。併し最もふさはしいの

は、小景・小情を寫すにあると思ふ。

元來俳句は著眼を重んじて、人の氣のつかない細かなところに或る面白味を發見するといふのがその主眼であるが、小品文もこれと同様で觀察を細かにしなければならぬ。

今小品文を書くに當つて、必要と思はれることを箇條書にして見ると、

- 一、觀察を細かにして創意を示す。
- 二、説明的でなく、印象的に書くこと。
- 三、餘情のあること。これが爲には――
 - 1 言葉を簡潔にすること。
 - 2 暗示的な書き方をすること。
- 四、側面から見ること。(間道を利用すること)
- 五、主眼點をはつきり書くこと。
- 六、機智を動かすこと。
- 六、警句を活用すること等であらう。

一六 造化の鞭

作者

【幸田露伴】 名は成行。舊藩士成延の三男。慶應三年七月江戸に生る。明治四十二年夏、「露伴叢書」

再刊の時に當り、卷頭に記して曰く、

「博文館予が舊文を新刊するに當つて、予に求むるに自傳をつくらんことを以てす。予はこれを辭す。聽かざるなり。やむを得ずして自ら傳ふ。曰く、露伴は武州の人なり、慶應三年七月江戸に生る。その乳兒たるに當つてや、孱弱多病、死して而して蘇するもの數次。醫曰く、この兒憫むべし、命の瘍せざらば則ち身の廢せんこと必せりと。父母悲傷し、哀々劬勞、擁護甚だ力む、而して後わづかに全きを得たり。又や、長ずるに及んで眼を病む。天目を仰ぐ能はざるもの數十日、瞑目枯坐、心ひそかに瞽者を分とす。幸にして癒ゆるを得たりと雖も目力終に人に及ぶ能はず。伊呂波を關女史に受け、九歳甫めて小學に入り、十三歳業を終ふ。次で或は東京府中學に、或は菊池氏私塾に學びし

が、故有りて皆業を卒へずして止む。十七歳より後世路に縁縁として、嬰姍今に至る。詳しく言ふに足らざるなり。それ今の我の我に於ける我猶之を厭はんとす、況んや昨の我の我に於ける、我豈敢て之を傳ふるを欲せんや。是の如きもの即ち是我也。我ただ吾が深く感じて而して忘るゝ能はざるものを記するのみ、是亦蓋し我ならんのみ。」と。

明治十五・六年、夜々菊池松軒先生に就きて聽く、年少無知と雖も、程朱の學の藩籬を窺ふを得たり。十六年、電信修技校に入る。給費生となりて自ら支へたるなり。十七年、同校卒業、實務を執る。十八年、判任に補せられ、次で北海道後志に赴任す。二十年、官を棄て上京す。乃ち免官せらる。二十一年、「露園々」を草す。二十二年、讀賣新聞社客員となる。五月、「風流佛」刊行。二十三年、國會新聞社に入る。六月、「葉末集」刊行。二十四年、谷中に一廬を購ひ、獨居す。十月、「新葉末集」、「二宮尊徳」、十二月、「勇魚捕」刊行。二十五年七月、「寶の藏」十月、「尾花集」刊行。二十六年、谷中を去る。三月、「眞西遊記」、九月、「枕頭山水」刊行。二十七年、東京府下寺島村字番場に寓居す。春末より夏に互り、病みて死に瀕す。冬、窮困の故を以て、都を去り上總に寓す。二月、「日蓮上人」、六月、「有福詩人」刊行。二十八年、出京、芝に寓し、小田直太郎氏媒妁を以て入室氏を娶る。將棋に耽る。十二月、「さゝ舟」刊行。二十九年、國會新聞廢刊解社。春陽堂に「新小説」を起す。妻の諫によりて漸く將棋に

遠ざかる。二月、「きくの濱松」、「憐悻」、「ひげ男」、五月、「ひとり寢」、八月、「雲の袖」刊行。三十年、神田に移居す。次で寺島村字新田に移る。七月、「水上語彙」、八月、「伊能忠敬」刊行。三十四年、長女を得。九月、「譚言」、十一月、「長語」刊行。三十七年、次女を得。三十八年一月、「出廬」刊行。三十九年一月、「天うつ浪第一」、「潮待草」、六月、「天うつ浪第二」、「不藏庵物語」刊行。四十年、長男を得。この年同地に新居を營む。一月、「天うつ浪第三」、五月、「はるさめ集」、十一月、「蝸牛庵夜譚」刊行。四十一年一月、「寶の山」、「玉かつら」刊行。五月、京都帝國大學講師を囑托さる。同月、「小品十種」、九月、「頼朝」刊行。四十二年、京都帝國大學講師を辭し、歸京す。六月、「露伴叢書再刊前編」、九月、「露伴叢書再刊後編」刊行。四十三年、妻病死。四十四年一月、「露伴集第一」、五月、「露伴集第二」刊行。四十五年(大正元年)五月、長女を失ふ。七月、「努力論」刊行。十月、船尾榮太郎氏媒妁、兒玉氏を娶る。三年四月、「修養論」、八月、「洗心錄」刊行。九月、願に依り京都帝國大學講師囑托を解かる。十二月、「立志立功」刊行。四年八月、「悅樂」刊行。八年三月、小石川に僑居す。九月、「冬の日抄」刊行。十四年九月、「幽秘記」、十二月、「蒲生氏郷・平將門」刊行。十五年(昭和元年)三月、「名和長年」刊行。四月、「活死人」を草す。同月、「頼朝・爲朝」、六月、「洗心廣錄」刊行。十一月、長男病歿。昭和二年、寓居を轉す。一月、「龍姿蛇姿」、六月、「春の日抄」刊行。十月、「武田信玄」を草す。(現代日本文

學全集、幸田露伴集、年譜)

高須芳次郎氏曰く、

硯友社の紅葉に對して、必ず連想されるのは幸田露伴である。紅葉がその同人、門下等と手を携へて、藝術の道を濶歩したのに對して、露伴は主として、孤獨の道を悠々と歩いた。初期の彼は佛教思想殊に禪的思想を抱いた詩人であつた。悟道、道念、念力、意力、神興と云つたやうな言葉を彼の作中にその意味を見出すことが出来た。彼を解するにはいくらか佛教思想に通ずることを要する。少くとも彼は紅葉のやうに浅い小主觀に甘んじたものではなかつたと見える。人生を遊戲視しようとしたものでなかつたと思ふ。もつと眞面目で心靈を重んずることを知つた彼は、小説のうちに佛教思想を寓しようとしたのである。この點から彼を理想派又は理想主義者と呼ぶことが出来よう。

勿論彼は、大乘佛教の極意に徹したのでもなければ、佛教の上に深い造詣を持つたものとも見えな。けれども佛教殊に禪的思想などによつて、自家の心境を切り開いてゆかうとする熱意を持つて居たことは明かである。そしてヨーロッパ哲學や科學などの窓から、佛教思想を眺めようとしたのではなくて、寧ろ彼の詩情を通して、それを見ようとした傾がある。この點から云へば、彼は佛教的詩人である、東洋思想の根を培つた文人である。かうした人の小説が出て、初期の硯友社同人等の皮相寫

實乃至現實主義に對峙したのは、興味あるコントラストである。

彼の出世作は二十二年九月發行の「新著百種」第五篇に出した「風流佛」である。その前に彼は「都の花」に「露團々」を發表したが、それは彼が本質から離れて、歐化熱にかぶれたもので、單に興味中心の作に過ぎなかつた。「風流佛」になると彼が独自の天地へ出て來たことがわかる。それから彼は「一口劍」「ひげ男」「艶魔傳」「縁外縁」「血紅星」などを出し、「五重塔」に至つてその特色が殊に闡明された。それは二十二年から二十五年頃迄の收穫で、日清戦争前に書いた「風流微塵藏」なども、その意氣の旺んなことを示せるものであつた。

以上を通觀して考へると、彼を小説家の範疇に封じこめてしまふのはどうかと思はれる。少くとも、現在わが文壇に於て、狭い意味に解して居る小説家とは見たくない。彼はどうしても詩人だ。そして彼の初期の小説は以上の通りだが、さうした小説よりも、寧ろ紀行文、小品などに、より多く彼の詩情が自由に披瀝せられて居るのを見る。例せば「枕頭山水」や「夢日記」などの類である。さうした方面に赤裸々の露伴がよく出て居るやうに思はれる。……

彼の表現法は、觀察や實驗などに重きを置かないで、彼の主觀によつて机上に作りあげた人物を空想的に描き出さうとした爲、たとひ人物そのものに奇矯、非凡なところがあつたとしても、個性をは

つきり浮べ出すことが出来なかつた。そこには輪廓だけあつて魂がなかつた。通有性だけあつて特有性がなかつた。また心理描寫を行つても、ある一角が誇張されただけで、固定的傾向から脱することが出来なかつた。それに時々、文章の調子に引きずられたり、作爲のあとが目立つたり、氣力のみで、文章を書き通さうとしたりして、破綻を示すことがあつた。西鶴に私淑しながら、唯西鶴の文章の調子を摸したやうなことは紅葉のみならず露伴にもあつた。

けれども彼は確かに文章の妙手であつた。紅葉のやうに艶麗、華美なところはなかつたけれども、強き氣力で押通してゆく男性的な勁健の趣は彼の獨得であつた。その日記などは、蒼古、簡淨の味があつて殊に宜い。唯彼が文章の上に於て、紅葉のやうに時代の大勢に適應して、新しい試みを重ねてゆく傾きに乏しかつた爲、その初期の時代に於て略ぼ固定してしまつたのは、彼の弱點であつた。

要するに、皮相的な寫眞や江戸式の遊戯氣分が、文壇の大勢を支配して居た時に、露伴が一人別な世界に住んでゐたのは文壇の單調を破る一勢力であつた。唯彼が佛教思想乃至東洋趣味に親炙した割合に歐米思潮や文藝に親しまなかつたことが、彼の特質を單調な狭いものにしてしまつた。彼が日本のホイスマンズとなつて、第二の「大寺院」^{ラカセドラル}を書き得なかつた所以である。(日本現代文學十二講)

出 所

「潮待ち草」全一冊。明治三十九年三月十五日、東亞堂發兌。定價八十五錢。
その自序に曰く、

「潮待ち草四十八章、その第一より第三十九に至る三十九章は、明治三十八年これを草す。その他の數章は前年若くは數年前の稿にかゝる。附録「土偶木偶」亦乙巳の歲これを作る。雜文・小説、彼此皆陋、人に示すに足るもの有る無く、たま／＼刻成つて自らこれを讀むに、ただ我が才拙にして、筆穉なるを愧ぶるあるのみ。」と。

一讀するにこの書程善く著者の性格を表したるは稀なるべし。吾人は本書が單に文學的產物として價值多きを語ると共に青年に對する教訓書として乾燥無味の修身書よりも遙に效多きを揚言して憚らざるなり。(太陽批評)

殊に「土偶木偶」は著者の詩情の決して老いざるを見るべくその第五回の「さぎれ文」の如きは絶世の妙文「金色夜叉」の宮の書簡の如きは到底比べものにならぬ心地す。(中央公論批評)

書名は、「……潮待つ間に爲すべき事あるを見出してこれを爲せば、ただ時の足らざるを覺ゆるのみにて更に心の焦らるゝことなど有るべくも無し……」によつたのである。

本課は三十六「雜草」から採擇した。

要 旨

雑草は人間の怠惰を警める造化の鞭だといふことに托して、人の修養の一日もおろそかにすべからざる暗示を悟らせ、同時に文語體の小品文を授けたいと思ふ。

段 落

原文によると、この文は二段から成立つてゐるが、本課にはその後半の一節のみを採擇したので、別段こゝに述べる必要もないと思ふが、何かの参考に前半をもあげておく。

「雑草といふものこそおもしろきものなれ。百坪の庭には百坪の雑草生ひ、千坪の庭には千坪の雑草生ふるなり。世若し嘉禾良穀のみにて、雑草といふもの無からば、富貴のものは長へに誇りて、貧賤のものは食を得ざるにも至らんを、雑草といふものゝ生ふるが爲に庭園の驕りも限りあるなり。然らずば百萬坪二百萬坪の庭園を造りて、益も無くおのが驕奢のために國土を塞がんもの、一代に三人四人は必ず有るべし。雑草は人間の驕奢に課する租税にやあらんとおもしろし。」

とある。これは雑草の彌蔓に托して吾々人間に暗示を與へたといふ點に於ては後段も同じであるが、併し

一、前段では、雑草といふものゝある方がよいのだ、無かつたらよいものばかりが獨占することゝな

る。貧賤な者もあつてよいのだ、無かつたら富貴な者のみの天下となる。反對黨もあつてよいわけだ、無かつたら味方同士の世界になる。

よいものばかりはびこることは理想的にはよいかも知れんが、物の進歩は必ずしもさうでない。お互に競争してこそ始めて進歩があるものだ。さうでなかつたら、それこそ富貴なものは自己の欲するまま、美花珍木の蔓るに任せて天下の大半をも庭園にするかも知れぬ、だから雑草は人間の驕奢に課する租税かも知れん、さう見ると雑草も面白いと云つたのである。

二、後半は「要旨」のところに書いた通りである。今度は雑草はおそろしいものだ、と書いてある。雑念悪徳すべて驅逐せねばならぬといふ寓意になる。

解 釋

【雑草といふものこそ恐ろしきものなれ】

こゝのこそ・なれの係結法を十分に納得させたい。山田孝雄氏の「日本文法論」には、

「吾人の解釋によれば、係り詞と稱するものは述語に影響を及ぼせる助詞といへる義にし

て、結び詞と稱するものは述語となれる詞なりとす。かくの如く解して始めて係結の眞義は明にして外形に拘泥し、末に趨る弊を矯むることをうべし云々。」まだ書きたいが、長いから省略する。同書六一一頁以下参照せられ

たい。併し通説によつてよからう。

【蹂躪り】 フミニジリ。

【刈薙ぎ】 カリナギ。刈りはらふ。

【あはよくば】 もしかすると。ついすると。

【虐げて】 シヘタげて。しひたぐは、しへた

ぐの訛。(一)残酷なる取扱をなす。非道なる

待遇をなす。(二)暴威を振ひて苦めなやま

す。(三)道理を曲げて罪におとす。【魔】こゝ

は(二)

【園丁】 エンテイ。植木屋。庭造り。【魔】

【田夫】 デンプ。田舎者。【魔】こゝは農夫の

意。

鑑賞

形式から云へば文章は勁健である。簡潔である。到る處に對句を用ひて居るので調子がよい。内容

【その咎を得て】 その罪の報いを得て。

【道高きこと一尺、魔の高きこと一丈】

道高ければ魔盛なりと同じ。道德の盛に説か

れてゐる時一方に魔道の盛なるを云ひ、又佛

法盛なれば邪法も亦随つて興るといふことも

ある。室町物語に、「佛法さかれば魔さかる」

沙石集に、「佛さかれば魔さかる」とある。こ

こは絶えず修養に努め悪徳を除くに力めて

も、一方ではそれ以上に悪を犯すことのひど

い意に用ひたのである。

【惰る】 オコタる。

【佳報】 よい報い。好結果。

から云へば、着眼點がよい。必ずしも教訓がましくなくて而も教訓がひしと胸にこたへる。即ち正面からでなく側面から教へたのである。側面から来るにはそれに伴うて比喻が必要となつて来る、雜草がそれだ。「道高きこと一尺、魔の高きこと一丈」といふのがそれだ。尙こゝに載つてゐない前半と、この一節とを考へ合すと、作者獨得の對照法がはつきりする。前には「雜草といふものこそおもしろきものなれ」とあつて、後半では、「雜草といふものこそおそろしきものなれ」とある。即ち前には、あつた方が面白いとあつて、後には除かねばならぬものだとして來て居る、面白い書き方だ。蓋し作者のきまきつた修辭法である。

露伴氏の文章

「洗心廣録」を読む。小説よりかういふものによつて、露伴氏の學殖文藻識見が充分に何はれるのである。氏が徳川時代に生れてゐたなら、一代の大文章家として天下を風靡したかも知れない。今時、かういふ漢文崩しの名文を書きこなす人は他に無きさうに思はれる。私なども讀みながら文辭の上に一種の興味を覺えるのであるが、しかしそこに含まれてゐる思想や處生訓からはさして深遠な味はひを味ひ得られないのである。……同じく「雜文」とか「隨筆」とか云はれるものでも、「洗心廣録」を讀んだあとで新年號のいろ／＼な雜誌の雜文隨筆を讀むと、表現の方法がかうも違ふものと驚かれる。同じ處世訓でも威儀を正して説かれると重味があるのだが、今後は、こんな古典的名文を書き得るものは出て來ないだらう。露伴氏には模倣者がない。最後の一人である。

——正宗白鳥、昭和二年二月中央公論——

一七 一枚の大理石

作者

【西田幾多郎】 明治元年石川縣に生る。第四高等學校を中途退學し京都帝國大學哲學選科を了へた。嘗て第四高等學校に教鞭を執り、現在京都帝國大學の教授で、我が國第一流の哲學者である。哲學思想の影響は多くベルグソンより來てゐる。文學博士。

著書には、「自覺に於ける直觀と反省」「思索と體驗」「意識の問題」「善の研究」「藝術と道德」等がある。

出所

「震災記」

要旨

震災所感を味はせたい。地震國たる吾々日本人は震災に逢うて如何なる反省を促されたか。物質的

文明並に精神的文化の方面に如何なる缺陷があつたか。それに對して吾人は平素から如何なる思慮と覺悟とをもたねばならぬかを知らせたい。

段落

一、震災に逢つて……何事もその日ぐらしであつたことである。(九四頁の初の行まで)

震災に逢うた我々日本人は三つの反省を促された。

1 誠實が足らなかつた。

2 有機的統一といふ考に乏しかつた。

3 思慮が足らなかつた。

二、元來我が國は……靜かに反省する心を喚起したい。(九五頁の終から二行目まで)

深い思慮が足らなかつた。それは物質的文明の方に於ても、精神的文化の方面に於てもその通りだから、かゝる機會に反省する心を喚起したい。

三、自然と文化とは……(終りまで)

自然を離れた人爲的文化は失敗に歸するのだから、一枚の大理石から刻み出されるやうな自然を根抵とした文明文化であつてほしい。

解 釋

【誠實】 偽りなくまめやかなること。まじめ。〔大國〕

【手を抜かないで】 すべき事を省かないで。〔大國〕

【手固く】 手堅。爲すこと確實にして危からず。たしかなり。〔大國〕

【有機的統一】 有機體のやうな統一のあること。「有機體」英語 Organism 一個の物が多くの部分より成り立ち、而してその各部分は一
定の目的の下に統一せられ居る全體の稱。即ち、全體の各部分は、單に機械的に集まれるものにあらずして、その間一定の統一を保ち、部分と全體とは互に相離るべからざる必

然的關係を有して、部分に或る變化あれば、隨ひて全體にその影響を及ぼし、全體に變化あれば、部分に影響を及ぼすが如く、部分を離れて全體なく、全體を離れて部分なきもの。國家、社會、宇宙等にこの語を應用す。〔大國〕

【その日ぐらし】 (一)その日の收入にてその日の生活を支へゆくこと。少しも餘裕なき生活。(二)その日を送り過ごすのみに安んじて、他日のことを思はぬこと。〔大國〕こゝは

(一) 【徵す】 チョウす。(二)召す。よび出す、(二)證據立つ。あかす。(三)問ふ。ただす。

(四) をさむ。とりたつ。(五) もとむ。要求す。〔廣辭〕こゝは(一)(五)

【喉元過ぐれば熱さを忘れる】 苦しき時には人を頼み、苦しみ去ればその恩を忘るゝことなどに譬ふ。〔大國〕こゝは危険が去るとすぐ危険の時を忘れる位の意。

【物質的文明】 物質上の文明。物質的は精神的の反對。(文明)文教盛んにして人智進歩し、百般の事物整備して世の開明に赴くこと。人文發達して光明あること。〔大國〕

【文化】 文學、教化の進歩して世の開明に赴くこと。〔大國〕

鑑 賞

大正十二年九月一日の關東震災に就ては、當時幾多の感想文が發表された。併しこの文ほど、徒に

【没頭】 ボットウ。その事に熱中すること。その事のみ精神を注ぎ込むこと。〔大國〕

【一夜漬】 イチャヅケ。一夜の間に漬けたる漬物。早漬。〔大國〕こゝは急拵への意。

【根柢】 コンテイ。ね。ねもと。〔廣辭〕

【頽廢】 タイハイ。くづれられること。やぶれすたれること。〔廣辭〕

【大理石】 Marble。石灰岩の變質より成る岩石。常に層狀又は扁豆狀をなして各時代の地層に露はる。通常雪白色にして、或は黒・赤・黄等の諸色を交ふるもあり。建築用、裝飾用に供せらる。〔廣辭〕

論を弄する事なく堅實な妥當性を有する根柢のしつかりした文は稀と思ふ。その所感は簡單だ、簡單だが内容が充實して居る。

物質的文明の方面から見て、「誠實が足りない」と作者は云ふ。ほんたうにいゝ加減にする事の多い我々である。只形だけ整つてゐれば、それで事足りたと、すましがちな我々ではあるまいか。「有機的統一」と云ふ考に乏しいと第二に云ふ。物を統一的に組織的にしようとしなさい。行きあたりばつたりで手近な物の表面だけを、よくしてそれで平氣でゐる事の多い我々ではなからうか。だから、「深く考へて大なる計畫を立てることがなく」一時の間に合せて辛抱して平氣でゐるやうになるのではなからうか。それ等の事は、只物質的文明に表れるだけでなく精神的文化の方面にも表はれてゐることが感じられる。國家全體の上から見ても、一個人の生活の上から見ても、我々はこの文によつて多くの反省資料を與へられる事と信じる。

震災當時東京に在住して災害に直面した編者の感想——焼け残つた東京の町々も直ちに困つたのは食料の不足であつた。吾々は少しの残米、或は役場から配給される玄米を互に分け合つて食べた。この頃の東京人は「人間らしい人間」であつた。虚榮もなく利己もなく、弱者には多くを與へるまことの人間であつた。涙ぐましい行爲に感激した事は幾度か知れない。この心をいつまでも持ち傳へたら世の中は眞によくなると思つた。併し遺憾ながら長續きはしなかつた。旬日も経た頃には醜いせり合ひが諸所で演ぜられた。女の着物も次第に派出になつて一ヶ月も経たぬうちに、焼灰の堆高い山手線の停留所などにけばけばしいモガ風の衣裳が見られた。忘れ易い人の心。

一八 空行く雁

出 所

【曾我物語】 十卷。阪東の將士相會して赤澤山にて遊獵の際角力を催し、河津三郎が近江小藤太・八幡三郎の爲めに射殺されし事より、曾我兄弟祐成・時致が、建久四年癸丑（一八五三）源頼朝の富士野の狩に於て、父の敵工藤祐經を討殺し、祐成・時致が十番切の武勇を顯せし事の始末を、詳細に記したるものなり。正保三年丙戌（二三〇六）版行す。（國書解題）

書名、十二卷。曾我兄弟仇討の始末を記したるものなり。著者詳かならず。寛永四年板行す。復刻數種あり。又活字本十二卷・大石寺本十二卷・本門寺本十卷・新撰蘇我記五卷・隱顯曾我物語五卷等の異本あり。その中大石寺本は全文を眞字にて書き、諸本中の古きものと見ゆ。寛永版等の流布本は大石寺本に伊東調伏の事等を増加したるものなり。隱顯曾我物語は、康正二丙子年初夏上旬曾我常陸入道祐賀の編したるよし見えて、調伏の事等の怪談はなく、記事穩當なれど、なほ流布本よりも後に

訂正して出したるものなるべきか。新撰蘇我記はまた根元曾我といひ、伊豆の人伊東祐綱入道道順の家傳を記したるよしなれど、同じく近世の作なるべきか。この書の著者を、惟喬・惟仁の位争の條に、「わが山の住侶慧亮」とあるを引きて、叡山の僧の作なるよし舊説にあれど、この文は平家物語より採りたるものと見え、大石寺本には「わが山」なければ、證とし難きに似たり。本書を按ずるに、伊豆・相摸・駿河の地理に詳かにして伊東・曾我の家々の事を委しく知れるものゝ筆になりたりと見ゆ。吾妻鏡によるに、この仇討の後曾我太郎祐信、曾我庄の年貢を免ぜられ、祐成兄弟の亡後を追弔し、祐信の子孫繁昌して關東の名家たり。この物語はその家より出でたるものと見るべきか。又その一門足利氏に仕へ、近世徳川氏に歸して旗下たりしもの數家あり。その家祿多きは五千石に至る。流布本を更に修正したるは、その家に縁あるものにあらざるか。天文年中の作運歩色葉集蘭手屋形の條に曾我の語見え、謡曲小袖曾我・夜討曾我等はこの物語より出でたりと見えれば、足利時代既に世に流布せしものなるべし。〔百科〕。

要するに「曾我物語」は十卷、若しくは十二卷。作者未詳で頗る異本が多いと云ふことになる。池邊義象曰く、

凡そ我が國復讐の事蹟少なからずと雖も、この兄弟が事あつて以來、これのみ専ら言ひはやされ、

今に至りて猶止まざるは如何なる故か。……これ他なし、兄弟が幼少の時より相誓つて復讐の一念を盛にし、形影の如くに相伴ひ、百折不撓の精神を以て萬難を排し、遂にその志を達せしといふのにあるのみ。室町時代に謡曲出來て、曾我が事數書先づ成り、徳川時代の初期に曾我物語成りて、その始終を詳かに語り、水戸の大日本史には、兄弟を孝子傳に入れて之を激賞し、その他近松の曾我會稽山、馬場の曾我勳功記等續續出でて、講談に演劇に、孝子の手本として、以下おしなべて人の子たるものゝ模範とするに至りたり。(曾我物語について——國文叢書)

本課は曾我物語第三、「九月十三夜名ある月に一萬・箱王庭に出で、父の事を歎きし事」及び二兄弟を母の制する事」の條から採つた。

要 旨

父戀しさの涙にくれる幼い兄弟の衷情、又、その衷情に對して、陳じやるすべもなく、慰めすかすかたもなく、咽び泣く母の斷腸の思、さうした親子の悲しい、やる瀬ない心持に同情させると共に、兄弟がその純な涙のうちに、お互に父の復讐を誓ふといふ孝子としての至情を十分に味はせたい。その痛ましいほどの悲哀のうちに一種の凜然たる心の芽を人知れず我れの内部に育て、行く兄弟は、實に恐しいまでに、父に對する至純至誠の愛の持主である。その點を特に考へさせたい。

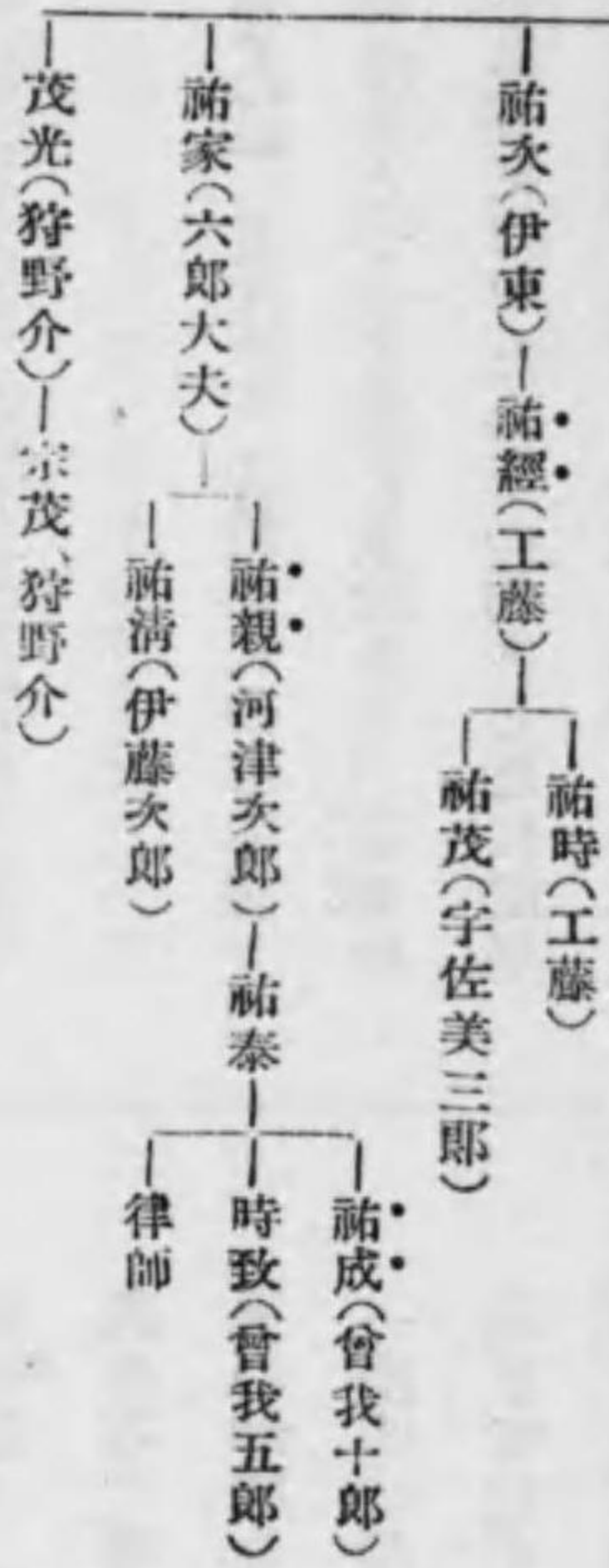
梗概

かく内容上の主眼を没却してはならぬが、又辭句の吟味に力を注いで、いはゆる古典的文學の趣味とか價值とかいふものゝ一端をも味はせ知らせる事も本課の主眼である。

藤原武智麿の裔、爲憲、官、木工助となつたので工藤と稱し、子孫は伊豆・駿河地方に居た。爲憲から六世目を家次といひ、家次に祐家祐次二人の子があつたが、家次は祐次を愛し、祐家が早世したので、家を祐次に譲り、祐家の長子祐親には河津の庄を興へて分家させた。祐親は嫡孫でありながら、工藤を繼がしめなかつたを甚だ不快に思つてゐた。家次の死後、祐親は訴訟を起して工藤を繼がうとしたが敗訴した。後、祐次が病にかゝつて臨終に及んだ時、祐親は陽に親切を装うて病床を訪ね、慰藉頗る努めたので、祐次は大いに喜び、幼子祐經を託して死んだ。祐親は祐經を引取り養つて京に上せ平重盛の臣とし、その間に工藤家の領地を奪ひ、宿志を遂げた。祐經はこれを知つて大いに驚き憤つて訴へたが意の如くならず、勢力は全く祐親に移つたので、いつか祐親を害して所領を取返さうとしてゐた。時に頼朝は伊豆に流されてゐたが、祐親等が之を迎へて赤澤山で遊獵をした。この機を覗つて、祐經はその家の子近江小藤太・八幡三郎に命じて祐親親子を圖らしめたが、祐親は手指に傷いたのみで助かり、祐泰は射殺された。祐親は大いに悲憤し次子祐清をやつて、近江・八幡を殺

さしめた。祐泰の二子、祐成・時致はその後この事を知つて祐經を狙ひ、建久四年頼朝が富士野の卷狩を催した時に祐經の陣屋を襲うて之を殺し素志を達した。工藤家の略系は次の通りである。

藤原鎌足—不比等—武智麿—乙麿—爲憲(工藤)—時理—維景(狩野氏)—維職—維次(狩野)—家次(工藤)—



曾我物語では、家次を工藤大夫助澄に、祐次を助繼に、祐家を祐親に、祐泰を助通にしてある。

段落

- 一、頃は人皇第八十一代……皆袖をぞ絞りける。(九八頁の初に行まで)
 - 稚な兒が亡父を戀ひ慕ふ、そして思ひもよらぬ彼等の述懐は聞くものをして袖を絞らしめた。
- 二、かくて夏も過ぎ……後に内へ入りにけり。(一〇〇頁の初に行まで)

九月十三夜の月明に、雁がねを見て亡父を懐ふ。
三、その後二人の者ども……(終りまで)

復讐の念はますます炎えて、かりそめの遊びにも兄弟互に弓矢の道に心を勵まし合ふ。

解 釋

【人皇】 ニンノウ。ニンワウの連聲。神代と區別して、神武天皇以來の天皇を稱し奉る語。

【天國】

【あらたまの】 荒玉之。(枕)年につづく詞。

あらたまの年とつづく義に數説あり。明玉の貴しといふ義にて、たかしの約としなれば年につづく。(冠辭考)荒玉は砥にかけて磨くの義。(富士谷成章)新新聞の移り行く義。(本居宣長)又、年より轉じて、月・日・來經・春といふ語につづく。【天國】

【一萬】 イチマン。曾我祐成の字。伊東祐親の孫なり。父河津祐泰、祖父工藤祐經の爲に殺さる、時に一萬五歳、弟宮王(時致)三歳。その母屍を抱きて哀哭し兩孤を撫して曰く、「汝等成長せば能く父の讐を復するか。」一萬泣きて曰く、「兒等成長せば必ず讐の頭を斬らん。」と、母再び曾我祐信に嫁するに及びて、兄弟遂に祐信の爲に鞠はる。年稍、長じて思を焦し心を勞し、復讐の念未だ嘗て一日も懈らず。會、源賴朝平氏を滅し、天下の兵馬を

管轄す。祐經之に事へて親信せらる。賴朝嘗て祐親を怨むを以て間に乘じて祐泰の遺孤を殺さんことを勸む。賴朝即ち梶原景季をして曾我に往き祐信に諭して二兒を幕府に致さしむ。母子泣きて別る。景季心に之を憐み還りてその狀を白し、之を宥さんと請ふ、聽かず。和田・畠山等營救甚だ至る。二兒因りて放歸せらるゝことを得。母その死を免さるゝを喜びて切に之を戒め深く自ら晦匿せしむ。一萬年十三、名を祐成と更め、繼父の氏を冒して曾我十郎と稱し、乃ち宮王を遣して箱根山の僧、行實の弟子となす。宮王その僧とせんことを憂ひて竊かに曾我に還る。これより兄弟大磯・黄瀬川・三浦に歴遊して屢、祐經

を覘ふ。祐經出づる毎に卒を從へ自ら衛る。兄弟時に或は望見するも手を下すこと能はず。建久四年賴朝富士野に獵す。祐經從ふ。祐成・時致喜びて曰く、「天なり。」と。因りて計を定め富士野に往く。百方祐經を狙ふ、間を得ず。既にして賴朝府に還る日ありと聞き、兄弟之を憂ひて曰く、「再び得難し機失す可らず今夜急に神野の營に入り以て祐經を殺さん。」と。即ち陽りて夜を警する者となり、列營の前を過ぎて祐經の臥所に入る。祐經既に別室に移る。兄弟彷徨爲す所を知らず。會、畠山重忠の家士本多親經至る。素より兄弟のその志を遂ぐるを欲す。因りて祐經の所在を指畫して去る。この夜祐經娼妓を召して吉備

嗣官王藤内と宴飲し、大いに酔うて酣寝す。兄弟炬を擧げて相視て曰く、「酔臥の人を殺すは猶死人を斬るが如し。」と。因りて席を踏み大いに呼びて曰く、祐成・時致父の爲に讐を報ずと、祐經驚き覺め將に刀を執りて起たんとす。兄弟刀を揮ひて交下し、遂に之を寸斬し、並せて王藤内を殺す。娼妓驚き呼びて曰く、「曾我兄弟父の讐を殺す。」と、時に五月二十八日雷雨闇黒中騷擾す。平子野右馬允・愛甲三郎等倉皇出で鬪ふ。兄弟十許人を殺傷し、力極まりて疲る。祐成、仁田忠常と鋒を接し、遂にその殺す所となる。時に年二十二。

(大日本史)

【箱王】 ハコワウ。曾我時致の小字、十郎の

弟。……年稍長ずるに及んで嬉戯するに常に擊刺を以て事とす。兄一萬弓を挽き屏障を射る。宮王曰く、「父の讐を復するに何ぞ弓を用ひん。」と。自ら木刀を執りて之を斫る。一萬管て蜚雁を仰ぎ見て獻款して曰く、「禽獸すら猶父母あり、我をして孤ならしむるは何ぞ。」宮王曰く、「讐の首豈に鐵石より堅からんや。」と。一萬速にその口を掩ひて曰く、「妄りに言ふ勿れ。」と。因りて相對して號泣す。焦思勞心、復讐の念未だ嘗て一日だも懈らず。會、祐經、祐親の故を以て頼朝に勸めて時致兄弟を殺さしむ。畠山重忠之を營救す。因りて免るゝことを得たり。母その死を免るゝを喜び、乃ち宮王を遣して箱根の僧、行實の弟子

と爲す。宮王復讐の志日に切なり。適、祐經、頼朝に従ひて箱根に詣る。宮王その面を識らんと欲し山僧に従ひて將士の姓名を歴問し、祐經に及びて覺えずして色動く。乃ち小刀を袖にし密に之を刺さんと圖る。祐經その手を執りて曰く、「子は宮王に非ざるか、容貌乃父に肖たり、我子と至親、今日相遇ふ、且つ喜び且つ悲しむ。宜しく速かに祝髮して専ら佛乘に歸すべし。」と。因りて一裝刀を出して之を授けて曰く、「一時相見るの情を表するのみ。」と。宮王間を得て之を刺さんと欲す。而れども衆人環坐し、又、力の敵せざるを恐れて終に果さず。宮王年十七、行實戒を受けんことを命ず。宮王之を憂ひ竊かに曾我に還

り、兄祐成に謂ひて曰く、「弟、今日僧と爲らば仇讐を如何せん。」と。祐成之を然りとし、相與に北條時政に造りて衷情を訴ふ。時政その志を壯なりとし、即ち爲に禮を備へて冠を加へ名を時致と命じ、曾我五郎と稱す。是より屢、祐經を覘ふ。……祐成遂に仁田忠常の爲に殺さる。時致、祐成の死するを見て徑ちに進みて將軍の營に突入す。小舎人五郎丸婦人の服を被り、時致の過ぐるを俟ちて後より抱持す。衆共に之を擒にす。翌日頼朝幕中に坐し、狩野宗茂・新開實光をして祐經を殺す所以を詰問せしむ。時致目を瞋らして二人を叱して曰く、「祖父入道歿するの後、子孫沈淪して親近を得ずと雖も何ぞ汝が輩に就て狀を

對へん。願くは面たり一言して死せん。」と。
 頼朝その言を壯として親ら之を問ふ。時致曰く、「祐成・時致髣髴より今に至るまで復讐の念須臾も忘るゝことなし。今日にして志願畢れり。幕府を犯すは一たび謁を賜りて自殺せんと欲するなり。夫れ祐經は我の讐にして君の寵臣なり。寂心入道は君の讐にして我の祖父なり。君は吾が仇を寵して、吾が祖を讐とす。能く憾みなからんや。」と。意氣益々猛勵聽く者悚動す。その膽氣を愛して死を宥めんと欲す。祐經の子犬房丸哀訴して殺さんことを請ふ、乃ち之を斬る。時に年二十。頼朝祐成・時致のその母に遺せる書を得て涙を垂れて之を讀み、命じて之を書庫に藏めしむ。

時に祐信獵場に在り、頼朝召して慰諭し郷に還りて二子の冥福を修めしめ、曾我莊の租を除く。後人爲に祠を富士野に建つ。(大日本史)

【いかに】 (一)なにと。どう。どのやうに。
 (疑ひ、又疑ひて問ふときにいふ語) (二)さぞかし。どのやうにか。どんなにか。(推量していふ語) (三)なぜに。なにゆゑ。(疑ひとめていふ語) (四)どうぢや。なんと。(呼びかけていふ語) (五)どのやうに。どれほど。なんぼ。(下に必ず反語の意あり) (天國こゝは(四))

【母御前】 ハハゴゼ。母上。「御前」(一)こぜん(御前)に同じ(二)三味線を弾き、歌など諷

ひて、物を乞ふ盲目の女。古くは鼓をも打ちたりと。(天國こゝは(一)目上の人を呼ぶ時に添へていふ尊稱。父御前・兄御前・尼御前・姫御前。)

【その佛はいづくに云々】 佛になられた父上はどこに居られるのか。實父の死は以前から知つてゐての間と見るべきである。手きびしい、時致らしい問である。ある註解に、「問の前言に對して、母が、『父上は佛になられた』とでも答へたとして、『その佛は……』と語をついだのである。」とあるが、それでは次の「あの曾我殿こそおのれらが父にてあれ。」といふ母の詞が納らないやうに思ふ。原文、「いづくに」を「何國に」としてある。

【さああせ給へ】 (一)いざたまへに同じ。さあ共に行き給へ。さあ來給へ。(二)さあ爲給へ。(天國こゝは(一))

【遙かに忘れたる方も】 永らく忘れてゐた過去のこと。即ちこゝは父の横死當時をさす。

【消入る】 キエイる。(一)深く感じて、殆ど氣を失ふ。人心ちなくなる。喪神す。(二)息絶ゆ。死す。(天國こゝは(一))

【曾我殿】 曾我太郎祐信。相模國中郡酒匂の北なる曾我の地に住んだので氏とした。異本曾我物語卷二に、伊東入道祐親が、嫁女河津祐泰の寡婦に向つて、再嫁を勧める語に、「……相模國の住人曾我太郎祐信と申すは入

道が爲にも姉の子なれば甥なり。狩野前大介殿の御孫なれば、御身の爲にまた従弟なり。折節女房に後れ候へば、この宿所に入れまゐらせんと存するなり。御嘆きをも慰め、幼きものどもそだて給へ。かの祐信は御身にも一家といひ、よもや幼きものどもに疎略は候まじ。……」と云つたが、女房は自害しようとしたのを、人々にとどめられて、餘儀なく會我へ送られ、その後子供も多く出來た。

【己】 オノレ。(一)われ。おれ。余。予。(二)下輩に對し、又は人を罵る時の對稱代名詞。汝。その方。うぬ。(天國)こゝは(二)【陳じやる方ぞなかりける】 説き述べやうも無かつた。

所の一蕩を経て、工藤一蕩とぞ召されける。」とある。

【とやらん】 「とやあらん」の略。とかいふの意。

【鎌倉殿】 源頼朝。鎌倉第一代將軍。義朝の第三子。平治の亂に捕へられて伊豆に流された。治承四年以仁王の令旨を奉じて兵を擧げ、二弟を遣はして平氏を亡し、陸奥を平げ、終に右近衛大將征夷大將軍となつた。猜忌心深く、多く骨肉功臣を殺して自ら源氏の滅亡を早めた。正治元年歿。(一八〇七—一八五九)

【きりもの】 「きりびと」に同じ。切人。君寵ありて權威強く、事をきりまはす人。きれも

【狩場より歸り給ふ道】 赤澤山の狩獵を終つて家に引取らうとする道のことである。

【工藤一蕩】 クドウイチラフ。祐經のこと。「一蕩」年功を積みて長たる者の稱。(天國)會我物語卷第一の四、同じく伊東が死する事の條に「されども祐經は、誰教ふるとはなきに、公文所を離れず、奉行所におきて身をうたせ、沙汰になれける程に、善惡を不審し、分別して理非を迷はず、諸事に心をわたし、手跡普通に優れ、和歌の道を心につけ、かんでうの筈に推參してその衆に列りしかば、工藤の優男とぞ召されける。十五歳より武者所に侍ひて禮儀正しくて、男柄尋常なりければ、田舎侍ともなく心にくしとて、二十一歳にして武者

の。(天國)

【この里】 相模國足柄郡會我中村、原・岸・谷津・別所の四區に別れてゐる。新篇風土記に、「會我越前寺は谷津村に在り。客殿に會我兄弟及び遊女虎の木像を安置す。會我祐信屋敷跡は越前寺の後にて、方二三町、今は陸田を開き民家あり。」序に「虎が雨」「虎が涙雨」に就いて云へば、陰曆五月二十八日の雨のことで、この日大磯の虎が會我の祐成に別かれて、その涙が雨となりしとの傳説よりいふ。會我の雨。(天國)

【知らでや過ぐらん】 反語。知らないで過ぎることがあらうか、よもやあるまい。

【大人しく】 オトナしく。(一)おとならし

く。おとなびて。(二)宿老らしく。頭だちて。
(三)おちつきで穩かに。老成して。(天國こゝ
は(一)、おとなしくおちついた態度で語つた
さまをいふ。

【女房】 ニヨウバウ。(一)禁中・院中等に
て、一房を賜りて住む官女の稱。(二)貴人の
家に仕ふる女の稱。(三)つま。妻。(四)轉じ
て、婦人の稱。(五)禁中また攝政・關白の家
の歌合に、天皇又は攝關の歌の作者名に代へ
てしるす語。(天國こゝは(二)

【関く】 タク。長。(一)十分になる。盛りに
なる。(二)さかり過ぐ。たけなはになる。末
になる。(天國こゝは(二)、秋の終りになつた
のをいふ。

【和殿】 ワドノ。吾殿。對等の身分の者に用
ふる對稱の代名詞。(天國

【河津殿】 カハヅドノ。三郎祐泰のこと。伊
東祐親の子、曾我兄弟の實父。河津庄にゐた
ので遂にその氏とした。蓋し河津庄は伊豆國
賀茂郡の東偏にあつた。祐泰勇力あり、伊豆
相模の間で常に遊獵をなし、土地の豪力者と
相撲を爲すに及ぶ者なく、當時大力の聞えあ
る俣野五郎景久と相撲をして遂に勝を得た程
であつた。後、父のことから父の従兄工藤祐
經に殺された。

【世におはしまさば】 せめて父さへ居られ
たなら。

【射ありきなん】 射あるいてゐるだらう。

【九月十三夜】 後の月といつて、八月十五
夜の仲秋の月と同じく明月として賞する。

【隈もなし】 クマもなし。(一)かくるゝ處な
し。蔭なし。曇りなし。(二)心暗き處なし。
心の隔てなし。(三)行き届かぬ處なし。すみ
ずみまで行きわたる。ぬかりなし。(天國こゝ
は(一)

【雁がね】 (一)雁が音、即ち雁の聲。(二)轉
じて雁、がん。(天國

【翼】 ツバサ。こゝは轉じて鳥の意。一部分
を以て全部を名づける一斑法である。

【別の翼】 親子兄弟以外の鳥を指していふ。

【人倫】 (一)人類。(二)人の履行すべき道
義。(天國こゝは(一)

「ありく」は「あるく」の古語。(天國

【さめざめ】 涙をこぼして泣く貌。潸然。
(天國

【小賢しく】 コザかしく。利口ぶつて。かし
こげに。(天國

【顔をあはせて】 顔をつきあはせて。むか
ひあつて。

【乳母】 メノト。母に代りて、小兒に乳を飲
ませ、かしづき育つる女。ちおも。おも、ち
のひと。うば。にゆうば。(天國

【あなあさまし】 あゝ滅相なといふ程の意。
うつかり復讐の事など言ひ出して、祐經の
耳に入つたら、禍が忽ち兄弟の身に及ぶのを
恐れたのである。「あさまし」(一)淺はかな

り。思慮深からず。(二)意外の事にて驚く。肝つぶる。(三)興さむ。呆れかへる。けしからぬ。(四)いやし。きたなし。さもし。卑劣なり。天國

【和上藁】 ワジヤウラフ。あなた。「和」は和殿の和と同じく吾の義。「上藁」は藁を積んだ階級の上の人。「藁」は臘とも書き僧侶の修行を積んだ年月を數へる語、轉じて一般に年功を積むこと。

【さやうにおはするぞ】 この上に「いかで」と補つて解するがよい。こゝは上に「いかに和上藁たち」としたので調子が重なるため略したのであらう。

【恐しげに】 おびえたやうに。恐怖の態度

隔てるもので「子」は名詞に添へて用ひる扇子・金子・鑑子・杓子・格子・椅子などの子に同じ。

【差合ひて】 サシアひて。こゝは出會つての意。源氏物語東屋の卷に、「御車なども例ならでおはしますに、さしあひておしとどめたれば。」曾我物語一本には、「いつかわれ等十五十三となり、父の敵にゆき逢ひ、かやうに心の

鑑賞

九月十三日、隈もなき月の夜を飛び行く雁がねを見て、亡き父を慕ふ兄弟の心や、二人の子を口説きたてて誠める母の心を思ふ時、何人か涙なくしてこれを讀むことが出来ようぞ。この課は全體が一篇の哀詩であつて、巧みに會話を挿んで讀者の同情をひくやうに出来てゐる。特に、「我等をも殺さんと思ふらん。我等がこの里にあるを知らずや過ぐらん」(九七頁一〇行目)は、率直ながらまことにゆゆしい言葉である。又、「ただ目ばかりを見合はせて、互に袖をぞぬらしける。未だ十歳にも満たざる

で。

【あはれ】 感動詞を名詞に用ひたのである。憐むべきこと。いたはしきこと。ふびん。天國こゝは悲しさ位の意。

【竹の小弓】 竹または篠を曲げて作つた小弓、子供の遊戯の具。

【薄矧の小矢】 ススキハギのコヤ。薄で作つた小さな矢。

【遠侍】 トホザムラヒ。トホサブラヒ。古昔、武家にて、主殿より遠くはなれ、中門の際などに設けたる番所。當番の侍の詰め居る所。天國

【明障子】 アカリシヤウジ。障子に同じ。あかりさうじ。天國障子はもと部屋部屋を障へ

まゝに射通さん。」とある。

【ともかくもなりなん】 どうともならう、即ち「さてその上は兄弟の身は如何様になるとも、ただなるに任せよう。」の意。

【一の能】 イチのノウ。第一とすべきわざ。唯一緊要な藝能。

【年ばへ】 年の程。としごろ。「年ばへには」は、年の割には、年齢に比してはの意。

に、あはれは深く思ひ知りけり。(一〇〇頁の三行目)などは、何といふいぢらしさであらう。

尙修辭及び文法上から考へて見ると、母より始めて女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。(九七頁の終りの行)

空に飛ぶ翼も別の翼ぞ交へざりける。(九八頁の四行目)

ただ目ばかり見合せて、互に袖をぞぬらしける。(一〇〇の三行目)

これ等は和文の特徴である。あからさまにいはないで、その間に一種の想像とやはらかみとを含め、妙趣を添へて居る。「泣く」と露骨に云はないで、「袖を絞る」「袖をぬらす」といひ、「鳥」といはないで、「翼」といふところに、悠々迫らぬ妙趣とやはらかみとがある。かゝる修辭は、他のものと言ひかへるところから、換義又は換喩ともいふのである。

箱王は七つにぞなりにける。(初から二行目)

曾我殿こそ己等が父にてあれ。(九七頁の初の行)

陳じやる方ぞなかりける。(九七頁の三行目)

皆袖をぞ絞りける。(九七頁の終りの行)

三つは子どもにぞあるらん。(九八頁の二行目)

父にてましまさぬこそ悲しけれ。(九八頁の終りの行)

人もこそ聞け。(九九頁の二〇行目)

袖をぞぬらしける。(一〇〇の四行目)

係りに「ぞ」「こそ」のつくとき、結びが如何になるかを以上の例で知らせたい。

父はいづくにおはしますぞや。(初から三行目)

その佛はいづくにましますぞや。(初から四行目)

兄御前は語らせたまふぞや。(九七頁の六行目)

弓矢は男の一の能にてあるなるぞ。(一〇〇の終から二行目)

これ等の類似の語につき、「ぞや」「ぞ」の文法上にも注意したいと思ふ。

挿繪解説

【曾我兄弟の墓】 神奈川縣箱根の山中にある。左側の小石は虎御前の墓である。

一九 曾我兄弟

作 者

【森鷗外】 名は林太郎、諱は高湛^{タカシズ}、源姓、鷗外漁史はその號、別に觀潮樓主人、千朶山房主人、歸休庵と號す。石見國津和野藩主龜井家の臣で、家代々醫を業とし、祖父の頃まで多く藩の典醫に任ぜられた。林太郎は文久二年正月十九日生れ、幼時は國で漢學と蘭學とを受け、明治五年十一歳の時上京して獨逸語を修め、六年東京醫學校に入り、十四年卒業して醫學士となり、その冬陸軍に出仕し、十七年衛生學研究のため獨逸國留學を命ぜられ、ライプチヒ、ミュンヘン、伯林の大學に學び、二十一年九月歸朝した。その間専門醫學の外に、文學・哲學・美術・戯曲等に就ても深い研究を積み、歸朝後は軍醫學校及び陸軍大學校の教官として衛生學を講じ、兵士の食物と日本の家屋に關する實驗に従ひ、傍ら東京美術學校・慶應義塾に於て美術解剖學・審美學を講じ、又小説「舞姫」「うたかたの記」「文づかひ」等を發表し、或は「衛生新誌」「醫事新論」等を創刊しては醫學上の意見を吐露し、「し

がらみ草紙」を發刊しては文學評論及び歐洲文藝の翻譯紹介に力めた。二十四年醫學博士となり、日清戰役より臺灣の征討に従ひ、軍醫學校長、近衛師團軍醫部長を経て、豊前國小倉の第十二師團軍醫部長に轉じ、居ること四年第一師團軍醫部長に轉じて東京に歸つた。

日露戰役には第二軍軍醫部長として出征し、金州から奉天まで大小の戰闘に参加し、凱旋後、軍醫學校長事務取扱から、四十年遂に陸軍々醫總盟に進み、醫務局長に補せられた。小倉赴任以來久しく文壇を遠ざかつたが、これより以後創作に、翻譯に、評論に捲土重來の勢を以て活躍を開始し、次で文學博士の學位を受け、文藝委員會審査委員となり、又毎年、文部省美術展覽會審査員を囑託せられ、大正三年以後は専ら歴史傳記の方面に筆を執り、無聞の人物を闡明するに努めた。五年醫務局長を辭して豫備に入り、翌年帝室博物館總長兼圖書頭に任ぜられ、帝國美術院長、臨時國語調査會長等を兼ね、十一年七月九日六十一歳で薨去するまで、我が邦文化のため努力した。(森潤三郎)

年 譜

明治七年(十三歳)東京醫學校豫科に入学。十年(十六歳)東京大學醫學部と改稱せらるゝと共に本科生となる。十四年(二十歳)七月四日卒業。九月十七日「讀賣新聞」に「河津金泉君に質す」を出す。知友の談によれば、新聞に初出の文なりといふ。十二月十六日任陸軍軍醫副、東京陸軍病院課僚被仰

付、十七年（二十三歳）三月プラーゲルの「陸軍衛生制度を基礎として」醫政全書稿本」十二巻を編し、この日之を官に納む。六月七日獨逸國留學被仰付。八月二十三日出發。十月十二日伯林着、ライプチヒ大學に入る。……二十年（二十七歳）九月八日東京に着す。二十二年（二十八歳）八月「國友の友」に「於母影」を發表す。十月二十五日、雜誌「しがらみ草紙」を創刊す。この年獨逸文學雜誌「東漸」に「決闘論」を掲ぐ。二十三年（二十九歳）一月「國民の友」に創作「舞姫」を出す、伯林を説話の地とす、後の「うたかたの記」、「文つかひ」と共に留學中の記念なり。八月「柵草紙」に「うたかたの記」を出す。ミュンヘンを話説の地とす。この年「ふた夜」、「悪因縁」、「うきよの波」、「埋木」等を譯出す。二十四年（三十歳）一月「新著百種」に「文つかひ」を出す。ドレスデンを話説の地とす。八月二十四日醫學博士を授けらる。二十五年（三十一歳）七月「水沫集」を春陽堂より出版。十一月「柵草紙」に「即興詩人」を譯載す。三十四年二月、九星霜を以て完結す。二十九年（三十五歳）一月雜誌「めざまし草」を創刊す。十二月論文及び雜錄に三木竹二の劇評を附したる「月草」を春陽堂より出版す。三十年（三十六歳）五月翻譯及び隨筆に小金井喜美子の作品を添へて「かげぐさ」と題し春陽堂より出版。三十五年（四十一歳）六月二十五日上田敏博士の「藝苑」と合同して雜誌「藝文」を創刊す。八月第二號刊行後出版書肆と衝突し、十月同人資を捐て、「萬年草」を創

刊す。九月「即興詩人」を春陽堂より出版す。三十七年（四十三歳）二月「萬年草」廢刊す。三月「歌舞伎」臨時號に脚本「日蓮上人辻説法」を發表す。（後「我一幕物」に收む）四十年（四十六歳）九月春陽堂より「歌日記」を出版す。四十一年（四十七歳）六月二十六日文部大臣の官邸に開會の臨時假名遣調査委員會に於て、陸軍を代表して現在の假名遣に對する意見を述べ。二十九日黨陰會の名を以て編纂したる「能久親王事蹟」を春陽堂より出版す。九月二十六日教科用圖書調査委員會々員被仰付。四十二年（四十八歳）一月春陽堂より「阿育王事蹟」を出版す。六月翻譯脚本集「一幕物」を易風社より出版す。七月二十四日文學博士の學位を受く。四十三年（四十九歳）一月易風社より「續一幕物」を、春陽堂より翻譯集「黄金杯」を出版す。四月一日「中央公論」に脚本「生田川」を載す。（後に「我一幕物」に收む）七月新潮社より創作集「涓滴」を出版す。八月一日「三田文學」に「あそび」を掲ぐ。十月大倉書店より翻譯集「現代小品」を出版す。四十四年（五十歳）一月一日「中央公論」に「蛇」を掲ぐ。この月春陽堂より翻譯劇集「人の一生」、「飛行機」を、二月創作集「烟塵」を出版す。三月「三田文學」に「妄想」を掲ぐ。七月金尾文淵堂よりハウプトマンの戯曲を譯せし「寂しき人々」を出版す。八月「中央公論」に「心中」を掲ぐ。九月一日「スバル」に「雁」を「掲げ始め、斷續して大正二年に至る。この月春陽堂より「かげぐさ」改訂版を出版す。十月「中央公論」に

「百物語」を後に創刊集「走馬燈」に收む。十二月金華堂よりイブセンの戯曲を譯せし「幽霊」を出版す。四十五年（大正元年）（五十一歳）四月春陽堂より大村西崖と共著「希臘羅馬諸神傳」を出版す。七月靱山書店よりシュニッツレルの翻譯「みれん」を出版す。八月靱山書店より創作集「我一幕物」を、九月「一幕物」正續篇を合冊して出版す。大正二年（五十二歳）文藝委員會委員として譯せし「ファウスト」第一部を富山房より出版す。二月現代社「近代脚本叢書第一編」として、シュニッツレルの戯曲「戀愛三昧」を、靱山書店より創作「青年」を出版す。三月二十二日富山房より「ファウスト」第二部を、同月靱山書店より翻譯戯曲集「新一幕物」を出版す。五月實業之日本社より翻譯集「十人十話」を、六月靱山書店より創作史實小説集「意地」を、七月創作集「走馬燈」及び「分身」を、警醒社よりシエクスピアの「マクベス」を、十一月イブセンの戯曲「ノラ」を、富山房より「ファウスト」の別冊として「ファウスト考」と「ギョオテ傳」とを陸續出版す。大正三年（五十三歳）一月「中央公論」に「大鹽平八郎」を出す。元年十月の同誌に「興津彌五左衛門の遺書」を出せしより、二年一月の「阿部一族」四月の「佐橋甚五郎」等、徳川時代の史實に立脚せる小説を書き始めつ。四月靱山書店より創作集「かのやうに」を、五月鳳鳴社より創作「天保物語」を、現代社よりホフマンスタールの戯曲「謎」を、九月春陽堂より縮刷「即興詩人」を、十月鈴木三重吉「現代名作集」第二編とし

て創作「堺事件」を出版す。四年（五十四歳）一月雜誌「心の花」に「歴史其儘と歴史離れ」を出し、前年來の執筆の傾向に就て記す所あり。「中央公論」に「山椒太夫」を出す。同月國民文庫刊行會「泰西名著文庫」の一として翻譯集「諸國物語」を、二月至誠堂より「大正名著文庫」第十四編として評論及び隨筆集「妄人妄語」を出版す。五月、陛下より詩作を徵され、五言律を謹書して献上す。同月靱山書店より創作「雁」を、九月詩歌集「沙羅の木」を、十月通一舎より「千朶山房叢書」として、翻譯戯曲「稻妻」を出版す。十二月千章館より創作集「塵泥」を出版す。五年（五十五歳）一月一日より八日まで「東京日日」「大阪毎日」に「楢原品」^{スギハラシナ}を十三日より五月十七日まで「澁江抽齋」を掲ぐ。四月十二日豫備被仰付。五月十八日より六月二十四日まで前記兩新聞に「壽阿彌の手紙」、六月二十五日より「伊澤蘭軒」を續出す。八月十三日「水沫集」縮刷本を出す。六年（五十六歳）一月一日より七日まで「東京日日」「大阪毎日」に「都甲太兵衛」^{トウカウハヒ}を掲ぐ。七月春陽堂より「涓滴」を「還魂錄」と改題し、「名家傑作集」第十二編として出版す。九月五日「伊澤蘭軒」完結し、六日より十八日まで「鈴木藤吉郎」を、十九日より十月十三日まで「細木香以」^{コイキカウイ}を、十月十四日より二十八日まで「小島實素」を、三十日より「北條霞亭」を掲げ、十二月二十六日に至りて新聞と關係を絶つ、こはその前日二十五日任帝室博物館總長兼圖書頭の辭令を受けたるを以てなり。十一月富山房より「ファ

ウスト」の縮刷本を出版す。十年（五十七歳）二月帝國文學に「北條霞亭」の續稿を載す。春陽堂より創作集「高瀬舟」を出版す。九月堀越秀像銘を作る。八年（五十八歳）五月寶文社「三田文選」の別冊として翻譯集「蛙」を出版す。十二月春陽堂より新聞所載創作集「山房札記」を出版す。九年（五十九歳）一月「帝國文學」廢刊し、「北條霞亭」再び中絶す。十月雜誌「アララギ」に續稿「霞亭生涯の末一年」を載せ、十年十一月を以て完結す。金鈴社より「天保物語」を出版す。十年（六十歳）一月雜誌「明星」創刊され、「古い手帳より」を掲げ始む。三月圖書寮に於て撰述せし「帝盜考」成り、百部を印刷配布す。次で「元號考」の著述に従ひしも完成に至らざりき。六月二十五日臨時國語調査會會長被仰付。七月善文社「脚本名著選集」第一編として、ストリンドベルヒの戯曲「ベリカン」を出版す。十月春陽堂より「森林太郎譯文集」卷一として「獨逸新戯曲篇」を出版す。十一月一日「霞亭生涯の末一年」完結す。この頃より時々下肢に浮腫あり、營養も幾分衰へ、腎臓病の徴を現はす。十年（六十一歳）六月に至り病大に進み、二十日臥床、二十八日額田醫學博士の診察によりて萎縮腎と確定、七月七日、兩陛下より葡萄酒下賜、八日攝政宮殿下より御見舞品下賜、この日特旨を以て位一級被進叙從二位。九日午前七日薨去。（現代日本文學全集、森鷗外集——森潤三郎）

永井荷風氏曰く、

千朶山房晩年の諸作を總稱して歴史小説或は歴史物となすは固より可なるべし。然れども從來世人の稗史小説と稱し來れるものとは全くその選を異にす。先生の所謂歴史物は實に先生獨創の文學にして、我が文學史上曾てその類例を見ざるものなり。……山房の小説體史傳は、正史の威嚴と、隨筆の興趣と、稗史講談の妙味とを併せ有して、その間更にまた著者平生の卓見高潔を窺ひ知らしむ。修史を尙ぶものは、山房文學の考證該博精緻なるを見て、自ら敬意を表すべく、野乘の興を娛しまんとするものは、記事の絶妙なるを見て讚賞の辭を求むるに苦しむべし。……往年著者が毎夕寄席に赴きて聽きたりし講談と、攻學の餘暇愛讀したりし古老の隨筆とは偶然著者が晩年に至つて自家獨得の新文學を大成せしむる遠因となりしなり。藝術製作の興會は凡て偶然に發するものなり。偶然に發したる興會を捉へて散逸せしめず、能く製作の功を收めしむるものは、蓋しその人平生の蘊蓄と製作に對する熱誠との二者に他ならず。……わが近時の文壇、西歐十九世紀末の文學を仰いで宗となし、より、許すに名篇佳什を以てするもの、戀愛を説くにあらざれば憂傷病衰の狀を描くに止り、悽愴源烈の氣概を寫すもの全くその跡を斷つに至れり。先生晩年の歴史小説には、正に群芳妍を競ふの間孤松の亭亭たるを仰ぐ思あるものあり。（麻布襟記）

出 所

「鷗外全集」全十八冊。大正十二年一月三十日、鷗外全集刊行會發行。非賣品。

本課は第四卷にあるが、原脚本の第一・第二・第三幕を省いて最後の第四幕のみを採録した。

出演「曾我兄弟」の脚本は、大正三年「新小説」誌上に公にせられ、大正七年二月「高瀬舟」の中に收められて刊行された。しかし帝國劇場に於て上演されたのは、脚本の發表と殆ど同時で、即ち大正三年二月二十六日からであつた。十郎と頼朝とを今は故人になつた尾上榮三郎、五郎を尾上菊五郎が演じたのである。

要 旨

最も近代的な進んだ形式の脚本の一體を知らしめ、それを熟讀玩味して、その作中の人物の性格、場面の情趣等を十分に理解する力を養はせたい。

梗 概

第一幕 工藤の假屋

時代は建久四年五月二十八日・二十九日、場所は富士山西麓伊出の狩場に於ける工藤祐經の假屋である。工藤が吉備津宮宮司大藤内成景と酒宴をしてゐると、曾我十郎が様子を見に来る。工藤は十郎の姿を見とがめて、強ひて呼び入らせ、酒など飲せて、隔意のないやうに扱ふ。大藤内が十郎の面貌の

非凡なのを見て、工藤に警戒せよといふ。そこで工藤は臥戸をかへることにする。

第二幕 伊出の農家

こゝは十郎、五郎が卷狩の追子として來て逗留して居る農家である。二人はいよ／＼今夜晝間見とどけておいた工藤の假屋へ斬入る覺悟で、農家の主人に禮金を支拂ひ、それから仇討のお伴をさせてくれと懇願する従僕の鬼王・丹三郎の二人の志を感じながらも、これに託して、遺書と形見の品とを曾我の母君のもとに歸り届けさせる、いはゆる形見送りの場面である。

第三幕 幕の外、板戸をさしたる假屋の縁の前

曾我兄弟は、かねて狙つてゐた父祐泰の仇工藤祐經の假屋に忍び入り、首尾よく復讐を遂げる。そして堂々と名乗りをあげて再び將軍家の武士と激しく渡り合つた後、遂に十郎は仁田四郎に討れた、五郎は五郎丸に捕へられる。

第四幕 將軍家の屋形

それから五郎が頼朝の前に引出されて、訊問を受ける場面となる。

解 釋

【將軍家のやかた】こゝは富士の裾野に於ける頼朝の屋形をいふ。「やかた」屋形。(一)

かりそめに構へたる家。又、かりの宿所。かりや。かりやかた。寓居。(二)身分ある人の宿所又は邸宅の稱。みたち。との。(三)身分ある人をその居所に就きての尊稱。星形號を許されたる人。との。(四)牛車の車箱の屋根。(五)ふなやかた。(六)やかたぶね。(七)星形紋。天國こゝは(一)(二)

【垂簾】 スキレン。(一)すだれをたるゝこと。又、たれたるすだれ。すだれ。(二)皇太后又は太皇太后が、幼帝に代りて政治を聽斷すること。天國こゝは(一)

【前景】 ゼンケイ。舞臺の前面の方をいふ。

【狩野介宗茂】 カノノスケムネシゲ。伊豆の國の住人、頼朝配下の大名。新開荒二郎忠氏

と共に、曾我物語や戯曲の曾我物には、臆病で、工藤一味の好物とし出てゐる。

【新開荒二郎忠氏】 シンカイノアラジラウタダウヂ。相模の國の住人、頼朝配下の大名。

【第一の大名】 居並ぶ大名の中の一人をさす。第一は一等の意ではない。

【辰の刻】 タツのコク。今の時間では午前八時から九時の間。

【犯人】 刑を犯した人。罪人。こゝは五郎をさす。

【大見の小平太】 五郎丸と共に五郎を搦め捕つたもの。

【どういたいたやら】 どう致したやら。

【殿原】 トノバラ。高貴の方々。又、男子の敬稱。天國

【奸盜】 原本にはガンダウと訓ませてある。わるがしこい盜賊。

【笑止】 セウシ。(一)をかしきこと。わらふべきこと。(二)かたはらいたきこと。氣の毒に思ふこと。天國こゝは(二)

【繩つき】 繩で縛られることで罪人扱にされるをいふ。

【工藤】 工藤祐經。

【申し宥める】 ゆるして責めない。寛恕。

【推參】 スキサン。(一)推して參上すること。吾れより訪問すること。(二)無禮なるふるまひ。無禮なること。天國こゝは(一)

【所詮】 ショセン。つまり。つまるところ。

【雑色】 ザフシキ。(一)雑役・驅使の事を勤むる無位の役。藏人所・院の御所等にあり。(二)驅使につかふ家僕。天國

【退場・登場】 役者が舞臺から退くこと。舞臺に出ること。

【宿意】 シユクイ。(一)年來の意見。かねての志望。宿志。(二)かねてのうらみ。年來の意趣。宿怨。天國こゝは(二)

【逐一】 チクイチ。(一)一つ／＼順を逐ひて。一つ毎に。いち／＼。(二)くはしく。詳細に。天國

【祖父】 チヂ。

【落魄】 ラクハク。「魄」は音タクなれど習慣音による。おちぶるゝこと。志を得ずして沈淪すること。零落。天國

【武智麿】 鎌足の孫、不比等の長子。藤原氏南家の祖である。武智麿の四男乙麿七代の孫爲憲が伊豆駿河の守護となつて工藤と稱へた。これから時致に至る迄の一族の略系は前課に出したり通である。

【由緒】 ユキシヨ。いはれ。來歴。傳へ／＼た事柄。家が立派な系統を持つ場合などに、

關する雜務に従事するもの。天國こゝは單に貴人に近侍して雜事を掌る者の意。

【退つて】 ノつて。

【和殿】 ワドノ。吾殿。對等の身分の者に用ふる對稱の代名詞。天國

【昨夜の雨】 曾我物語「頃しも五月二十八日の夜なりければ、闇さは闇し、降る雨は車輪の如くなり。」なほ吾妻鑑によると、この雨は同日の午前十時頃から降り出したものらしい。

【敷革】 シキガハ。こゝのは敷皮の意。毛皮の敷物、地上に敷く。昔は將軍は虎・豹、彈正官は熊皮、他は多くは鹿の皮を用ふ。これに白毛・櫛上・櫛形等の名所あり。敷革は苔

山緒ある家柄などといふ。

【じきに】 直接に

【怪しかり】 (一)怪しくあり。不思議なり。異様なり (二)一かどおもしろし。わるくはなし。天國こゝは(二)の意味から轉じて、不都合なることをいふ。

【楯衝く】 タテツク。はりあふ。抵抗す。對抗す。天國

【舍人】 トネリ。(一)昔時、天皇又は皇族などに近侍せし雜掌。臣下も賜はりたる者は之を具す。おほとねり・うどねり・ことねり等あり。(二)牛車の牛飼、馬の口取りなどの稱。(三)現時、宮内省の式部職に置く判任の名譽官 他の宮内判任官より兼任し、典式に

革に同じく別なものである。天國

【五郎感ず】 原本には「五郎感激す」とある。

そしてその次に、

此敷革を見るにつけ、

十年の昔ぞしのぼるる。

年頃六波羅に勤仕して、平相國親子の覺めでたく、名利のために訴訟を構へ、怨毒によつて殘害を行つた、小賢き敵工藤が、時勢の移り變るに乗じて、宇佐美殿によつて御目見えを賜はり、伊東の莊を拜領し、猶それにも飽き足らいで、我々兄弟を殺さうと、讒舌を揮うた爲め、

兄一萬は十二歳、

此箱王は十の時、

由比が濱邊に伴はれ、
引き据ゑられし敷革は
夢見ごちに春を待つ

苔を摧く悲涙の座。

今は首尾好く父の仇工藤を討つて怨を霽し、
此世に思ひ置くことなければ、

最期を急ぐわがために、

此一枚の敷革は、

父に見えん彼岸に

渡す弘誓の舟筏。

とある。

【意趣をも存ぜんんだ】 意趣は心に思ふこ
との意で、轉じて心に恨む意趣ある義とな
り、他を怨むことに用ひられるやうになつ

ゝ。

【狼藉】 ラツゼキ。狼の草を藉きて臥したる
跡の亂れたるさまよりいふ。(一)亂雜なるこ
と。散亂せること。(二)無法なる所行。亂
暴。不法。(天國こゝは(二))

【足のたち所も知らず】 「足のたち所」は
足を踏み立てる所の意である。一寸も踏み留
らずに直ぐ逃げ出すことをいふ。

【大藤内】 備前國吉備津神社の祠官、王藤内
とも書く。仇討の夜、工藤祐經は娼妓を召し
て、丁度客に来てゐたこの男と宴飲して、大
いに酔つて寝てゐたのである。祐經と一緒に
殺されてしまつた。

曾我物語卷八、十四「祐經が館へ行きし事」

た。幼少の時で、物の判断もつかなくつたか
ら、親の敵であるといふ遺恨を心に抱く事も
なかつたのをいふ。

【物心を辨ふ】 世の中の情態がわかる心が出
來ること。物心がつく。

【小坪】 コツボ。相模國三浦郡田越村大字小
坪。治承四年八月には和田義盛と畠山重忠と
の合戦があつたところ。

【麾下】 キカ。麾下は大將の旗で、その下に直
屬する者をいふ。ハタモト。曾我物語の十番
斬の條を見るに「兄弟二人が手にかけて、五
十餘人ぞ斬られける。手を負ふものは三百八
十餘人なり。」とある。誇張したものではあら
うが、實際相當に負傷した者はあつたらし

の條の祐經が十郎に大藤内を紹介する詞に
「あれこそ備前の國吉備津宮の大藤内とて、
さる人なるが、今年七年君の御不審蒙り所領
召されてありつるを、この三箇年祐經とりつ
ぎ申しつる間、御免を蒙り、所領に安堵して、
浦源まで上も給ひしが、祐經に名残を惜まん
とて歸り給ふ。」とある。大藤内が斬られた模
様は同書九「大藤内を討ちし事」の條に詳し

ゝ。

【廣言】 クワウゲン。憚らず口に任せて言ふ
こと。大言。放言。(天國)

【所領安堵】 領地を所有することの確證。又
それを證明する文書をいふ。安堵。アンド。
(二)塔の内に安んじ居ること。安心して住む

こと。家業に安んずること。(一)心の落ち著くこと。安心。(三)鎌倉・室町時代、土地所有を公認したる文書。父祖その他よりの譲與を公認したるものを、和與地安堵といひ、賣買にて、所有權の移動を公認したるを、沽却地安堵といふ。(天國こゝは(三))

【報謝】 報酬謝禮の意。

【せめてもの心がけ】 すべて笑止な振舞のうちにも、これ一つだけは、賞するに足る心掛。

【なか／＼】 却つて。

【不便】 フピン。(一)便なきこと。處置あしきこと。都合わるきこと。不都合。(二)轉じて、憐むべきこと。かはいさうなること。

(天國こゝは(二))

【神妙】 シンメウ・シンベウ。(一)靈妙不可思議なること。人力以上のはたらきあること。(二)けなげ。殊勝。奇特。(三)やさしきこと。おとなしきこと。すなほ。(天國こゝは(二))

【憚ある申し條云々】 失禮な言ひ方は存じませんが。

【流人となられた】 平治の亂後、源義朝は尾張で殺され、その子であつた頼朝は東國に赴かうとして、平宗清に捕へられたが池禪尼の救護によつて死を免れ、伊豆國の蛭が小島に流された。

【東道の主人】 ドウダウのシュジン。東方の

道筋の主人。主人となりて遠來の客に便を與

ふるもの。「東道の主」と同じ。左傳僖公卅年「若^レ舍^レ鄭^ヲ以爲^ニ東道^ノ主^ト、行李^之往來^ニ共^ニ之^ヲ其^ノ乏^ニ困^ニ君^亦無^レ所^レ害^ス。」註に鄭^ハ在^リ東^ニ、故^ニ言^フ東道^ノ主^トとある。(天國

伊東次郎祐親は頼朝が伊豆に謫せられた時は、子祐泰及び諸豪族と共に頼朝を迎へた。

後頼朝を憎み、石橋山に敗戦した頼朝を、親兵三百を帥ゐて追ふやうになつたのは、一に頼朝が伊東にある時、祐親の女に通じて一兒を生んだ事に原因するのである。祐親はその時罪を平氏に獲ることを恐れてその兒を殺し、併せて頼朝を害しようとした。頼朝はこれを知つて逃れ、治承中遂に擧兵したのであ

る。

【手引のもの】 ひそかに味方して、便宜を圖る人。

【二人の子供に云々】 母に知らせたならば必ず止めるではありませんかといふ可きを、裏から云つて一段と意味を強めた、餘情の深い言葉。

【仁田の四郎】 忠常。伊豆の人。頼朝に仕へて寵せられた。壽永中範頼に従つて平氏を西海に討つた。又富士の卷狩に従ひ曾我兄弟の襲撃に遇つて祐成を斬つた。建仁二年比企能員が北條氏を滅さうと企てた時、天野景遠と共にこれを誘ひ斬つた。又一幡をも襲ひ殺した。

【上手】 カミテ。見物席から向つて舞臺の右手をいふ。之に對して左手を下手といふ。

【首桶】 首級を入れる桶。軍用記に首桶のこしらへやう、高さ一尺三寸、口のひろさ八寸、わけ物にしてかぶせぶたなり。蓋の上へ書く文字は卍これなり。緒のつけやうは革にても、又帶の類を以て十文字にかくる事もあり、兩様いづれにても用ふべし。首桶の首入れやうの事、貴人の首ならばすすしに包み、桶のとちめの方に首のおもてを向くべし。保呂にて包む時は、保呂の腰の帶を切りて、兩端をたたみて、右の方を上になして包むなり。

【首級】 シュキフ。討取つた首。支那で秦の

法として、敵の首一つを斬れば爵一級を得たから、一首を一級といひ、首を首級といふ事になつた。

【懐かしや兄上】 の次に原文には、

點し列ねし松の火の

消えなば共にと思ひしに、

とある。

【不覺】 フカク。(一)物も覺えぬさまなること。精神のたしかならざること。又、人事不省に陥ること。(二)油斷して失策すること。不注意なること。そぞろに過を犯すこと。(三)卑怯なること。未練なること。【天國こゝは(一)】

【太刀風】 タチカゼ。(一)太刀を振ひて起る

風。(二)戦ひぶりの勇ましきこと。武威。

【天國こゝは(一)】

【小鬢】 コビン。鬢の端。【天國】

【薄手】 ウスデ。(一)浅き劍。あさで。輕

傷。(二)薄き器物。【天國こゝは(一)】

【小童】 コワツバ。小僧といふに同じ。少年を罵つていふ語。

【たじろく】 (一)退き避く。しりごみす。辟

易す。(二)對抗し難くあり。劣る。(三)動き傾く。傾く。【天國こゝは(一)】

【なに犬房丸が御身か】 の次に原文には、

彼も人の子、釋くて

親を討たれし悲は

いかでか我に殊ならむ。

一九 曾我兄弟

果報の繩に引かれずば、

刃を取りて立ち向ひ、

御身に討たれむ我身なり。

とある。「犬房丸」は祐親の子。後に祐時と名のつて、日向の地頭となつた。

【刑場】 原文には、キヤウチャウと訓ませてある。

【心やりに】 氣晴しに。

【關外の職】 コングワイのシヨク。又、關外の任ともいふ。將軍職のこと。「關外」(一)しきみの外。(二)都城の外。史記馮唐「關以外者、寡人制之、關以外將軍制之。」

【天國】

【行住心に任せるなら】 ギヤウヂユウココ

口にマカせるなら。思ふまゝに振舞はれるならば。自分の自由意志に任せて下さるならば。「行住」行く事と住トまる事と。

【素首】 スカウベ。素頭。頭を罵りていふ語。そくび。[大國]

【近き恵】 今赦されて奉公を仰せつかること。

【遠き恨】 ずつと以前の祐親と頼朝との不和の関係をいふ。種々の怨情の纏綿してゐること。

【兄を久しう待たせる】 冥土で待たせるといふ意。

【五郎丸】 御所五郎丸。曾我物語に「こゝに五郎丸とて、御寮の召使はるゝ童あり。もと

は京の者なりしが、叡山に住して十六の年師匠の敵を討ち、在京かなはで東國に下り、一條次郎忠頼を頼みたりしに、忠頼御敵とて討たれて後、この君(頼朝)に参りたりしが、屈竟アウツクの荒馬乗アウツクの剛の者、七十五人が力を持ちけり。」とある。五郎が、その薄衣を引被いだ姿を女と見誤つて通り過ぎようとする際に、後から抱きとめ、手捕にしたものである。

【その志は奪ふべからず】 その志をかへさすことは出来ない。論語の「三軍可レ奪レ帥矣、匹夫不可レ奪レ其志也。」の心持がある。

【不動の羂索】 フドウのケンサク。不動明王の左の手にして居るわなになつてゐる索ナ。どんな神通自在の悪魔も、どんな強いものも、

この繩には縛られるといふ。「羂」は、わな。

【難伏のそち】 ナンプクのそち。剛にして屈することを知らぬ汝。「難伏」は調伏ナンプクし難いこと。調伏とは、(一)衆生の身に意の三業を調

鑑賞

十七年の久しい間、兄弟の念頭を寸時も離れなかつた本望を遂げおぼせた時の兩人の感激はどうであつたらう。この戯曲中本課に採録した第四幕の場合は、五郎の性格が躍如として描き出されてゐて、勇士の末期の雄々しく堂々たる態度と、兄を思ひ敵の子の心を泣かすやさしい心情とに、同感の涙禁じ難いものがある。又、頼朝の風采も鮮かに出てゐて、如何にも群雄を駕御した威あり情ある英雄の人柄が流石に偲ばれるのである。

この作が公表された時に、舊劇の愛好者からは、刈込み過ぎた、肉も衣裳もない骨ばかりの脚本だと評されたが、義太夫や歌舞伎劇の所謂曾我物に馴れた目で見ればさう思はれる程に、全く無駄の無い、理路整然たる近代劇の様式を取つた脚本である。併し熟讀玩味して居るうちに、緊縮された臺詞の中から、自ら餘韻が清く澄んで響いて來て、高潔な暗示的な印象を與へられ、作中の人物の性格が

和して諸の悪行を制伏すること。(二)天台

宗、眞言宗などにて、神佛に祈りて怨敵魔障などを降伏すること。[佛障]

はつきりと浮んで来て、終に藝術的感激に打たれるやうな作である。
作者は詩材を自由に生かして使ふ人である。

森鷗外は零碎な時間を活用して、讀書し著述した人である。即興詩人の序にも次のやうに記してある。

此の譯は明治二十五年九月十日稿を起し、三十四年一月十五日完成す。殆ど九星霜を経たり。然れども軍職の身に在るを以て、稿を屬するは大抵夜間若しくは大祭日、日曜日にして家に在り客に接せざる際に於てす。……世或は予其の職を囑しくして縦に述作に耽ると謂ふ。寃も亦甚だしきかな。

をり／＼に遊ぶいとまのある人のいとまなしとて文よまぬかな (宣長)

二〇 兒獅子

原作者

【オリソン・スエット・マーデン】 現代米國の思想家。浮田和民氏本書の序に曰く、

第十九世紀の後半期に於て英國人スマイルスの著者が天下の青年に裨益したことは非常なものであつた。當時に於て彼の所謂「自助論」は實に新時代の青年が要求する最善の福音であつた。之を一讀すれば、頑夫も廉に、懦夫も志を立て、自助の精神を奮ひ起さぬ者はなかつた。然るに今や時勢は長足の進歩と、多大の變化をなしたので流石の「自助論」も前日の如き感化を與へることが出来なくなつた。そこで第二十世紀の今日は同じ自助論でもスマイルス以上現代の氣運に接觸したものを要求するに至つた。而して吾人はこの變形せるスマイルス氏を米國のオリソン・スエット・マルデン博士に見出すことを得たのである。彼が最初の著述は最早今より約三十年前のことであつたが、一年内に十數版を重ねる程に米國の内外に歓迎せられ、爾來今に至るまで彼が續々世に出だした著書は何れも讀

者の志氣を激勵し、特に青年の好伴侶となつて居る。彼は實に現世紀のスマイルスであつて、スマイルスは前世紀のマルデンであつたといふのが適評であらう。

願ふにスマイルスの時代には世界の實業が未だ今日ほど盛大になつてゐなかつたので彼の名著も既に時勢後れの感なきを免れないが、マルデンの作は一讀してその現代的氣分が漲つてゐることが判然する。書名に於てもスマイルスは「自助論」と云ひ「品性論」と云ひ「勤儉論」と云ひ「本文論」と云ふのであるが、マルデンは「前線へ突進」と云ひ「各人は王なり」と云ひ「大願成就」と云ひ、スマイルスの格言は「天は自ら助くる者を助く」と云ひ、マルデンのは「自ら能ふと思は能ふ」と云ふの類で、後者は前者に比して新進氣鋭、自信力に一段と緊張が加はつてゐる。余は屢々マルデンの書を繙き、その文章の平易にして、言々實際を穿ち、肯綮に中り、精神爽快にして活氣縱横、眞に現代青年の經典たるに背かないと感嘆したのである。彼の書を読むものには人間一生涯、成功も失敗もその原因は一に自己に在つて外物にあるのでないといふことがわかる。萬一の僥倖、偶然の幸運を頼むやうな事は最初から失敗を誘ひつゝあるのである。固より他人の援助を請はなければならぬ、他人と協力することは尙更必要である。併しながら他人の援助援引を待みて只管それに依頼する者は既に自ら成功の順路から脱線してゐるのである。何事を爲すにも、世に立つ以上、人は最初から最後まで全

く自己に依頼しなければならぬ。自己を信じ、自己の中に無限發展の可能能力あることを疑はない者は決して失敗することはない、彼の失敗は不可能であると斷言して不可なのである。正直は最良の手段である、といふのでは足りない。人は皆王でなければならぬ。道德上各人は自己の君主であらねばならない。これがマルデンの宣傳する福音である……。

とあるので原作者の人物主張を窺ふのたよりになると思ふ。

譯者

【上谷 續】 カミヤツヅク。同志社普通學校出身。譯書にマルデン博士の三部作たる「如何にして希望を達す可きか」「如何にして一身の方向を定む可きか」「如何にして自己を大成す可きか」等がある。兵庫縣西宮市外森具寓居。

出所

「如何にして希望を達す可きか」全一冊、大正十二年三月十日實業之日本社發行。定價壹圓七拾錢。その自序に曰く、

世の中は神の攝理によりて按配せらる。人其の力を盡して、用ふるところを過らずば、乃ち天惠遍く至り、一生何の不足も無く、健全なる身體、清閑なる日月を得て、其の餘生を楽しむことを得べ

し。(ラスキン——永久の喜悅)

目次

第一章靈感。第二章希望を達する道如何。第三章喜び勇むべし笑門福來。第四章落膽は一種の病患なり其の療法如何。第五章山をも揺かす力。第六章信仰と醫藥。第七章如何にして、自己を發見すべきか。第八章幸福を招來する法如何。第九章全身的な智慮。第十章自問自答式修養。第十一章神は我等の共同經營者なり。

本課は第一章「靈感」の一部で、その卷頭「人生に最も重んずべきものは何ぞと云ふに、經驗、書籍、説教、人物、意外の事件、危機、奇禍、災難等、苟くも人心の機微にふれ、心の門扉を押し開き、匿れたる寶庫を開發するもの、是が即ちそれである。比喩談にかういふのがある」の次に出て居る。

尙その凡例によつて本書の由來と作者の社會上の一面とが知られると思ふ。

一、この書の原書は、我が實業界の先輩日向利兵衛氏が、自ら費用を投じて翻刻し、廣く知人の間に頒たれたるものにして、本書が我が手に入り、初めて翻譯の喜を得たるは全く同氏の賜なり。

一、この書の翻譯を予に勸告したる人に、先に同窓の親友近藤賢二氏あり、後に我が同業の先輩にし

て我が畏友たる末永一三氏あり、末永氏を通じて、日向氏の同意と激勵を得たり。……

一、予が原稿を實業之日本社に紹介し、之によりて予を増田義一氏に紹介したるものは、之亦近藤賢二氏なり。

一、三十年前予にスピントンの萬國史とギゾウの文明史を教へたるは博士浮田和民先生なり。予爾來業餘讀書を廢せずして今日に至る。若し予に多少の讀書癖ありとせば、予が多少の好學癖と共に、全く浮田先生の恩恵なり。

一、高石眞五郎氏は十餘年來相識の士なり、予が乞ふに任せて本書に序し、之を江湖に推賞せらる。……

一、高原操氏は予が近年の知人なり、本書の序を乞ふは、寧ろ予の厚顔無耻の致すところなり。然れども本書の行文の難澁を別にし、内容充實して、世道人心に益する處鮮少ならざる點より云へば、操觚社會の先輩たる同氏が、本書に序せられたるもの故無きにあらず……

一、本書の書名は高石眞五郎氏の撰ぶところ……

一、予が同窓の親友に青柳有美あり、予が乞を容れて、本書最後の推敲の勞を採る。……

要

旨

二〇 兒 獅 子

新しい力を發見し、新しい能力を發見するにつれて、新しい努力と勤勉とは更に誘起せられるものである。つまり人は一旦機會の到來するまで、自己の裡に存在せるものを知らない。然るに一度動機が誘發されるや曾て夢想だにしなかつた力を解放し、蟠龍雲に乗じて天に上るの勢で愈々向上するものであるといふ事を比喻によつて知らせ生徒自身の自覺奮發を促したいと思ふ。従つて字句の解釋よりは内容に深く立入りたいと思ふ。

段落

- 一、或日、兒獅子が……迷兒になつてしまつた。(初から五行目まで)
兒獅子が迷子になつた。
- 二、兒獅子は……彼を養子として引取つた。(一一三頁の九行目まで)
兒を失つた羊が彼を養子として引取つた。
- 三、羊はこの迷兒を……不思議な光を現すことも度度あつた。(一一四頁の二行目まで)
兒獅子は自分を知らない。併し自己の遺傳性は眼の底に潜んでゐた。
- 四、養母と養子とは……躍然として跳び去つた。(一一五頁の八行目まで)
遺傳性を自覺した兒獅子は從來の生活に對してその背をむけた。彼は最早羊の群に復歸しよう

とせず、これまで彼が半面の生命であつた羊の天性に對しては満足しなかつたのである。

- 五、迷兒の獅子は……獅子の天地が已に彼のものであつた。(一一七頁の九行目まで)
比喻に對する説明。
- 六、各個人の内にも……(終りまで)

各個人の内にも未發見の半面がある。これを如何にして發見するか。若し半面の生活しかしてゐなかつたことを自覺したならば、他の半面の生活に活躍するまでは心を安んずることが出来なくなり、從來の半面生活には満足する事が出来なくなるであらう。

解釋

- 【母獅子】 オヤジシ。
- 【探險】 タンケン。(一)實地に就きてさぐり調ぶること。(二)危険を冒して取調ぶること。廣辭
- 【あなた】 彼方。むかうの方。あちら。廣辭
- 【迷兒】 マヨヒゴ。路に迷ひて歸ることを得

ざる小さき兒。まひご。廣辭

【空を壓して】 ソラをアツして。空を壓するやうなといふので大きい修飾だ。

【雄姿】 ユウシ。いさましき姿。天字

【房々】 フサフサ。しげくあつく垂れさがるさま。廣辭

【鬚】 タテガミ。音レフ。馬の領毛。〔天字〕

【谿谷】 ケイコク。たに。

【こだま】 木霊。(一)樹木の霊。(二)やまびこ。〔廣辭こゝは(一)〕

【吼聲】 ウナリゴエ。

【魔】 マ。梵語(Mara)の略。人の善事を妨ぐる悪神。人の心を惱まし亂す靈。〔天國〕

【琴線】 キンセン。(一)琴の糸。(二)感動して共鳴する同情。〔廣辭こゝは心を琴線に擬したので、心の底に觸れるといふこと。〕

【本能的】 本能とは、本來具有せる性能、即ち經驗又は教育によらずして、自然に要求し自然に行動する順應的性能、その反射運動と異なるは、比較的複雑にして且意識的なるに

あり。〔廣辭〕

【勃然】 ボツゼン。(一)物事の發りたつさまにいふ語。(二)顔色を變ずるさまにいふ語。

【躍然】 ヤクゼン。躍如に同じ。いきいきしたるさま、まざまざと目の前に表はるゝさまにいふ語。〔天國をどり出す貌。又、いきいきとしたる貌。〕〔天字〕

【威壓】 キアツ。威力を用ひて壓迫すること。おどしすくめること。〔廣辭〕

【哮える】 ホえる。

【戰慄】 センリツ。おそれて身振ひすること。ふるひおののくこと。〔廣辭〕

【威した】 オドした。

【因循】 インジュン。(一)よりしたがひて改めざること。(二)敢爲の氣象なく、物事にためらひなづむこと。(三)進歩の知識なく、舊弊をかたくなにまもること。〔廣辭〕

【暗示】 アンシ。(一)理由又は意志を明瞭に舉示せず、舉動・容貌等によりてこれを他人に傳ふること。(二)意志の媒介を経ずして、直接に精神的又は身體的の活動を開發する觀念作用。〔廣辭〕

【咆哮】 ハウカウ。大なる聲してほゆる義。〔天字〕

鑑賞

高原操氏の序を借りて之に代へる。

實に純真なる宗教的信念を基調とせる道德訓であり、處世の要諦であり、事業の成功法である。

【自己の内に潜在した獅子を云々】 自己

の内に潜在して眠つてゐる力に氣づかないで。神性又は力を獅子に擬したのである

【神性】 シンセイ。作者が更に、「人は自己生存の意義を明かに覺知し、その眞髓が神であつて、自分は不可分的に全能のかと共に在ることを自覺した時、その全身を通じて、湧き返る神の力を始めて感得するに至るものだ……」とある「眞髓が神で云々」の言葉でよくわかると思ふ。

【土塊の生涯】 從來の平凡な半面の生涯。

……奇蹟とされたる英雄の非常時に於ける大事業や、不可思議とされたる非凡人の遺績の如きも、これを仔細に探究して、睿智的考察を遂ぐれば、茲に生れながらの聖もなく、愚もなく、偉もなく、凡もなく、何人と雖も、如何なる事業でも成し遂げる事が出来るし、唯そこに「自ら信する力」と自ら恃む力の願望する對象に向つて充ち満ちて現れ来るならば、萬事成らずと云ふ事も無し、「精神一到何事か成らざらん」といふ、この偉力を神人の融合に求め、聽て人心靈動の一に歸せしめた汎神論的世界觀社會觀となつてゐる。……

夏目漱石先生の御手紙の中に、「自分で自分のねうちは容易に分るものでない。古來ちつとも文藝に志さなかつたものが急に筆を執つて立派な作を出した例は澤山ある。それまでは自分の何物かが分らなかつたのである」といふ意味の事が書いてありますが、これは或は漱石先生が先生御自分の事を語つて居られるのかも知れません。先生が五高の教授として私共に英語を教へて居られた時、まさか小説家になられようとは思つてゐられなかつたのでせう。少くとも、第一流の小説作家となられようとは考へてゐられなかつたらうと想像されます。洋行から歸られて猫の第一回を書いて雜誌ホト、ギスに出された。それが非常に好評を博したので第二回第三回と續いて出された。ます／＼評判が高くなつた。倫敦塔、カーライルの圖書館、坊ちゃん、二百十日、だんだんに世評が高くなつて、遂に大學教授の榮職を抛つて専門の小説家となられたのであります。で、自覺といふこと、即ち自分で自分の眞價を覺ることは、やさしい事のやうで其の實は頗る六かしい事なんです。

——八波則吉、教育に安住して——

二一 俳句評釋

作者

【沼波瓊音】 ヌナミケイオン。明治十年十月一日愛知縣名古屋市玉屋町に生る。十六年三月菅原學校に入學。二十年成瀬藩の儒者柴山伴男につき漢學を學ぶ。この事久しく續く。父より日本の神國なること、佛教の非たることを教へらる。二十一年雜誌「少年園」出づ、愛讀者となる。二十二年四月愛知縣尋常中學入學。二年へ進級の際落第、暗憎たる經驗の一。正岡秋子女史の嚴父鈴木忠孝氏國文の教師たり最も得る所あり。大惣より小説類を借りて讀む。二十四年ゲーキーの地文學を聽き、漸く不安と懷疑とを萌す。始めて小さんを聞く。齋藤綠雨の作を好む。二十五年村上浪六の作を愛讀す。幸田露伴の五重塔耽讀。謡曲通解を讀む。この頃流行せる明清樂を好む。泉一座の照葉狂言に興味を覺ゆ。鈴木忠孝氏より二ヶ年に渉る枕草紙全講を聽く。二十八年中學卒業。九月第一高等學校入學。芳賀博士の講義最も興あり。二十九年西鶴に没頭す。三十年萬葉集を讀む。作歌して阪正臣氏に添削を

乞ふ。三十一年や、眞面目に俳句を味ひ初め、一高内翠風會に入會。七月一高卒業、大學文科に入る。十一月筑波會に入り、大野酒竹・笹川臨風等と知る。瓊音の下宿に酒竹來り住み卒業迄居を共にす。俳學上に就き酒竹に負ふ所多し。三十二年福地櫻痴居士の謠ひ物の音調に關する講話を聽き、俳句の音調の研究を初む。三十三年小栗風葉と知る。「俳諧音調論」を新聲社より出版す。三十四年七月東京帝國大學卒業。九月哲學館の教師となる。十一月一日三重縣第三中學校教師として赴任、會て芭蕉の住めりといふ養虫庵の偶、空屋となれるに住む。三十五年二月林田たき子と結婚す。三月教頭となる。十一月辭任上京。京北中學に出講。三十六年一月文部省囑託となる。三十七年俳諧講習會に「俳句評釋」を話す。三十八年、「蕉風」を金港堂より出版。文集「さへづり」を南江堂より出版。田岡嶺雲の紹介により小杉未醒と知る。十月、「獨歩集」を読み初めて手本を得たる心地す。三十九年「俳諧奇調集」を鷄聲堂より出版。十一月、「俳句講話」を東亞堂より出版。十二月文部省を辭す。四十年一月萬朝報社入社。大町桂月と共に雜誌「青年」編輯。四月「俳論史」を文祿堂より出版。五月「俳句研究」出版。この頃より獨歩と親しむ。七月、田山花袋・小栗風葉・小杉未醒等と東海道を神戸まで路行し、「東海道旅行圖會」を修文館より出版。八月國木田北斗と淡路に旅す。九月遅塚麗水・栗原古城と共に北海道へ旅す。十月、「俳句作法」を修文館より出版。この頃「即興詩人」を読み感

激。十二月、文集「さくら貝」を修文館より出す。この頃より長き胃病初まる。又三省堂の百科辭典編纂に關係す。四十一年四月偶然夏目漱石來訪、近づきとなる。五月、「俳句階梯」東亞堂より出版。七月、莊内旅行。紀行文「莊内の山水」を萬朝報に連載す。十一月、「俳句一萬」を修文館より出す。「源氏物語」の評釋に取掛る。四十二年一月、文集「小理小情」を國民書院より出版。胃病悪し。文成社發行「日本青年」の編輯に掌はる。四十三年三月、文成社に勧め、「俳諧講義錄」の編輯をなし、それに添ふべき雜誌「俳味」編輯。「三紀行」を文成社より、「短評俳句選」を三教書院より出版。その頃三教書院より袖珍文庫を刊行せしむ。八月、「默想の天地」を東亞堂より出版。四十四年三月、萬朝報社を辭す。「日本青年」の編輯を辭す。「俳味」刊行。九月、「芭蕉句選年考」を酒竹と共に校訂出版。四十五年、脚本「惟然坊」を「太陽」に投ず。七月、文集「しろ椿」を博文館より出版。同月、「教員諸氏の爲めに」を自費出版。九月、「徒然草」の評釋を源氏と並行執筆す。十二月、「惟然坊」が「太陽」に載る大正二年、二月頃より宇宙に對する懷疑生ず。文集「此一筋」を鷄聲社より、「芭蕉句選講話」を東亞堂より出版。五月、「瓊音句集」を新潮社より出版。「芭蕉の臨終」を「現代」に發表。六月「徒然草講話」脱稿。七月、「大疑の前」始めて確信し得たる全實在」を東亞堂より出版。十月「惟然坊」「芭蕉の臨終」を合せ敬文館より出版。十一月出家の心動く。十二月、獨居して伊勢榮に

宿る。年末歸宅。三年一月、酒竹文庫整理にかかる。一月「徒然草講話」を東亞堂より出版。四月、宮本武藏を尊敬調査す。五月、「惟然坊」を無名會の人々により上演さる。脚本「武藏と伊織」を新小説に發表十月、信州に一茶の遺跡を探る。四年二月、盛に作歌す。三月、「早稻田文學」に大平良平の天理教に關する作物に感ず。「高原の風」を自費出版。「乳のぬくみ」を平和出版社より出版。この頃より不思議なる現象起る。五年一月、心靈學を讀初む。古城が翻譯せるメーテルリンクの「死」を見、靈魂の生活に思考す。一月、長江の集めたる天理教祖の研究資料を借入る。「俳句とその作り方」を平和出版社より出す。二月四日、妻たき子と至誠殿に赴き、熱心なる信者となる。不思議を経験し神の存在を確信す。三月限り「俳味」廢刊。六年二月、須磨御影にて傳道、三月歸京。四月より至誠殿に入れぬ事情となり、又大學圖書館に通ふ。十月、「柳樽評釋」を南人社より出版。十二月、高等小學校唱歌委員囑託辭令。一月、俳書解題及び俳書索引に着手。八年、「帝國文學」の編輯を委囑さる。六月、拓殖局囑託。九年四月、法政大學、東京女子大學講師となる。稍後れて、東洋大學講師となる。十一月、「鮮滿風物記」大阪屋より出版。九年四月、第一高等學校講師、東京帝國大學講師となる。六月、「朝鮮の歌と滿洲の歌」を拓殖局より出版。「凡人に聽け」を敬文館より出版。十二年十一月より「朝風」自費出版。十三年二月「居敬集」自費出版。九月「ミカヅキサマ」自費出版。十一月、東洋

大學講師を辭す。十五年三月、帝國大學講師を辭す。五月、「兒島維謙」修文館より出版。六月、東京女子大學教授を辭す。文部省教科用圖書囑託となる。十月、右胸部に弱痛を感ず。××博士の診察により肋膜炎ならんといはる。やがて床に就く。十二月、「島山勇子」を修文館より出版。昭和二年四月第一高等學校休職。五月小康。七月廿七日西片町十番地への八號にて歿す、年五十一。八國語と國文學——昭和二年十月特別號)

出 所

「俳諧講演習」全一冊。明治三十八年三月八日、筑波會編、金港堂發行。定價壹圓五拾錢。その序に曰く、

本郷大學の同意が俳諧を遊ぶ集ひを筑波會といふ。此の名を呼び初めて既に十年、同人多く業を卒へて劇務に従ふ俗塵煩累嗜昔の比に非ず、偶餘暇を竊みて、一夕に雅會に俗腸を洗ふは、平生の最大快事なり。去年王師北強を膺つ、後援の擧、帷幕の策、主都日に騒然として同人益々匆忙を極む、況や炎暑八月に入りて又探涼の暇あるなし、豈一味の涼風を思ふの情更に切ならざるを得んや。乃ち相謀つて夏季講習會を神田三崎町大成學館に開く、會するもの一百に滿つ、此の月を以てすれば蓋し盛なりといふべし。講演するところ多くは一家言に過ぎじ、しかも或は談理の興趣に驅られ、或は俳味の

三昧に入り、一片の雅懷暫くこゝに閑日月を得て、炎暑を忘れ、劇務を忘れ、而して又戦時の民たるを忘れたるもの。これ固より國威の餘澤なりといへども、亦斯道の養ならずといふべからず。乃ち講演の速記を訂正し、訂正成るに従つてこれを輯録して、以て同人の記念となす。(佐々醒雪)

目次

- 俳句評釋——沼波瓊音。俳諧より川柳に至る變遷——吉岡向陽。蕪村論——宮島五丈原。江戸座の俳諧——笹川臨風。芭蕉論——得能秋虎。川柳論——吉丸眞古刀。俳文評釋——長地骨。俳諧の修辭——佐々政一。俳句論——芳賀矢一。短詩形——大町桂月。現代の俳諧——國府犀東。

要旨

人口に膾炙せる有名な俳句に就いて、その解釋の仕方、味はひ方を知らせたいのである。和歌とか俳句とかの味はひ方は生徒にとつて、最もむづかしいものであるから、特に鑑賞の方面に注意を拂はせたい。芭蕉は門人に教へるにあたつて、手をとつて教へず自ら悟らしめたといふことである。本課を教授する際にも俳句は辭句の解釋以上に、内容に深く立入つて自得するやうに指導ありたい。これが爲には生徒に題を課して句作させて見ることもよからうと思ふ。

解釋

【俳句】 ハイク。發句即ち今のいはゆる俳句

は五七五の調を本體とすれど、この調は自由に變ふるを得。十七字を本體とすれど、それより長くも短くもなし得。但し二十四五字が長き極限なるべく、三字足らぬ位が短き極限なるべし。俳句には必ず季を入ることゝす。故に俳句は季節の詩とも稱せらる。されど時に無季の句もあり。これを雜の句と稱す。古俳人にて好んで雜の句を作りたるはまづ鬼貫・惟然なるべし。然れども、雜の句は發表を見ずして今日に至れり。近來或派の俳人等は頻りに俳句を季の埒より出さんとして試作しつゝあり、此發展は將來の事に屬す。俳句の形式・内容は、今日にては、舊來のま

まにては飽き足らざる感を抱く者多くなりたるは、當然の事なり。されど因襲の破壊は暫く美はしからざる現象を見る。あらゆる破壊の試みられつゝ、未だ美はしき建設を見るを得ざるは、俳句の現状なり。

俳諧の第一句を發句ホウクといふ。發句のみ單獨にも作られたり。發句を一に俳句といふ。俳句の稱、古俳書の漢文の序などにも散見せり。今日にては、發句の稱は殆ど廢れて俳句のみいひならせり。俳諧はまた連句とも稱す。

……百科

【片言】 カタコト(一)一語の半。言語の不全なること。(二)小兒などの、言語の、未だ調はぬこと。天國

【判じ物】 或る意義を陰に文字又は圖畫などに寓し、人をして判じて當てさするやうにしたるもの。天國

【謎】 ナゾ。何より出づ。(一)なぞなどの略。(二)あらにはあらざるも、それとさとしむるやうに物いふこと。又、その言葉。

(三)意義の容易く解し難きこと、又その言葉。天國

【認識】 ニンシキ。(一)みとめ知ること。(二)哲、普遍的に妥當する、即ち眞理性を有する思惟。天國こゝは(一)

【直覺的】 「直覺」は「直觀」に同じ。哲、經驗又は推理など、間接の手續を経ずして成立する直接の領會。知覺・判斷・認識の稱。こゝは

瞬間に感じた位の意でよからう。

【嵐雪】 ランセツ。服部氏、幼名は久馬(一)に久米之助ともいふ)後、通稱を彦兵衛といふ。初めは黃落庵・寒蓼堂、後、雪中庵、一に不白軒・玄峯堂と號せり。淡路國三原郡小榎並村に生る。江戸に出でて新庄隱岐守に仕へ、又井上相模守に仕ふ。その頃より既に俳諧を嗜む。或日君侯に従ひ外出して歸り足を洗はんとする時、霰の降り來りしを見て、「武士の足で米とぐ霰かな」の吟あり。かくて風流の志連りにして、遂に致仕す。いつしか蕉門に遊び、俳名を治助といふ。後、嵐雪と改めしは、「嵐の庭の雪ならで」といへる百人一首の歌の意によるなりといふ。又濟雲方丈に

參禪して道を修す。一説に、雪中庵嵐雪の稱は、かの「雪千里山を埋む、什麼孤峯不白なる」といふ語によれるなりと云ふ。彼は其角と並びて實に蕉門の雙璧なり。その句は質實穩健にして一時の流行を企圖せず、終始蕉門の正風を守り、決して奇警なるを求めず。寶

永四年十月十三日歿す。年五十四。駒込竹町常驗寺に葬る。辭世の吟に云はく、「一葉ちる咄一葉ちる風の上」著書に、其袋・若水・或時集・杜撰集等あり。句集を玄峰集といふ、後人の編なり。門人櫻井吏登、雪中庵等二世を嗣ぎ、それより大島蓼太・大島完來・大島對山・山口稚陰・村井鳳州・服部梅年・齋藤雀志と順次その統を傳ふ。百科

【大原】 山城國愛宕郡大原村。古から大原とも小原とも呼ぶ。大原女を以て世に知られてゐる。

【大原や蝶の出て舞ふ云々】 佐々醒雪の評釋に曰く、この句は「大原や」といふ所で切れてゐる。おぼろ月と云ふのは春の月でありますから季は春であります。おぼろに霞んだ月と云ふものは何時でもある譯であります。春の月と云ふのは唯おぼろ月と言ひますと、春のおぼろ月であると限つて居る。そんな約束が多少俳諧にはあるのであります。(中略)偕てこの句を例の散文に改めて見ると「大原よ、蝶の出て舞ふおぼろ月よ」といふので、文法上から言ふと、名詞が二つ列べてあります。

更に精しく言ふと、この句は大原の景色を歌つたもので、その大原の景色の中で、殊に特色と云ふべきものは、おぼろ月の照して居ること、そのおぼろ月の下に、普通は晝でなければ出て舞はない蝶が、春の長閑さに浮かれまして出て舞つてゐると云ふのであります。

その大原といふ詞は、他の何處としてもよかりさうなものです。是は外の固有名詞には容易く改めることが出来ないもので、大原と云ふと、自然大原御幸を首めとして様々の歌や文章の中に現れて居つて、京都に近い所である彼の稍々田舎びて居るけれども、しかも優美な大原女などの出て来る所であると云ふ心持を有つて居ります。その詞が既に春ら

しい長閑な心持を惹起するのであります。その里に朧月が照して居るといふと既に詩のやうに見える。更にそこに蝶が出て舞ふと云ふに至つては、極めて長閑な優美な美しい春の景色が眼に浮んで来る。その外に故事來歴は何もない。

この句に關しては、蝶が果しておぼろ月の夜に出て舞ふだらうかと云ふ疑が、古來からあるのであります。實際夜になつてから、蝶が出て舞ひ、殊にその蝶がよく目には着いて、舞ふ形がおぼろ月夜の下に見えるると云ふやうなことは、極めて稀にはあるかも知れぬけれども、餘り多くは無いことでもあります。で、實際是は實景から作つた句ぢやないかも

知れませぬ。

併し、よしや事實はあつても無くても、唯句そのものから、如何にもありさうな、如何にも優美らしい景色が想像されるのであつて、事實の有無は、この句には大して關係はなからうと思ひます。(中略)

此の句、蝶の出て舞ふと云ふ「の」の字がもになつて居る書物もあります。是は蝶が出て舞ふと云ふやうなことが、事實餘り無いものであるから「も」とした方で宜からうといふやうな考から、何人かが書き改めたのでありませうが、やはり「の」の方が鷹揚でよからうと思ひます。

蝶も出て舞ふと云ふと、一體は餘り出て舞

はないものであるけれども、このおぼろ月に不斷は出て舞はない所の蝶蝶も出て舞ふと云ふやうになつて、意味は稍々明白になるやうでありますけれど、却つて長閑けさが害せられるやうに感ぜられます。因に云。去來の「丈草詠」には、蝶のとあり。

【丈草】 内藤氏。尾張犬山の成瀬家の重臣なり。幼名林之助、後に林右衛門といふ。一に儀右衛門に作る。好學にして詩文の才あり。繼母に仕へて至孝、その意を察して家を異母弟に譲らんとして自ら右指を傷け刀の柄握りがたしとて遂に武門を去り、熊野山先聖寺の玉堂和尚に師事して禪門に入る。時に二十五歳なり。無懷氏一風又は大忘軒と號す。後、

洛の史邦により芭蕉に就きて俳諧を修し、後に十哲の一人と稱せらる。元祿十七年二月二十四日寂す、年四十二。(一説に四十四、又は四十五と云ふ)近江粟津義仲寺の上なる龍ヶ岡東林中に葬る。著書に寢轉草あり。後人の編に文章發句集あり。[百科]

【芭蕉】 松尾氏、正保元年伊賀國阿拜郡柘植莊(現今阿山郡柘植村)に生る。元祿七年十月十二日逝く、年五十一。詳細は第一〇課參照。

【秀逸】 シウイツ。詩歌・俳句などに用ひる時は、その詩歌などが他に秀でて立派なものと、また立派なものをいふ。

【神韻縹渺の趣】 シンキンヘウベウのオモ

ムキ。神韻は極めてすぐれた趣。宋書、王敬弘に、「敬公神韻冲簡、識寓標峻。」縹渺はほんのりかすかに見えるさま。杜甫の詩に、「獨立縹渺之飛樓。」縹渺・縹渺共に同じ。大原やの句は朦朧體ともいふべく捕捉しがたい中に一種の風韻を備へた情景である。

【蕪村】 ブソン。谷口氏、名は寅、字は春星、蕪村はその號。攝州東成郡毛馬村に生る。東成・馬東の號ある所以なり。後、天王寺村に居す。この地蕪菁の産地なり。蕪村・蕪村の號ある所以なり。中年江戸に遊び、後、丹後の與謝に住み山水を愛し、與謝を氏となす。晩年京都室町通綾小路下町に庵を結び、天明三年十二月二十四日歿す、年六十

八。畫は元明の名家に則り、一家の風格を著はす。俳諧は初め江戸の内田沾山に學び、後、早野巴人に隨ひ、二世夜半亭の號を繼ぐ。出藍の譽あり其角より巴人に傳はりし豪健の俳句を受けると、繪畫を作る態度を以て俳諧を作りたるとにより、強く明かなる獨得の一風を成せり。著に俳諧玉藻集・新花摘等あり。[百科]

【舊派】 キウハ。こゝに云ふのは、明治の頃、正岡子規一派が自らその俳風を日本派(新聞「日本」に據つたから)といつて、蕪村再興に努力し、形式打破、因習破毀を叫んだので、世にこれを新派といつた。この舊派はいはゆる月並調の系統で、例の梅虬・蒼室の

余瀝を嘗めるばかりであつた。藝術としては全く行き詰つてゐたが、しかし、その傳統の儼しさは宗匠といふ貴い地位に伴つて、侮り難い勢力があつた新派のやうにのびのびと、すらりとしたことは取らない。或一種の癖のあるやうなのを迎へてゐた。雪中庵とか其角とか老鼠堂とか、そんな勿體ぶつた號が、お人よしの隠居やひまつぶしの若旦那にこの上なく光つてゐた。そして次第に化石のやうになつて、俳句の命を失つて行つた。それが所謂舊派である。蕪村の句は彼等にはあまり我がまゝで、強くて、そして自然だから嫌はれたのである。

【一茶】 イツサ。小林氏。通稱彌太郎。俳諧

寺、蘇生坊の號がある。信濃國水内郡柏原村に生る。幼時母を失ひ、慳食邪曲な繼母の爲に非常に苦患を嘗めた。六歳の時、「われと來て遊べや親のない雀」といふ句を作つて人口に膾炙してゐる。家を出て江戸に來り、素丸の門人に入り菊明と名乗り、二六庵竹阿の後をついだが、後破門せられ一茶と改めた。三十二歳郷里に隠れ俳三昧に入る。文政十年十一月十九日歿、年六十五。柏原妙國寺(明惠寺)に葬つた。句文を後人の上梓したものに、「一茶發句集」「一茶句帳」「一茶聯句集」「おらが春」「七番日記」等がある。

【蛙合戦】 カハツガツセン。蛙いくさ。蛙が多數集つて相闘ふこと。〔廣〕

にして三百石を領す。名は百仲字は羽官、通稱を五助といふ。……初め俳諧を北村季吟に學び、中頃田中常矩の門に入る。後、漸く芭蕉を慕ひ、その曠野集を愛讀し、大津の尙白、江戸の其角に會したれど、未だ蕉翁に接するを得ず。元祿五年八月天野桃隣の介によりて初めて深川の草庵にて師弟の契を結ぶ、その時句を問はれて出せる數句中、宇津の山にての句、「十團子も小粒になりぬ秋の風」といへるもの最も翁の稱讃を得たり。又畫を狩野安信に學びて甚だ巧なり。蕉翁も畫は彼に師事せり。又俳文俳論に長ず。その性倨傲にして自ら高うする一枚起請に、「先師の發句仕様を前後よく知り、俳諧の底をぬきて、古今

【ボンチ繪】 英語 Punch. から來た語。もとは西洋の人形芝居で戲謔する者の名。併し倫敦で發行せられる雜誌 Punch. が滑稽畫を主とするより、道化繪、滑稽繪をボンチ繪といふに至つた。

【卯の花】 うつぎの花。幹の高さ五六尺、葉は對生で楕圓形鋭頭、鋸齒を有して居る。花は白色で穗狀花序に排列し五六月の頃に咲く。我が國の山野に自生し、又庭園に栽培する。

【月毛の駒】 桃花鳥の翅の裏の色の如き馬の毛色。即ち、葦毛のやゝ赤みたるもの。又、その毛色の馬。〔大〕

【許六】 キヨロク。森川氏。近江彦根の藩士

に涉るものは五老井(自分の號)一人なり」と自負せしを見ても、その人となりを推知すべし。晩年癩を病みて人に接せず、遂に正徳五年八月二十六日歿す、年六十。著書に、風俗文選・篇突・俳諧問答・宇陀法師・歴代滑稽傳・韵塞・菊阿彌句集・和訓三體詩・十三歌仙註・一枚起請等、彼の畫を刻したるものに彦陽十境集あり。〔百〕

【極彩色】 ゴクサイシキ。極めて精密なる彩色。濃彩。〔大〕

【土佐畫】 トサエ。土佐派の筆に成りたる繪畫。承安の頃、藤原經隆と云へる者あり。父祖の業を受けて畫事に精しく、従五位下に叙し、土佐權守に任ぜらる。是に於て土佐なる

名稱は起れりと傳ふ。然れどもいはゆる土佐派の畫は經隆の創始せるものにあらず。既に平安朝以前に於て我が國に移植せられたる支那唐朝の畫法は平安朝に入るに及びて次第に醇化渾成せらるゝの運に向ひ、かくて大和繪なる純粹國風の畫態を生じ來りしが、土佐繪は實にこの主系を成せるものなれば、遅くも平安時代の中期以前に於てその濫觴を認むべく、經隆の現はるゝ頃には既にこの派の特色は發現せられ居たりしなり。土佐派は概して描線輕雋にして、運筆は特に豁達自在の趣あり。人物の活動を表はすを得意とし、多く本邦の風俗物語を題材とせり。

經隆より以前、若しくは同時の人にして土

佐派の大家を求むれば、僧覺猷、藤原光長、藤原隆信、藤原邦隆等あり。後世光信及光起に光長を加へて土佐派の三筆と稱す。〔百科〕

【卯の花に云々】 夏の季。白々と明けはなれようとする地上に、白く咲いてゐる卯の花と、灰色のうす赤ばんだ月毛の駒とを配合して、爽涼な情調を醸し出した句で、句全體は色彩の調和と語のリズムの諧調からなり、その諧調から、ある爽やかな感じを作つてゐる。

【去來】 キョライ。向井氏。肥前長崎の人、名は兼時、又義焉、通稱を平次郎、後、次郎太夫といふ。蘭亭・落柿舎の名あり。初め兄震軒に従ひて京に上り、堂上家に仕へ、後、

退隱して専ら俳諧に遊び、嵯峨に草庵を結びて落柿舎といふ。蕉門の高足にして、芭蕉も許すに關西の俳諧奉行を以てせり。性温厚篤實にして、彼の倨傲なる支考すらその徳を推奨して止まさりきと云ふ。師翁との間柄は恰も親子の如く、翁の難波に病むや、日夜病床に侍して介抱至らざるなく、歿後遺骸を義仲寺に葬るにも、自ら肩衣に鋤を携へて勞役に服す。寶永元年九月十日歿す、年五十三。洛東眞如堂に葬る。著書に、伊勢紀行・旅寢論あり。〔百科〕

【葦毛馬】 月毛の條参照。

【其角】 キカク。榎本氏。本姓は竹下、後、母方の姓榎本氏を冒す。幼名は源助、父は東

順、江州堅田の人なり 初め儒を服部寛齋に學び、又醫を草刈三越に學び醫道の名を順哲と云ふ。詩は大巖和尚を師とし、書は玄龍に學び、中ごろ米元章より日蓮にうつり、後一家の風をなす。畫は英一蝶に學び、畫名を薯子といふ。延寶の初蕉門に入りて俳諧を學び、天和三年虚栗を著はし、頃より世に知られ、遂に蕉門十哲の首たり。芭蕉曾て門下に其角と嵐雪とを得しを悦びて曰く、「兩の手に桃と櫻や草の餅」と。芭蕉の死後、江戸座を開き、洒落の俳風を唱へ、天下を風靡せり。寶永四年二月晦日歿す、年四十七。芝二本榎上行寺に葬る。其角人となり豪宕磊落、頗る才氣に富めり。赤穂義士大高忠雄の友たり。

著はすところ虚栗の外に、新二百韻・蠹集・新山家・續虚栗・いつを昔・誰が家・花摘・雜談集・句兄弟・枯尾花・俳諧錦繡綴・三上吟・焦尾琴・類柑子等あり。句集に五元集あり。【目録】

【巴峽秋深云々】 和漢朗詠集下卷雜、猿と題して、瑤臺霜滿^{テリ}。一聲之玄鶴^{ウツ}唳^シ天^ニ。巴峽秋深^シ。五夜之哀猿^{ウツ}叫^フ月^ニ。(清賦——謝觀)「巴峽」は巴東の三峽をいふ。楊子江の上流に在りて四川省に屬す。三峽とは廣深峽・巫峽・西陵峽のこと。晉の無名氏の女兒子と題する詩に、「巴東三峽猿鳴悲。夜鳴三聲淚沾衣。」猿聲の悲を説くことこの詩に始まると。「五夜」終夜の意。夜を甲・乙・丙・丁・戊

吟である。自分は一生を殆ど旅に過した。今も旅先で病んでゐるのだが、その夢にさへ自分は旅の姿で枯野を歩いてゐる、しかも夢は自由だ、尾張あたりの景色かと思ふと、はや美濃のあたりに移つてゐる。夢は自分の魂を載せて、翅のあるものゝやうに駆け廻つてゐるのだ、しかも何處も荒寥たる枯野ばかりだ、といふ程の心持である。旅人としての芭蕉の淋しい且安住しきつた心持はよく打出されてゐる。この句の佳い所はこのリズムの強さである。「旅に病んで——」斯う全體的に自分を打出して、其自分は床に捉へられてゐるもどかしさから「夢は——」と夢に自分の魂をうつして一轉し枯野をかけ廻る」と一氣に

に五分して呼ぶ故にいふ。甲夜は初更と同じく今の午後八時、乙夜は二更今の十時。丙夜は三更今の十二時。丁夜は四更今の二時。戊夜は五更今の四時。

【言水】 ゴンスキ。池西氏。奈良の人。名は則良、通稱八郎兵衛。松江重頼に學び、談林の徒とも交つて自ら一家をなした。後、京都に住み蕉風に歸した。享保四年歿、年七十。二。

【木枯】 コガラシ。秋の末より初冬にかけて吹く疾き風の稱。

【旅に病んで夢は云々】 荻原井泉井水の評釋に曰く、

大阪の花屋で病み臥してゐる芭蕉の辭世の

押し切り、活躍する。そのリズムの變化は丁度能樂などで云ふ所の序破急の呼吸である。ただ口を突いて噴出した言葉が、何等の彫琢をせず斯ういふ句となり、それをどうする事もできないといふやうな點で、其處に動かし難い力がある。」

【推敲】 スピカウ。正しくはタイカウだが、今は慣用讀みに従ふ。詩文の字句を練ること。唐の詩人賈島の記事に基く。賈島「鳥宿池邊樹、僧敲月下門」の句を得たが、敲を推としてよいか、或は敲としてよいかに思ひ煩うて歩いてゐるうち遂に京尹韓愈の行列に衝突してその無禮を責められたが、韓愈はその由を聞いて許し、且つ「敲」にした方がよい

と教へられたといふ故事。

【斯道】 シダウ。俳句の道。

【鉢の木】 觀阿彌作曲又世阿彌作ともいふ。

北條時頼薙髮して最明寺入道と號し竊に鎌倉を忍び出で、諸國行脚の途に就き政治その他の得失を考察す。偶々上野國佐野の郷に入りて風雪に會し佐野源左衛門常世が窮居に一宿を求む。然るに常世は當時一族の爲に所領横領の厄にあひ貧窮洗ふが如く客に暖を進めんと欲して薪炭なく遂に秘藏の鉢木を斬りて暖をこの行脚僧に供す。而して常世かくの如く貧窮なりしかども馬匹鎧の一領は武士の嗜としていざ鎌倉の場合には眞先駆けて北條殿の着到に就かんことを物語る。後、時頼鎌倉に歸

り常世が言行を試みんと欲して諸國の兵馬を召したりしに常世果して到る、依りて昔日鉢の木を斬りて暖を供せし返禮として本領安堵の狀と共に新領之箇所を與へしことを作る。
(謡曲辭典)

【俳諧蒙求】 一冊。岡西惟中著。俳學々者の

参考書なり。編述の年月日を明記せず。岡西惟中は寛永十六年生る。一有又一時軒と號す。因州鳥羽の人。大阪に出で醫を業とす。

西山宗因に就きて俳諧を學べり。元祿五年八月十日、五十四歳にて歿せり。(國書解題)

【木節】 近江の人。芭蕉の門人。醫を業とす。

【近來の耳を洗へり】 近來會て聞かない痛

快な事を聞いた時にいふ。

【絶唱】 ゼツシャウ。この上もなくすぐれて

よき詩歌。(大國)

参 考

1、俳句沿革の概説

俳句とは俳諧の句、發句(ホツク)。俳諧體の連歌の意で、連歌を民俗的にしたものをいふ。今は發句の名稱は殆ど廢れて俳句といつてゐる。俳句の起原は判然しないが、明應の頃飯尾宗祇がある人のために「俳諧百韻」を作つた。次いで山崎宗鑑は永正十七年に「犬菟玖波集」を著し、荒木田守武は天文九年に「俳諧獨吟千句」を發表して各、別天地を拓いた。連歌から俳諧の分れたのはこの頃からである。元龜二年松永貞徳が京に生れて遂に俳壇の中興となつた。彼は「淀河」・「油糟」などの俳書を著し、次いで慶安四年「御傘」を發表して俳句の法式を完成した。貞徳の門に野々口立圃・松江重頼・安原貞室・山本西武・北村季吟・齋藤徳元・池田是誰・石田未得等が輩出した。これを貞門と稱した。重頼の門から池西言水・上島鬼貫等が出て、季吟の門からは松尾芭蕉・山口素堂等が出た。その頃伊勢に杉田望一が現れて一旗幟を樹て伊勢風の鼻祖となつた。當時貞徳の俳風に慊らず滑稽

【自負】 ジフ。自らおのれの才學又は功業などを誇る事。自慢。(大國)

を本體として新俳風を創めたものに西山宗因がある。その門から井原西鶴・北條團水・椎本才麿・田代松意・菅野谷高政・松井宗旦・岡西惟中・内藤露沿等が輩出した。この派を談林と稱した。延寶三年宗因が出て「談林十百韻」を成した。こゝに於いて貞門と激烈な論争を惹起したが、貞門から談林に降る者が日に多く、遂に俳壇を擧げて談林の手に委した觀があつたが、多くは淺薄な諧謔を弄するのみで、その内容は極めて貧弱であつた。勿論その中には松井宗旦のやうな生地伊丹に據つて伊丹風を起した識者もあつた。當時嶄然として一頭地を抜いたものは松尾芭蕉であつた。芭蕉はもと貞門の人で談林にも關係してゐた。その門からは榎本其角・服部嵐雪・内藤文章・森川許六・各務支考・向井去來・杉山杉風・廣瀬惟然・佐分利越人・澤露川・凡兆・浪花等が輩出して「俳諧七部集」を出した。蕉門を後に正風と稱した。また其角の下に江戸座が起り、嵐雪の下に雪門が起り、支考の下に美濃派が起つた。かうして元祿の末に至つて流石の正風も江戸座の洒落風及び立羽不角の花鳥風のために大いに衰頹したが、安永・天明の頃に至つてはまた健全な俳風が起り、高桑闌更・加舎白雄・谷口蕉村・大島蓼太・加藤曉臺等が輩出した。中にも蕉村は着眼警拔、詩想豊富で、咳唾球を成すの概があつた。蕉村門の高井几董、蓼太門の伴大江丸、曉臺門の井上士朗、白雄門の建部巢兆、闌更門の成田蒼虬、櫻井梅室等は夏目成美・小林一茶と共に享和・文化・文政・天保の俳壇を賑はした。この

時代の俳句は、天明時代の豊麗に反して極めて洒脱であつた。殊に一茶は自我を大膽に露示して句々讀者に肉迫する概があつた。弘化・嘉永・安政の頃には豊島由誓・高梨一具・富處西馬等が出て多少の氣焰を吐いたが、殆ど問題にならなかつた。萬延・文久・元治・慶應に至つては河田寄三・菊守園見外・月の本爲山等が僅に悲鳴を揚げたのみで、俳壇は著しく凋落したが、明治二十五六年頃に至つて大いに新派が起つた。その中で正岡子規を中心とする日本派、角田竹冷を中心とする秋聲會派は有名であつた。明治三十五年子規の歿後日本派は河東碧梧桐の新派と高濱虚子の平明派に分れ、各機關雑誌を發行してその普及に努めてゐる。この間にあつて獨り超然として一派をなしてゐるものは内藤鳴雪である。その他新教育を受けたものによつて組織された俳會が續々起り、新聞に雑誌に一つとして俳句欄を設けてゐないものがないほど盛に行はれるやうになつた。(日本百科大辭典による)

2、詩としての俳句の一般に就いての事柄

○幽玄 或る句が表から何等かの境を言ひ現はすといふでは無くて、その言葉の裏から趣致深く、その表現以外の境を暗示して居るものを、芭蕉は幽玄といつたのである。表現が表現だけのものと見られずに、もつと廣く、深い内容の世界を表現するといふのだ。かうした藝術觀は、歌學の上では「餘情」と呼ばれて來た。

○さび この幽玄は次第に發達して後年の芭蕉の「さび」の藝術觀となつたのであらうが、彼の所謂「さび」は敢て「空寂」の意味ではなく、寧ろその詩境の新しく、珍しく聞かれた處を悦んだものやうで、その珍しい事の「花」を大いに含んでゐたのであつた。即ち新しく、珍しくて、餘情を多く含む處が「さび」と呼ばれたやうである。この語は、初期の芭蕉により幽玄といふと同じ意味の場所に用ひられてゐる。

○しをり 心の幽玄が表現の上につややかなる姿を以て、まことに趣深く現はれたものを指して居る。「十國子も小粒になりぬ秋の風」——芭蕉は「この句しをり有り」と言つて居る。

○細み 藝術的通路は實際生活の通路などとは違つた或るデリカシーを持つ。それは粗の略では無く、細やかなる路だ。非合理的ではあるが細やかな心がそこでは必要である。芭蕉はこの事を「細み」と言ふ言葉で現はした。「細み」が表現せられれば、「しをり」となる。だから「しをり」とは表現が細やかに藝術的となり、藝術的通路の尖點になつて居る事を意味する。

3、連句の附様に就いての事柄

○にほひ 前句の世界を中心とし、それより餘情を以て後句の世界の形成せられるもの。

○ひびき これに就いて「起情」「向附」などの語が相對するものと見られた事は私に興味深い。試

に起情、即ち「情を起す」とはどんな意味であるかを考へて見よう。湖中は「前句のぬしの知らぬ魂を後句より入れて作る事」だと云つて居るが、かく精神の動きが前句より後句に向はず、逆に後句より前句に向ふ處は「向附」の語にふさはしい。私は表現が一つの中心をつくる事を云つたけれども、その中心によつて形成せられた世界の中のすべての一點はそれぞれに異質的であり、絶對の意義を持つものであるから、所謂事々無礙の象徴的關係を以て、表現により中心となつた點に對應し、眞に端的にその他の或る一點が第二の中心となつて精神の焦點に這入つて來ることがあらう。この第二は第一に對してひびいたのである。そして統一は第一と第二の雙方の中心により行はれる。寧ろ或る時には、第二の中心が主となつて第一の中心の方へ統一の動きが向つたとも見られるのである。統一の中心は常に生きてゐなければならぬ。隨つて前句が叙景であり、後句が叙事叙情であるやうな場合には、後句の中心が前句の世界を吸収したやうに見えよう。起情、向附共に叙景、叙事と見られた理由はそこにあらう。併し叙景とても統一の中心になり得ない事はない。自然も亦詩の中では生きてゐるのである。統一は第二の中心より第一の中心へ向つたやうに見えても、その上にはなほ本來の表現よりその縁暈に向ふ統一がある。第一の中心は第二の中心をひびかせ、その第二の中心が、藝術的世界を統一するのである。それ故に起情も向附も、すべては餘情の中のものだ。

私は起情と餘情との關係を右様に考へるが、この考を根據に置いて「去來抄」の中の「ひびき」の解を見れば、よく分るやうに思ふ。「響は打てば響くが如し」とある。……

○走り 第一の中心よりその他の點に及び統一力の派生が無限の末端に及んで滅亡するその動きの末を眺めれば、それは走りとなるのである。大山脉の餘勢が遠い彼方で平野の中に失はれる趣がそれであらう。

「移り」「走り」すべてその精神の動きによつての名である。

○位 前句に現はれる人物の「位」を知つてそれに必然的な後句の句境をつくる事である。(土田杏村著——國文學の哲學的研究)

瓊音句集抄

告別の握手を叩く霞かな
四瓜太郎躍り出でよと割りてけり
交際の愚を嘲りて松の内
あつたらの櫻をポトトレース哉
土筆摘んで小さくなりし心かな
俳人や蚊屋にも別れ惜しみ來し

二二雀

作者

【小林一茶】 コバヤシイツサ。徳川末葉の俳人。幼名彌九郎、俳諧寺一茶と號す。信州上水内郡柏原驛の人なり。幼より繼母に事へて孝心深かりしかど、遂に逐はれ、江戸に出でて聖堂に僕たり。下谷坂本に住す。初め中村新甫及長月庵若翁に俳を學び、寛政二年葛飾素丸の門に入り、二六庵を繼ぎて竹阿又は菊明と號す。素丸の歿後成美を友とし、獨得の一風を得たり。後、郷に歸り、異母弟に家督を譲りて別居す。晩年中風に罹り重患となりしが、なほ死せざりしを以て蘇生坊と號す。文政十年十一月十九日歿す、年六十五。同地明惠寺に葬る。句文を後ノの上梓したるものに、一茶發句集・一茶句帳・一茶聯句集・おらが春・七番日記等あり。[附録]
高須芳次郎氏曰く、

蕪村が出現して、技巧派が行きつくすところまでゆくと、非技巧派の出現が要求さるゝことになつ

た。一茶はその傾向を代表したのである。一茶は信州の山中に生れて、十餘年、江戸に出てゐたことはあるが、信州人としての地方色が、いつまでも彼に付き纏うてゐた。彼は平凡な百姓としての素質をいつ迄も持つてゐて、さうしたところから流れ出る純眞の感情を發露した。彼は愛と同情の權化として輝いたが、不正、不義に對する場合は容赦なく、その憤りを洩らした。彼は「何事もあなた任せ」の他力門の宗教を信じてゐたやうな所があるけれども、尙芭蕉のやうに現世を超脱することも出来なければ、深く悟入しようとしなかつた。いつまでも世間、人間に執着して、一喜一憂した。悲しい時には、その悲しみを蔽はずに吟じた。憤る時には、その憤りを包まずに爆發させた。彼の人格と彼の俳句とはびつたりと一致して、そこに少しの間隙が見出されなかつた。言ひ換へると、彼にあつては生活即俳句、俳句即生活であつた。俳句が即ち彼であり、彼が即ち俳句であつた。

一茶の句は、大體に於て、自然に對し、人間に對して、深い愛と親しみとを湛へてゐた純眞な一田舎人の赤裸々な聲を洩らした生活詩である。その深い愛が、時と處とによつて、可笑味ともなり、憎みともなり、時としては諷刺の心をよせたやうにも見ゆる。けれども結局歸する所は、深い愛である。それは自然に對する愛、人間に對する愛である。そしてそこに一茶が親しみを以て、人間と自然とに向つて、暖い抱擁をすることとなる。かう解釋すると、彼の俳句の眞趣が自ら解せられる。

大體、彼の一生は決して幸福ではなかつた。彼は幼少の時から、繼母の爲に可成苦しめられた。そしてその實父の歿後は、財産分配問題について、繼母が不正なことをしたので、一茶は幾度もそれと争つた。「蠅螂や五分の魂これを見よ」と彼は、この争ひにいつての赤裸々な感情を歌つた。

彼は成美の門人で諸方を行脚して、彼の俳風を傳へたが、大體に於て、單に片田舎の一俳人として取扱はれただけで、彼の周圍に集つてくる門弟や交友は極めて少かつた。成美その他僅少の先輩知己があるに過ぎなかつた。世間的にも、俳人としても、不遇な淋しい境地に彼は置かれた。けれども彼はさうした不遇の間にあつても、生一本な彼の純眞さを失はなかつた。また彼はその愛兒の上に於ても不幸な人で、それがため、少からず彼の神経を痛めた。けれどもそれであるからいつまでも悲觀に沈んで、世をはかなむことはなかつた。彼は依然として生れた時のやうな子供らしい心をいつまでも持續してゐた。

さうした有様で、彼は普通の俳人のやうに風雅振るやうなことをしなかつた。故らに俗世を超越したやうな風を裝はなかつた。また自己の俳風を力めてひろめようとしなかつた。何處までも彼は田舎者で通した。そして世間の所謂「俳人」らしい俳人ではなかつた。そこに彼の純眞さがあつた。彼は人として大なる子供であつた。それは實に藝術上に於て、最も尊いことである。

詩人として、いつ迄も、生れた時の子供らしい純な感情を保つてゆくものは極めて少い。時と世故、閱歴とは、自然、子供らしい所を次第に磨滅させてしまふのである。ところが一茶にあつては、時も、閱歴も、悲しみも、淋しさも、不幸も、不平も、怒りも彼の偉大なる子供らしさを磨滅させ、減少させることは出来なかつた。生れた時から死ぬまで、六十五年間、彼はその子供らしい感情を持續して來た。彼の俳句が、強い力を以て居るのはそれが爲である。

更に他面から見ると、彼は俳人として、深く現實に根を下したところに近代的傾向をもつてゐた。蕪村も、寫生・寫意を基本としてゐる所に現實味を以てゐたにちがひないが、未だ現實に深く喰入る所まではゆかなかつた。實生活味をしみじみと體驗する所まではゆかなかつた。ところが、一茶は多數の俳人とちがつて、實生活に深く喰入ると同時に、さうした生活の味をしみじみと體驗した。どんな場合にも、彼は實生活から遊離しなかつた。積極的にその方面へ突入した。そして日常身邊に於て、目睹し耳聞する農民生活の上に彼は他に見ない味を見出した。かうした境地は、彼の偉大な子供らしさと共に、どの俳人にも容易に發見し得ない特色である。ある意味に於て、彼はバースと共に、優秀な農民詩人だと云ふことが出来る。

彼の俳句に於ける調子は、やはり偉大な子供らしさと一致してゐた。そこには技巧を尙はうとした所が全くなかつた。大抵俗語、俚言などを採り入れて、無造作に彼の俳想を表現した。それは弊衣破帽の田舎者の風體そのまゝと云つたやうな所があつた。けれどもさうした無技巧らしい所に、彼のユニークな色合があつた。そして彼の表現を有効ならしめた。この點に於ても、彼は他の俳人と全く異つてゐた。……(日本近世文學十二講)

出 所

「一茶發句集」全二冊。著者の俳句數百首を集めたるものなり。嘉永年中出版す。外に魚淵・二休等の十四家の校定したる文政版あれど、嘉永版はそれを増補したるものなりといふ。俳諧文庫第十一編「一茶大江丸全集」中にも收めたり。(國書解題)

要 旨

深く現實に根を下した近代的傾向をもつた純眞な俳句を味はせたい。特に自然に對し、子供に對し、動物に對する深い愛と親しみとを堪へたところを味はせるのが、本課の眼目である。

解釋と鑑賞

【我と來て、の句】「おらが春」の中の句、
 明和五年一茶六歳の時の作。この頃は彌太郎

と云つた。この句の前に、「親の無い子はどこでも知れる、爪をくはへて門に立つ、と子供

に唄はるゝも心細く、大方の人交りもせずして、裏の島の木萱など積みたる片陰にせぐくまりて、永の目を暮しぬ、わが身ながらも哀れなりけり。」とある。

黒澤隆信曰く、「未だ乳放れもせないわづかに三才の秋、即ち明和二年八月十七日、實母はこの可憐兒を残して病死して了つたのである。それからといふものは恐ろしい刺々しい浮世の波は、容赦なく一茶の幼い心を傷けてゆく。彼の日記によると、近村に富右衛門といへる悪太郎があつて、彼は一茶より年上で力量があつて、他の子供より比較して強かつた、其奴が一茶が近隣の子供と、時たま往來や諏訪神社の境内で遊んでゐると、「親の無い

子は何處でも知れる爪をくはへて、門に立つ」と言ふ俗語を人々が言ふのを聞いて一茶を見るたびに浴せかけるので、一茶は人とも交らず淋しいが、らんとした家に居たと云つてゐる、が少年の遊びたい心を押へて獨りで、裏庭あたりで遊んでゐたいちらしい貧しい心、淋しい思はひたひたと心に迫つて來たのである。この時小さい羽音を立て、下枝に遊んでゐる目狂はしい子雀の愛らしい姿は一茶のまはらぬ舌に「我と來て……」と口吟ませたのであるといつてゐる。(一茶の生涯及藝術)

【雀の子、の句】 雀に對する愛と親しみの表現である。やさしい句だ。

【晝飯を、の句】 「たべにおりたる」之も子供らしい言ひ方だ。

【どれほどに、の句】 灯をめがけて灯とり虫が来る。いくらでも来る。命の無くなるのもかまわない程に面白いのだらうか。別に面白味も無ささうな灯一つに過ぎないのに、といふので、執拗な彼の行動に驚畏の目をみはつた句で、その中に不憫の情がこもつて居る。

【おんひらく、の句】 蝶が羽をひらひらさせて長閑な春の日向を飛び行く様を、金毘羅通ひの船の帆に思ひ合せた句である。「おんひら」と「金毘羅」の韻が面白い。「金毘羅」は金刀比羅宮で、香川縣讚岐國仲多度郡琴平

町鎮座。祭神は大物主神。相殿に崇徳天皇を配祀す。もと象頭山金毘羅大権現といひ、歴朝皇室の崇敬甚だ厚く、維新前までは、毎年春秋禁中より御撫物を當宮別當に下し、寶祚悠久を祈願せしめ給へり。衆庶の欽仰深き中に、殊に舟人・水夫の尊信最も厚く、毎年参詣者の多きこと伊勢神宮に亞ぎ、神威の顯著なること關西第一と稱せらる。明治七年宮號に改め、十八年國幣小社より中社に昇格す。(神祇辭典)

この句は讚州にての作といふ。
【朝やけが、の句】 卒直な句、かたつむりまでが自分の友達であるかのやうだ。

【赤い月、の句】 童心を失はない彼の姿が

偲ばれる。

【おとなしく、の句】 旅立の時の句である。「おとなしく留守をしてゐよ」が正しい。

「おとなしく留守をしゐろ」といふ、何といふ心のやさしさであらう。

「蝨」音キヨウ。こほろぎ、きりぎりす。蝗に似た小蟲で、體褐色、よく飛ぶ。秋夜草間床下等で鳴く。蜻蛉、蟋蟀。(こほろぎときりぎりすとの異同について説がある。今いふきりぎりすはばつたに似た小さい鳴蟲)〔評述〕こほろぎ、こほろぎのこと。

【お祭に、の句】 秋祭りで子供等は赤い晴着で外へ飛び出す。すると目の前をついと赤とんぼが通る。「今日はお祭だから赤とんぼ

も赤い着物を着てるんだな」と、ふと考へる子供心が句中に動いてゐる。

【あとの人、の句】 秋の山に栗拾ひに行つて、前の者は一所懸命に探して見つからないのに、あとから行つた人は三つ栗を三つも拾つたといふ、後の人の得意さが見える。三つ栗三つと云ふ韻が面白い。「三つ栗」栗の一つの穂ほの中に三つの子こあるもの。〔因圖〕

【うまさうな、の句】 「うまさうな雲」と云つた所、子供らしくて正直である。「ふうはりふうはり」で、牡丹雪の落ちて来る様子が出て居る。

【どんぐりの、の句】 韻に秀れた句である。

考

一茶の著述として、読んで最も面白く、又、彼の面目をまさまさと現してゐるものは、この「おらが春」である。これは文政二年即ち彼が五十七歳の正月に筆を起して、折々の感想と發句とを書きつけ、その年の十二月の終に筆をとどめたもので、全一ケ年間の手記である。而して、この一ケ年間の生活手記を以て、彼の一生涯の生活相も、彼の人生觀も、彼の自然觀も、悉く、はつきりと覗ひえられるやうに思ふのである。五十七歳の彼は、彼としては比較的に平和な時であつた。長い孤獨と羈旅とに人生の五十年を過ごして後、漸く故郷の柏原に家を構へたのが五十一歳、妻を迎へたのが五十二歳それから長男、次男が産れて何れも死ぬといふ風な幸と不幸とがあつたが、五十七歳の春は長女さと女が彼の膝下にあり、彼の物質的生活もやゝ安定を得てゐた時である。されば「めでたさも中位なりおらが春」で、上を望めば方圖もないが、下を瞰れば彼より不幸なものもあるので、中位のめでたさに彼は安住の栖處を見出してゐたのである。翌年の事はこの手記にはないが、翌年、彼は中風に罹り、その病氣は癒えたが、二三年後には妻女が歿し、それから再婚し、離婚するなどいふごたごたがあり、その内再び中風が起るといふ風に、この年から後は又不幸がつきつき起つてゐるので、「このおらが春」に筆を執つた年は、何としても彼には比較的平安な時代であつたと云へよう。さればこそ

彼は、この手記の中に徒然草風の聞書を書いたり、漫談を書いたり、心の餘裕をも語つてゐる。この「おらが春」が一つの隨筆の體裁をなしてゐる譯である。然し、この一年の間さへも、彼には全き平和はなかつた、彼の長女は夏の末に死んだ、彼は非常に悲歎してその心の痛みを書いてゐる。且つ彼と壁一重を隔つてゐる異母弟の仙六との間も折々葛藤が絶えなかつたらしい事は、この隨筆にある彼の感想が人間の心のひがみや、過去の暗い追憶に多く向けられてゐる事からも推察される。さうした中から彼の冷たいあきらめが彼の心を堅くして來たが、一方には又、何もかも或る大きな者の手に任して、忍辱して生きようとする柔い感情も亦、彼の魂の中に芽ぐんで來てゐた。「ともかくもあなたまかせの年の暮」——この「おらが春」を結んであるこの句は、彼の心境を一言的に傳へてゐるものとしても注意される作である。「おらが春」一篇は、その内容に於てのみならず、著書としても彼の作中にあつて唯一のまとまつたものである。といふのは、他の著作は彼自身で上梓する程に整理しないのを、後人が編輯したものであるけれども、この「おらが春」はすぐにも出版出来るやうに彼が清記し、自分で挿繪まで書いておいたものだからである。但し、生前には出版されず、序後二十六年を経て、嘉永五年に至つて、彼の原稿そのままに版行された。その後はそのスリ紙を判下として、ほぼ元の體裁に複製されたものもあり、活字本としては俳書堂版のものその他數種類も近來公にされてゐるが、活字本の多くはこの篇中の或一節（インボテンスの事を書いたもの）に、風俗上の顧慮から伏字を用ひてゐる。然し、私はその心配はないと思ふので（嘗て私の校閲した聚英閣の「一茶選集」にもさうした通り）こゝでは原文通りに出してある。又、「おらが春」の面白みとしては、一茶自筆の挿繪も大に興る所があるので、この書には原本のそれをチンク版に寫して挿入する事としたのである。（おらが春——一茶文庫第二編、荻原井泉水氏解題）

小言いふ相手もあらばけふの月（一茶四十八歳の時妻を失ひ翌年中秋明月に對して）
 撫子や地藏菩薩のあとさきに（妻死後一子混藏を人に預けしが虐待死に至れる時）
 這へ笑へ二つになるぞけふからは（文政元後妻を娶りさと女を生む、翌二年の正月）
 泣く猫に赤ン目をして手まりかな（其あどけなさを）
 露の世は露の世ながらさりながら（六月二十一日さと女身まかりし時）
 とにかくにあなたまかせの年の暮（文政三、五十八歳の秋中風に罹りて）
 ことしから九儲けぞよ婆婆の空（病やゝ快癒し、名を蘇生坊と改めて）
 あゝまゝよ生きても龜の百分一（辭世）

二三 畫の悲しみ

作 者

【國木田獨歩】 クニキダドツボ。明治四年七月十五日下總國銚子に生る、幼名龜吉。父は蕪播州龍野藩士國木田專八。母はまん子。異母兄二人あり。七年（四歲）母に伴はれて、上京。一家下谷徒士町脇阪侯の邸内に住す。九年（六歲）父の職を周防國岩國裁判所に奉ずるに會し、一家同地に轉住。十年（七歲）一家廣島に轉住。弟收二生る。十一年（八歲）一家また岩國に轉住。錦見小學校に入學す。十四年（十一歲）一家山口に轉住。今道小學校に轉學す。十八年（十五歲）山口中學校に入學。十九年（十六歲）一家萩に轉住せしも、獨り留まりて山口中學校寄宿舎に入る。二十年（十七歲）上京。東京専門學校英語專修科に入學。後英語政治家に轉ず。二十二年（十九歲）クリスト教を信じ、一番町教會牧師植村正久に依りて洗禮を受く。二十三年（二十歲）鳩山和夫の東京専門學校校長となるに方り、これが排斥運動をなして納れられず、退學。尋いで一家の居住せる山口縣熊毛郡麻郷村

へ退き、靜かに修養に志し、高青邱、ウオーヅオース、カーライル等を愛讀す。二十四年（二十一歲）麻郷の隣村田布施に私塾を開き、少年子弟を教育す。教へたる課目は英語及び數學。二十五年（二十二歲）八月、遽に心を決して再び上京。弟收二を同伴す。友人數名と共に青年文學會を起し、雜誌「自由新聞」に入りて初めて新聞記者となる。支給されたる月給參圓也。同月十六日退社。九月、徳富蘇峰の紹介、矢野龍溪の周旋の下に豊後國佐伯鶴谷學館に教頭として聘せられ、弟收二を伴うて行く。當時熱心なるクリスト教信者たり。二十七年（二十四歲）夏七月たまたま日清戦争起る。九月六日、弟收二及び塾生四人を率ゐて上京。九月十一日、牛込區南榎町に家を賃して自炊生活を始む。九月十七日國民新聞社に入社。十月十九日從軍記者として軍艦千代田に乗組む。「愛弟通信」國民新聞紙上に現はる。二十八年（二十五歲）三月、歸京。雜誌「國民の友」の編輯に従事す。六月、佐佐城本支の娘信子と相識る。九月、北海道空知川沿岸に赴き、地所の選定を爲す、事ならずして歸京。十一月十九日妻信子と共に居を相模國逗子に卜す。二十九年（二十六歲）四月十二日妻信子失踪す。七月、失戀の瘡痍苦悶を癒せんが爲め、米國に渡航を思ひ立ち、京都なる内村鑑三に就いてその手續を諮る。九月、東京市外澁谷に卜居。十一月、田山花袋・柳田國男等と相識る。三十年（二十七歲）四月二十日田山花袋と相携へて日光に赴き、照尊院に寄寓。處女作「源をぢ」を作る。四月二十

九日、最初の「獨歩吟」を「抒情詩」に於いて公にす。三十一年（二十八歳）一月五日、第二の「獨歩吟」を「山高水長」に於て公にす。四月、報知新聞に入社。三十二年（二十九歳）二月、妻治子を娶る。三十三年（三十歳）夏五月報知新聞社を退き、家計漸く窮迫を極む。十二月、民聲新聞社に入る。三十四年（三十一歳）三月十一日、第一文集「武藏野」を出版す。代議士たらんとして下總國銚子地方を運動す。六月二十一日、星亨暗殺せらる。尋いで民聲新聞社を退く。十二月、妻子をその室家に託して獨り神田區駿河臺侯爵西園寺公望邸に寄寓す。三十五年（三十二歳）二月、齋藤弔花・原田東風等と共に居を相州鎌倉に卜す。十二月、矢野龍溪の慫慂を受けて近事畫報社に入る。三十六年（三十三歳）三月、「近事畫報」の前身「東京畫報」第一號を發行す。三十八年（三十五歳）「獨歩集」出版。「近事畫報」漸く衰運に向ふ。三十九年（三十六歳）三月、「運命」出版。八月二十四日、獨歩社を芝區櫻田本郷町に起す。四十年（三十七歳）四月、獨歩社破産す。二十三日東京市外西大久保村へ轉住。五月、「濤聲」出版。六月、相州湯ヶ原に赴きて病を養ふ。十一月、常陸國湊町所在杉田恭介所有の別荘に赴きて病を養ふ。四十一年（三十八歳）二月三日相州茅ヶ崎南湖院に入院。四月、知友二十八名相諮りて、その病床に「二十八人集」を贈る。六月二十三日、同所に於いて逝く。二十四日、茅ヶ崎六本松に於いて荼毘に附す。二十九日、東京青山墓地に葬る。（獨歩全集、略年譜）

柳田國男氏曰く、

彼の生涯が一つの時代であり、彼の事業が一つの傳統として、永く世に留まるべきものであつたことは、回顧によつて殊に明かになるのであるが、しかもその辛苦の果實に至つては、播ける人自ら之を收穫することを得なかつたのである。

獨歩が物を觀る力、敏く感じ鮮かに語るの才能は、悩み多き自身の生活をさへも、批判の外には遺さなかつた。獨歩吟客の四つの文字以上に、適切に彼が青年期の生活を、説明する名稱は無かつたのである。彼は生れながらにして既に漂遊の兒であつた。世間普通の意味における故郷といふものもはもたなかつた。國木田の家はもと淡路から出たらしい。龍野の藩士にして龍野を知らず、銚子に生れて四つといふ年に出てしまつた。友人の記憶が誤らぬとすれば、彼の父は明治初年に、海路奥州に赴かんとして銚子の沖に於て破船した。さうしてこの浦に漂着して本國と音信を絶ち、土地の婦人を娶つて彼兄弟を生むまでの、因縁を結んだのである。父は快活にして親しみ易く、世相に對する獨自の見解を具へてゐた。母は病身で幾分か幽鬱であつた。さうして獨歩はその外貌によつて判ずれば、確により多くを父の筋から受繼いでゐたやうである。

しかも親子の縁は深いとは言へなかつた。少年の日に家と別れて、學校の生活に入つてから、直ち

に獨歩の淋しい旅は始まつて、それが年久しく続いたのである。山口中學の同窓には、現代の名士が多い。その人々の追憶の中には、今でも精悍にしてよく反抗した美少年國木田龜吉が往來してゐる。喧嘩をしてはよく人を引搔くので、ガリ龜といふ綽名をさへつけられた。それを江木翼君に素破抜かれて、大笑をしたのも亦二十何年の昔になる。短小虚弱にして意氣のみ徒に剛なりし彼は、此の如くしてその孤獨を防衛しなければならなかつたのである。

早稻田の政治科では校長排斥の運動を企てて退學させられた。さうして自ら好んで難關生活に入つて往つたのである。幸ひにして彼が天分は夙く目さめた。詩の感激と自然に對する愛情とは、此間に於て著しく成長し且つ彼を柔げた。その經驗の一つ一つが花の如く鮮麗に、彼が後年の製作の上に咲き亂れて居ることは讀者の極めて容易に認め得る所であらう。しかもその精細なる記憶が、當時何等の豫定も無い孤獨無聊の一遊子の、偶然の觀察に出たといふことは、彼を解せざる者には奇跡である。

獨歩はその無邪氣なる咏歌を以て、美しい多くの山水を友とし得た如く、他の一面には更に明敏なる理解を以て、能く時代の最も重要な知識性格と接觸することが出来た。新宗教と共にもたらされた人間趣味、解放の土に芽ぐんだ活潑なる政治思想、その他ある限りの新機運は、隙も無く彼を教へ

且つ刺戟した。詩人も記者も農夫も代議士も、何れも彼を誘ひ又彼に適したかも知れぬが、悲しいかな生涯は限りがあつて、之をすべてのものに分つには足りなかつた。しかもこの間に處して必ずしも時流と共に浮沈せず、別に一個の獨立した立場から、弘く人生を觀て、その最も幽かなるものの中に、幾多の「忘れ得ぬ人人」を見出したといふことは、勿論時代が彼をして斯くせしめたのでは無かつた。即ちさういふ時代が彼の手を以て、新たに造り開かれたのであつた。(現代日本文學全集——國木田獨歩集)

出 所

「獨歩全集」全一冊。大正九年十二月二十日、博文館發行。定價參圓八拾錢。

國木田獨歩の小説及び新體詩を輯めたものである。

要 旨

一些事の上に人生の一角を示した作である。少年時代の競争心、延いて起る嫉妬心、それは意外にも猛烈なものである。併し結局尊敬すべき友人は對手の心に如何なる印象を與へるものかに就いて考察させたい。

段 落

一、最初から二行目まで。

この話の冒頭。

二、好きこそ物の上手……自分はよくこの消息を解して居た。(一三五頁の六行目まで)

岡本・志村二少年の性質。

三、或日學校で生徒の……野山を寫生して歩いたことも幾度か知れない。(一四四頁の初の行目まで)

1、少年の心理状態。

2、天才の着眼點は畢竟同一に歸する。

3 誠意は遂に人の心を和げる。

四、間もなく自分も志村も……(終りまで)

1、互に中學に入學してからのこと。

2、志村の病死は、なつかしき故郷も却つて悲しみの懐ひ出となるに過ぎなかつた。

解 釋

【好きこそ物の上手】 好めば必ず上手の境に至る。〔大國〕

【壘を摩す】 ルキをマス。(一)・敵の壘に迫る。(二)殆どそれと同等の地位・技倆に達せ

んとす。匹敵す。〔大國〕こゝは(二)

【温順しう】 オトナしう。

〔大國〕

【雉いで来る】 吹きなびかせて来る。

【鼻柱を挫く】 先方の慢心をくじく。恥をか

【暗愁】 いふに云へぬ深い悲しみ。

かす。鼻を折るともいふ。〔大國〕

【闇にも歡びあり、光にも悲しみあり】

【荒膽】 アラギモ。荒肝。きもたましひ。ど

一體世の中には、人知れぬ闇い半面にも歡び

きも。〔大國〕

があるが、それと反對に、悲しさうにもない

【髭髯】 シゼン。くちひげ。唇の上を髭とい

明るい半面にも心の悲しみがあるものだ。

ふ。兩頬を髯といふ。因に頬下を鬚といふ。

【まじまじ】 (一)しげくまばたきをするこ

〔大國〕

と。(二)平氣なるさまにいふ語。しやあしや

【淙々】 ソウソウ。水流の貌。又その聲。

あ。〔大國〕

鑑 賞

描寫がすべて自然で、少しの無理もないどこまでも寫實的な圓熟した筆致である。その中に少年の心理状態・個性などが遺憾なく現されて、深く人生の一角に觸れてゐる作である。幼き者に對する性情陶冶の好資料と思ふ。